

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, Inc.

ELEC

BULLETIN

No. 21

July 1967

卷頭言 日本の英語.....	朱牟田夏雄	1
日本の英語教育.....	國弘 正雄	2

THEORIES OF LANGUAGE AND NEW APPROACHES

TO LANGUAGE TEACHING IN BRITAIN.....	V.C. Bickley	6
--------------------------------------	--------------	---

■特 集 ■

日英両語表現比較 一言理と実際一.....	三戸 雄一	14
日英両語の比較研究論文目録.....	編集部	19

PalmerとFriesとの接点（その2）.....	山家 保	26
----------------------------	------	----

Oral Approachを実践して.....	鈴木 和夫	31
-------------------------	-------	----

名著解題 O.Jespersen, A.C.Baugh, H.B.Allen	36
--	----

——国広 哲弥, 木原 研三, 田中 春美

書評 W.F.Mackey, <i>Language Teaching Analysis</i>	吉田 一衛	42
--	-------	----

英語教育相談室 LLについて.....	橋本 貞雄	46
---------------------	-------	----

GAKKEN



日本の英語

朱牟田夏雄

NHKのラジオやテレビを聴いていて、ひどく気になることのひとつは（本誌がNHK関係者の眼にふれる確率がどれくらいなのか、私にはあまり判断の材料がない。もし非常に低いとすると、これは犬の遠吠えみたいなことになってしまうが）たとえばドラマ、ドレスというような言葉を、アナウンサーが頭の「ド」のところにアクセントをおいて発音することである。すこしでも外国語のわかる人には、何も説明の必要はないが、原語なら頭の d のところにアクセントが来るなどとは夢にも考えられない。それが日本語にとり入れられると、ドーラーマ、ドーレスと三音節扱いになってしまって、その一つ一つは対等の音価を持つかのように感ぜられるのだろうか。それでもそれだけなら理くつからいって、「ド」にアクセントがゆく可能性は½のはずだが、きたいにその「ド」が優位を占めてしまうのはなぜなのだろうか？ 知らない外来語が出て来たら最初の音にアクセントをおいて発音せよ、と各アナウンサーは教育されているという話を聞いたことがあるが、これはうわさ話だから、真偽のほどは明らかでない。が、そうかも知らんと思われるくらい、こういう例は多いのである。「アイディア」などという言葉も、「アイ」が強調されて発音される。すこぶる耳ざわりである。今まで、これを書いているそばで、défence というのがあった。サッカーの放送の中である。

滑稽に感じて、それだけで笑って（あるいは呆れて）すますことのできる人の場合はまだよい。しかし放送は中学生でも小学生でも聞いている。一度「ドラマ」（以下平ガナはアクセントを示すとご承知ありたい）とおぼえこんで、あとで「ドラマ」とおぼえ直さねばならぬとしたら、こんなばかげた話はない。「あいディア」に至っては、相当なインテリでも感化されて、日常そう発音している人がある。アナウンサー諸氏たるもの、もうすこし自己の職責を自覚してくれないと困る。いや、あれは外国

語じゃない、日本語として発音しているのだというのなら、それなら劇とか着物とか、ちゃんとした日本語を使ったらどうだと言いたい。（着物はチト無理かな？）

日本語は幸か不幸か、アクセントの位置が少々まちがっても、すこし耳ざわりなだけで、そのために全然意味が通じなくなるというおそれはきわめてすくない。だから日本語ではアクセントがあまり大きな意味を持たず、各語の標準的アクセントを記載した辞書があらわれたのも、ごく最近のことにつぎない。私の素人考えでは、視覚型の言語といってよいのだろうと思う。早い話が‘ELEC’にしても、関係者の間ですら、人によって「えレック」といったり「エレック」といったりしているのではないかろか。それであまり不都合のないのが日本語の世界である。そういう言語で育っているために、われわれは英語や中国語のように抑揚やアクセントを重視する言語に対しても、母国語に対するのと同じ心がまえで立ちむかって来た。発音重視の必要が頭では理解できても、実践面はこれにともなわない。私自身 Canada の Ottawa という都市の名を、合衆国や当のカナダで、相手に通じさせるのに何度も苦労した経験がある。何のことはない、むかし地理でならった記憶から、ta のところにアクセントをおいて発音していたからのことだ、実は「あタワ」のようにいわないと通用しないのであった（この場合は上記第一音節主義でよいのだが、アナウンサー諸氏はこういう場合はたぶんそれに従わないのである）。

ELEC 式の教育がだんだん普及して、耳からの英語がひろまってゆくことは、だんだん上のような話を過去のものとしてゆくことと、大いに期待している。しかし、まだまだわれわれの努力が倍加される必要があるだろう。前途の光明を望みつつ、着実に前進してゆきたいものである。

（ELEC 理事・東京大学名誉教授）



日本の英語教育

國 弘 正 雄

東大の平野敬一さんが、ある雑誌に日本の大学の英語教師の心がけを批判して、「かんな」の使い方をろくに知らないくせに、いたずらに建築理論をふりまわしている、という意味のことを書いておられるのが、私の目に触れて思わずウーンとうなってしまった。まことに適切な比喩であり、日本の大学英語教師の痛いところをきびしくついて、余すところがない。英語の運用能力がきわめて低いにもかかわらず、深遠な文学理論やら、小むつかしい言語理論やらを説くことに寧日ない英語教師が、あまりにも多すぎる。しかもかれらが実際に教えているのは、英語ではないか、というのである。英語の運用能力を身につけることには全く不熱心で、そのために努力することはなにか自分たちの沾券にかかる恥ずべきことだという認識すら存在するらしい。しかしこれこそ滑稽で、英語を教えて口すぎをしている者として恥ずかしいことではないだろうかといふのである。

この発言が平野敬一さんの口から出たことには、大変な重味があり意味がある。第1に平野さんの英文学者としての力量には定評がある。中堅の英文学者としてのかれのいままでのしごとが、質量ともに立派なものであることは、私のような門外漢にもきこえてくる学界の評価である。その意味で、世のいわゆる実用英語屋が、我が田に水を引く議論をするのとはちがった説得力が、かれの発言にはある。

第2に、平野さんの英語の力は抜群であるらしい。英語の力というのは、話し書く能力のことを指していくのだが、とにかく立派なものであるときいている。たしかアメリカ育ちの二世とかいわれているが、ただあちら生まれという程度のものではないらしい。なにしろカナダのマギル大学に交換教授として出向かれたときにも、本国人の大学生を相手に、英文作法や Creative writing やらを講じられたとかがっている。これは大

変なことである。私なども11年以上を英語を母国語とする国で英語を使って生活し、むしろ英語が飯の種でもあったのだが、大学生を相手に英語を書くことを教えるなど、思いもよらなかった。いまだに和文英訳をたのまれたり、ちょっとした英文を書いて、なにかに発表をする折には、しかるべき本国人にみてもらうことを常としている。しかも朱筆を存分にいれられて、どうして俺はこう書けないんだろうと、いささか気おちがすることがしばしばである。なにか amusing な感じを本国人には与えるらしい。それに冠詞とか前置詞とか、まだ本当によくは使いこなせない。平野さんとはできがちがうであろう。情ないことである。

第3に平野さんが東大の先生であるという点に意味がある。これは周知のことだから、歯に衣を着せる必要はないだろうが、東大の英文科では、あまり英語そのものの訓練を重視していないらしい。英作文とか英会話とか、英語による授業などというのは、あるかなきかの淋しさで、カリキュラムの大半を占めるものは、英文学に関する高踏的な講義や、難解な語学理論についての演習であるらしい。実際的な英語を教えることなど、アカデミズムの牙城としての東京大学英文科には、無用なわざだということなのであろうか。

このような東大英文科の中から、その後秀の一人の筆をかりて、現状に対するきびしい批判がでてきたことは、したがってきわめて大きな意味があるようだ。私は思われるのである。なにかが大きく変わろうとしているのかも知れない。大きな変化が、物理的な外圧によってではなく、内部からのいわば化学的な過程を通して、おこりつつあるのかも知れない。その意味で、平野さんの発言には、希望を抱かせるものがある。大いに喜んでよい。

大体、日本の各大学の英語教師のかなりの部分が、ご

多聞に洩れず東京大学の出身者である。かれらはまちがいなく優秀な人たちで、私の同僚のだれかを思い浮かべても、かれらが立派な学者であり研究者であることは、一点の疑いの余地もない。ただわれわれの共通のしごとである英語教師としてみた場合には、英語そのものに対する関心と興味の度合が、十分であるとは必ずしもいえないようと思われる。平野さんの比喩をかりていうなら、「かんな」それ自体に対する興味は、かなり稀薄だし、「かんな」の使い方に習熟するための精進にもやや欠くる点があるようである。いやむしろ「かんな」を使うことなどは、叩き上げの大工のすることで、学者の目指すべきことではないとする態度すらみられる。私のような叩き上げの大工には、それがいたって淋しいことだし、こんなことで日本の大学の英語教育はどうなるのだろうという懸念も残る。

しかし東京大学の英文科の学生自身も変わってきているらしい。どなただったか、英文のある教授がシェクスピアのフォリオ版かなにかについて、高度に専門的な講義をしておられたときに、学生の1人が立ち上って「先生はぼくらが全部、英文学者になるとでもお考えですか」と囁みついたといふ。事実、東大英文科の卒業生もその多くは、広告代理店や、製造企業や、金融機関へと就職していくのである。プラグマティズムの当世書生気質からすれば、かれらが学校の授業になにを望むかは、容易に想像がつくというものである。英語が実際に話せ書けることが、かれらにとっては就職の際に有力な武器になるのだし、企業に入ってからも優位に立ちうる所以なのだから、なんとしても、それこそ東大英文科というプライドにかけてでも、物にしたいという強い希望がでてくるのは、理の当然であろう。

このような背景をあわせ考えてみると、たしかに平野発言を大きな変化の前兆とみる私の解釈は、そうあやまつものではないことが、確信される。そして私はこの際に、東大英文科を中心とする大学の英語教師が、学生の要望や企業という形を通しての社会の要請を、素直に受けいれるべきであると信じている。

といつても、私はただ単に、学生や社会の要望に屈して和を構うべきだといっているのではない。いたずらにかれらのプラグマティックな要請に応すべきだと主張するのでもない。ましてや時流におもねて、いわゆる実用英語なるものの普及を鼓吹するものでは断じてない。

第1に私は、英語を話し書くことを自らの体験としてもつことが、英語を正しく読み、英米人のエトスをあやまりなく捕捉するための至上の手段であると信じているからである。そして第2には、自らのたのむところあるもののみが、学生や社会の時としては不当な要求に対処

しあわてふためくことなく、対等の立場で物をいい、自らの信ずる正しい方向をまもり、教育の尊厳と中立とを維持し、自主的な歩みをつづけていくことができると考えているからである。

以下私は、その根拠ともいえるものを、少しく述べてみたいと思う。

第1の点について、私は次のように考えている。世間ではよく「英語を話すことが一番むつかしく、書くことがその次にむつかしく、読むことは一番やさしい」という意味のことをいう。「英語を読むのは楽だが、どうも会話は苦手でね」という発言が、一般の人びとはもとより、専門の英語教師の口からも、しばしばきかれる。はたしてそうであろうか、というのが私の率直な疑問である。英語を読むことは、それほど容易なわざであろうか。私はむしろ福原麟太郎教授とともに、英語を読むことが一番むつかしく、書くことがその次で、話すことは一番やさしいといいたいと思う。

これは決して奇を衒っての言ではない。また11年あまりを英米に過したという私の特殊な背景に発するものでもない。英語を読むことの至難さを、毎日のように痛感させられ、自らの力の不足をたえず嘆いている1人の日本人の心からの声とうけとていただきたいのである。

英文に接して、まず一通りのことは、流石に了解がつく。辞書的な解釈ならば、まずさほどに苦労しない。しかし辞書的なものの背後に、どれほどのものが、連想として、歴史的、社会的な背景として、幅広くひろがっているのかをあやまりなく捉えることは、もう不可能に近い。「わがうちに虎がバラの香りをかぐ」という現代詩の一節を前にして、まず思いおこされるのが「牡丹に唐獅子」の屏風絵では、この英詩の一節を理解したことになるのかどうか、いかにも心もとない。いやはなしは、難解をもってなる現代英詩だけには限らない。一見いかにも平凡にみえる叙述文にも、われわれを捉える陷阱は、あちこちに口を開けている。一つ一つの単語や成句にしてからが、われわれがおちこむのを、いまや遅しと待っている。私はある雑誌にここ2年間ほど、「アメリカにおける言語と文化」という小論を連載してきたが、あれを書くために、さまざまな雑本のたぐいを読みながら、一つ一つの単語が背負っているアメリカの風土や歴史や国民性や社会背景の根ぶかさに、たえずおそれにも似た気持を抱かされつづけてきた。ただアメリカの場合は、10年近くをあの国に過し、40数州に杖を曳いて、どこに問題がありそうかは、どうやら見当はつく。しかしイギリス英語となるともうどうにもならない。ロンドンのタクシー運転手のコクニイ訛や、グラスゴーで10日ほど泊めてもらったスコットランド人の一家の英語が、どうに

もわからないで困りはてたというだけではない。A rolling stone gathers no moss. という諺が、イギスではむしろ非難の意味をこめて用いられるという事実は、私にはなかなか実感としてうけとられない。アメリカのように social mobility が高く、40までに職場を数回かわることが能力の高さの象徴である国では、rolling stone はむしろ好ましい存在であり、moss の方が好ましくないものと考えられているからである。マーガレット・ミード女史もいっているように、What is your favorite color? という設問は、アメリカ人に対する同様、私には意味のある設問だが、イギリス人にとっては全くナンセンスでしかないという。なんについての好みの色か、帽子か、背広か、ネクタイかと、イギリス人なら必ずきかえすだろうといわれてみると、なるほどそうかなとは思う。アメリカのように、多人種多民族の複合社会では、一般に価値の尺度が単純なものに収斂する傾向があるが、イギリスのような比較的単一な社会では、そういうことではないということなのである。しかし、私は、イギリスの階級方言の複雑さにはヘキエキする。U と Non-U いう 2 つほどの分類では、どうにもかたづかないほどの多様性は一体どう説明できるのかと、いぶかしく思う。そして少なくとも私にとっては、あれほど言語的に複雑多岐なイギリスの小説を読むことは、それだけで大変なしごとだと、三十六計をきめこむのである。

英語を読むことが一番やさしいなどとは、夢申すまじ、というのが、したがって私の感じである。

ではこのように至難をきわめる英語の牙城を抜く手だけは全くないのであろうか。ホーブレスなこととして、あきらめてしまうべきなのであろうか。私は必ずしもそう悲観してはいない。いや方法はあると信じていればこそ、英語を読むことが一番大切だといいながら、読めさえすれば話したり書いたりすることなど無用の長物だと広言してはばかりず、実際に英語を使ってみようとしたい人びとの意識を、まことにおかしいものに思うのである。

いまさらいうまでもなく、ある言語は、その民族の精神生活の投影である。しかもその精神生活がどのようなものであるかは、この投影においてこそ、もっとも経験的、実証的に捉えうるのである。したがって言語は單なる手段でおわるべきものではなく、言語自身として重視されなくてはならない。人間のもろもろの行為は、すべて人間の精神の反映であるが、人びとの行為のうち、もっとも確実に捕捉できるのは、言語活動をおいてほかにはない。したがって過去における言語活動を把握することが、すべての歴史認識の基礎であり、現在のそれを捉えることが、現在というものの認識の基礎である。こう

考えてくると、自己の歴史認識を完成し、現在を正しく理解する上に、言語の修練は必須のものであるといえる。ただ単に古人の、もしくは外国人の言語を、受身の形で読むだけでは十分ではない。自分自身も古人の言語を用い、異民族の言語を使って、物を書き話してみることが、古人の、また異国人の心に接する道なのである。われわれ英語学習についていいうならば、英米人の心と連なる英語という言語を、「みづからの事」として思い、かれらの生活への認識を完成させるためには、どうしても英語を自分で操ってみなければならぬということになる。

この点、本居宣長が「うひ山ふみ」の中で述べていることは、われわれにも多くの教訓をもたらしてくれる。この鈴屋の大人は、次のようにいっている。

すべて萬々の事、他のうへにて思ふと、みづからの事にて思ふとは、浅深の異なるものにて、他のうへの事は、いかほど深く思ふやうにても、みづからの事ほどふかくはしまぬ物なり。哥もさやうにて、古哥をば、いかほど深く考へても、他のうへの事なれば、なほ深くいたらぬところあるを、みづからよむになりては、我カ事なる故に、心を用ること格別にて、深き意味をしこと也、さればこそ師も、みづから古風の哥をよみ、古ぶりの文をつくれとは、教へられたるなれ。

宣長のことばは、むろん古歌の学習にのみ適用しうる方法論ではない。われわれの英語の学習にも、そのままあてはめることができる。事実、中国人よりも典雅な中国語を操るといわれ、中国人の心情を捉える点において独特な境地を開拓したといわれる前京大教授の吉川幸次郎博士も、「江戸時代の儒者が漢籍を讀んだあの正確無比な讀書力は、漢文を作る修練が、一方では必ず行なわれたからである」と述べて、言語そのものの学習の必要性を説いておられる。そしてさらにことばを継いで、「明治以後の中国研究は、この必須の修業を怠っているために、その実力ははなはだしく低下している」ともいっておられる。中国文学界のことはもとより私の知るところではない。また江戸時代の儒者の、中国語ないしは漢文の能力についても、私はほとんど無知である。しかし伊藤仁斎・東涯親子とか、荻生徂徠などといふ人の漢文は、当時の中国人の学者にみせても、さほどリズムの外れたおかしなものではなく、むしろ格調の整ったすぐれた文章であったときいている。そして現代のわれわれの中に、本国人の学者専門家にみせて恥しくないほどの英文を繰れる人が、そう数多くあるとも思えない。ということは英語が、実は十分に読めていないということであり、さらに換言すれば英米人の心、つまりエトスが本当にわかっていないということにはならないであろうか。

つまり英語が読めさえすればよいといって、実際に英

語を使ってみることを避けていては、いつまでも英語が読めるようにはならぬということなのだ。英語を書いたり話したりすることは、なにもコレボンのクラークや、通訳にとってのみ必要なことではないのである。英語を自らも原体験することによってのみ、書かれたものを自らの意識の中で、その原体験というフィルターを通して正しく濾過し、あやまりなく解釈することができるということなのだ。その点、日本の英語教育界において、読書派と、実用英語派との間に、大きな意思疎通上の断絶があることを残念に思う。一部の実用英語屋の跳梁を、私も苦々しいものにみている。單なる口舌の徒をつくり、ベラベラと一通りの用さえ足せればそれで十分だなどという英語を私は信じない。それは横町の英語教授ではあっても、英語教育ではありえないからだ。通じさえすればという安直なものに、教育的価値はありえよう筈がない。それを白眼視する読書派の先生がたの気持には共感できる。それでいてなお私は、読書派の人たちのやり方は、まちがっていると断ぜざるをえないのである。その理由は、いままでに述べてきたとおりである。そんなやり方では、眞の読書力はつきっこないというのが一番の理由である。そしてさらに前述の第2の点が問題になってくるからである。

さきにも述べたように、学生や社会からの役に立つ英語に対する要望は、日ましに高まっていく。こんご日本が国際的に生きていかねばならぬことが明白である以上、この傾向はますます増大の一歩をたどるであろう。経済の自由化は、社会全体の国際化をもたらす。そして学問や大学もその潮流にやがては捉えられるであろう。これは不可避的な事態であり、逃れるすべはない。

ところが日本の大学の英語教育さらには英語教師には、この要請をうけて立つだけの準備がないのではないか。「あの人は大学の英語の先生にしては、英語がよくできる」とは、巷間よくきかれるところであるが、これはいかにもおかしな、しかも危険な事態である。われわれ英語教育にたずさわっているものは、まず自らの力を涵養して、自らのむところのあることを期せねばならぬ。いたずらに、話すことなんてどうでもよいのだ、といっているだけでは、それは単なる負けおしみでしかない。自分たちができないから、あんなうまいことをいって、自らを偽っているのだ、としかうけとられないであろう。われわれはイソップの狐になって、sour grapesなどといわれたくはない。いやわれわれの面子などはどうでもよい。もっと危険なのは、われわれの無力に乗じて、教育的でない側面が強調され、いたずらに実用性をのみ強調する勢力が台頭してきて、それらに手もなく押し切られてしまうという可能性である。しかも時代の要請はか

れらに味方しているとすらいえるであろう。時代の要請という大旗を押したて進撃してくる相手に対して、こちらが弱体であれば、なにもできないままに城をあけ渡さざるをえなくなる。負けおしみをツツツツいってても、どうにもならぬ。実用語学をこちらも敗けぬほどに心得た上で、しかもなお日本の英語教育のあるべき姿を説いてこそ、はじめて説得力もあるというものであろう。それでなければ、財界を中心とする社会がもしかりに不当な要求をもちだしてきたときに、なにをたのみに、正しい教育のあり方を説こうとするのであろうか。大して実があるとも思えない、一部のベラベラ族が、時を得がおに、跳梁を事とするのを、指をくわえてみているともいうのであろうか。教育の正しい姿が、実用という目的の前にねじまげられ、偏向を余儀なくされるのを、黙視していくというのであろうか。

事実、政財界を中心に、日本の英語教育をなんとかせねばという動きも、段々と力をえつつある。幸いなことに、これらの動きの中心にある政財界の人びとは、いずれも知性と良識とをもった尊敬すべき人びとばかりである。たまたま知己を有するこれらのリーダーの integrity を、私はいささかも疑うものではない。ELEC の活動に献身的な奉仕をされている竹内俊一氏も、日頃私の敬愛してやまない大先輩である。

しかしながらわれわれの立場と、政財界のリーダーの立場とは、当然のことながら少なからず異なる面をもっている。われわれが英語教育の専門家として発言し、かれらとの全き協同作業を通じて、日本の英語教育を正しい軌道に乗せていくためには、どうしてもわれわれ自身が、自恃の精神を強力に抱きつづけなければならない。それでこそわれわれの参加が、かれらにとっても有意義なものになろうし、日本のためにも役立とう。そのためにはどうしてもわれわれ自身がまず力をつけなければならぬと、私には思われてならない。

(中央大学講師)



THEORIES OF LANGUAGE AND NEW APPROACHES TO LANGUAGE TEACHING IN BRITAIN

Dr. V. C. Bickley

Differences in language teaching methods may be the result of different theories of language, different types of language description and different ideas on language learning. I should like to consider these three factors as they relate to developments in the methodics of language teaching in Britain and, in particular, to the methodics of teaching English as a foreign language.

Theories of language..... Linguistic studies in the twentieth century have been characterised by a rational approach to language in its contemporary, living forms. The main emphasis has been on speech, that is to say, on language as a means of communication. The nature of the behaviour we call language has been examined from all sides by scholars who have assigned to it a dynamic role and have drawn attention to its many-sidedness and systemic nature. Hence, Dr. M. A. K. Halliday, one of Britain's most distinguished linguists, has, in the best short definition I know, described language as "conventionally patterned noise, contextualised." In this definition, Halliday incorporates both formal and functional aspects. Formal considerations are dealt with under "conventionally patterned noise." Functional definiton enters with the word "contextualised" which deals with the way language acquires its meaning.

My own definition of language is longer and clumsier than Halliday's and obviously derivative. It is introduced here because

sections of it can be applied to contemporary developments in language learning technique.

An analysis of various assumptions made by scholars about language can lead to a statement characterising it as systemically organised vocal symbols which are arbitrary and conventional and which are restricted to human beings and occur in contexts of situation. If we put this statement into other terms we can say that language has both a formal aspect and a functional aspect. The formal aspect relates to what language is and the functional aspect relates to how language is used.

Whilst recognising the interdependence of these two aspects of language, I would include under the term "formal aspect" that part of the statement which refers to language as systemically organised vocal symbols which are arbitrary and conventional, and under the term "functional aspect" that part of the statement which restricts language to human beings and relates it to contexts of situation.

Types of language description..... A useful beginning to our discussion of modern developments in language teaching method may be made if we abstract from our definition the reference to the systemic nature of language. That language is systemic, that it consists of a system of systems, is now generally agreed, although scholars differ in their attitudes towards the correlations

which exist between the systems and to the categories which they assign to them.

Implicit in the view that language is systematic is the belief that no language consists merely of a random collection of sounds and words. There is abundant evidence of a precise patterning amongst parts which are mutually interdependent. The parts are organised in their own individual systems and a complex web of interrelationships can be apprehended.

These interrelationships have been examined by scholars from various standpoints. Wittgenstein illustrated them from the point of view of the philosopher and the logician in a series of analogies between language and games.¹⁾ De Saussure, whilst considering language to be a mode of behaviour, suggested that it was also a system of signs in which the essential thing was the union of meanings and sound-images.²⁾ Leonard Bloomfield believed that every language consists of a number of signals, linguistic forms—a linguistic form in his definition being the situation in which the speaker utters it and the response which it calls forth in the hearer.³⁾

M. A. K. Halliday followed J. R. Firth in presenting a theory for linguistic description which recognised the systematic patterning of language. The theory consists of a scheme of interrelated categories which are set up to account for the data and a set of scales of abstraction which relate the categories to the data and to each other. The data to be accounted for are observed language events, observed as spoken or codified in writing.

Halliday's categories, unit, structure, system and class are used by J. C. Catford for a short account of general linguistic theory in which he treats language as a type of patterned human behaviour manifested in specific kinds of overt behaviour (e.g. vocal

movements) on the one hand and on the other hand related to specific objects and events in a situation. Both of these—vocal movements and actual events—he regards as extralinguistic since they are the phonic substance in which vocal activity is manifested and the situation (or situation substance) to which this activity is related. The language itself, however, is the organisation or patterning which language behaviour implicitly imposes on these two kinds of substance. Language is therefore *form* not substance. Levels of medium—substance (phonic substance for the spoken medium and graphic substance for the written medium), and situation (or situation substance) should thus be distinguished from the internal levels of language, phonology and graphology (medium form) and grammar and lexis (formal levels).

In recognising levels of substance which are extralinguistic and yet connected by language behaviour to the internal levels of language, Catford is illustrating the systematic relationship that every utterance has to the language in which it is made and also the relationship it has to the personality of the speaker or writer, and the situation in which he is involved. This latter relationship cannot be systematised unless the context of situation is known. Many situations might arise during the course of one day in which what is apparently the 'same sentence' is uttered appropriately. The situations need not, however, have anything else in common and the 'same sentence' in a different situation is often therefore a different sentence⁴⁾ although, as has recently been shown, an examination

-
1. L. Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, Basil Blackwell, Oxford, 1958.
 2. F. De Saussure, *Course in General Linguistics*, Peter Owen Ltd, 1960, p.87.
 3. L. Bloomfield, *Language*, Henry Holt and Co, 1933, p.158.

of particular texts, preferably recorded in secret, can describe the correlations between language patterns and other language patterns and also language patterns and non-language patterns and supports the belief that language involves a form of human activity as well as polysystemic internal relationships.⁵⁾

When we speak of human activity we are, of course, referring to social behaviour. In a recent paper, an American linguist, William Labov, asked the question '...is social variation of language in the sense of the linguistic oscillations and contradictions produced by the complexities of community life outside the scope of general linguistics?'⁶⁾ The answer to this question, as far as British linguists are concerned, is *no*. The study of language as social behaviour is central to the work of British scholars.

At the University of London Language Research Centre, for example, a survey of educated English usage is being conducted by a team of linguists under the direction of Professor Randolph Quirk. The purpose of the survey is to make explicit the facts of everyday usage and to investigate the extent to which an individual's selection of grammatical form varies as between speaking and writing, informal and formal occasion, specialized and non-specialized material.

The survey team is assembling for analysis a large corpus of English that is actually used, a corpus that is reasonably representative of the repertoire of educated professional men and women in their activities, public and private, at work and at leisure, writing and speaking. No corpus, of course, however large, could be expected to give information on all the grammatical structures of English. Psycholinguistic techniques have, therefore, been developed

to investigate the native English speaker's potential performance, to catalogue items in his linguistic repertoire that do not necessarily emerge in the actual instances of usage that an observer may assemble.⁷⁾

The survey is thus attempting to cover a wide range of the varieties of contemporary English. One particular variety is the language of literature and the grammatical analysis of literary texts is a new area for linguistic research. In literature, linguistic patterns are at their most sophisticated and the levels of sound, of lexis and grammar interpenetrate in complex and original ways. Samples of such patterns and levels are being scrutinised by linguists at the University of Leeds.⁸⁾

In Britain advances are taking place in what has variously been called 'socio-linguistics' and 'institutional linguistics'.⁹⁾

Institutional linguistics focusses on the relations between languages and varieties of languages and the people who use them. As far as English is concerned, investigations are proceeding into the effect of national language policies on the position and status of the language and the way in which varieties of English are shaped as a result of the contacts they make with other language varieties.

In other words, the institutional linguist is interested in the choice of resources which is made by societies and by individuals in those societies. This choice is exercised within the written and spoken media of a language when different types of language are selected for different communicative purposes as in religious, scientific and legal language, or when the style of discourse is determined by the relations between the participants, the setting and the topic as they occur in various social systems. The differences between the kinds of language thus selected have been labelled

differences of *register*.

Registers can be classified and subclassified according to the variability of the situations in which they are used. A schoolmaster in an English secondary school, for example, may be responsible for teaching history to eleven year olds in a third-year class and teaching the same subject to pupils in a seventh-year class of eighteen year olds. The master will presumably adopt his method of presentation to match the subject matter to be taught and the ages of his pupils. As he does this he will probably switch language registers to fit the changed situation. The same teacher, in between teaching periods, may shift to a third register in quiet conversation with individual pupils and, later, in the staff common room, change to a fourth register whilst talking to his colleagues.

The choice of register is wide for the individual in his own language. It can become wider and more complex when he operates in a second language or in a foreign language. Thus, an Indonesian university lecturer of Chinese race may be an expert in the field of economics and deliver his lectures through the medium of English. The choice of language in this situation may be influenced by the lack of suitable reading matter in Indonesian relevant to the subject. It may also be consequent upon the lecturer's own educational background if he has followed a course of higher study in an English-speaking country.

The variety of English spoken is not, however, determined by these factors alone. The register will be affected by the intercorrelation of other variables such as the listeners' experience of the English language, the setting, the sociological attributes of the students (age, sex, etc) and their ability to follow the lecturer's idiolect.¹⁰

marked, as it may be, by the characteristics of his Chinese dialect as he has learnt it in Indonesia and also by the fact that he may have learnt his own English through the medium of Dutch.

In this example, the choice of language determines the dialect used and the range of registers within that dialect. The original choice may be dependant upon a number of factors, including, in this case, a shortage of suitable texts in the official language and the speaker's educational background. It may also depend upon the speaker's attitude towards the language selected and the attitudes taken up by other people inside and outside his language community. These attitudes are important since they are a reflection of the value judgements passed by individuals and societies on whole languages and on language varieties such as dialects and registers. Like many attitudes, however, those relating to language and varieties of language are not always based on logical or factual considerations.

Thus, the assumption¹¹) that the only variety of English to be recognised as a

-
4. Compare J. R. Firth, 'My view was and still is, that "context of situation" is best used as a suitable schematic construct to apply to language events, and that it is a group of related categories at a different level from grammatical categories but rather of the same abstract nature.' *Studies in Linguistic Analysis*, Basil Blackwell, Oxford, 1957, p.182.
 5. In R. M. W. Dixon, *What Is Language?* Longmans Green and Co, 1965, pp.4-5, 105-165.
 6. William Labov, *Aims of Socio-Linguistics*, mimeographed.
 7. This summary of the aims of the Survey of English Usage has been drawn from R. Quirk's "Our Knowledge of English", *The Incorporated Linguist*, Vol. 6, No. 1, January, 1967.
 8. See "Linguistics and Style," N. E. Enkvist, J. Spencer and M. J. Gregory, Oxford University Press, 1964.
 9. The term was first used by T. Hill in an article in *Orbis*, Volume 7, 1958, pp.4 41-445.
 10. An individual speaker's characteristic way of using his own native language.
 11. e. g. in M. A. K. Halliday, A. McIntosh and P. Strevens, *The Linguistic Sciences and Language Teaching*, Longmans Ltd, 1964, p. 292.

model in the countries of the British Commonwealth before the second World War was Standard English grammar and lexis. spoken with RP (Received Pronunciation) or, sometimes, with an educated Scottish accent, is somewhat speculative and perhaps spring from the belief that the norm before the war was RP whereas the norm now may be any one of a number of variants.

There is no real evidence that teachers of English, whether expatriate or local, used RP themselves, either inside the classroom or outside it, although it may certainly be assumed that they taught Standard English grammar and lexis. Neither should a generalisation about the Commonwealth be taken to apply to all the countries within the Commonwealth since there are probably more differences between them than similarities.

Language learning—Mention of varieties of language leads to the question of choice for language teaching purposes and the question refers us back to our statement about language which characterised it as systemically organised vocal symbols which are arbitrary and conventional, which are restricted to human beings and which occur in contexts of situation.

The generalizations included in this statement are basic to modern language studies and to the methodics of language teaching. For example, the 'direct method,' as it was propounded by its earliest supporters in the nineteenth century, ruled out the use of the learner's own language and gave first consideration to oral comprehension and oral production of the language being learned. Interpreted in this way, the method reflected the views of linguists who identified language exclusively with speech. In this extreme form it did not take sufficient account of the organization of vocal symbols

into systems or of the systematic character of language as a whole, and efficiency of instruction was, therefore, reduced because of the ungraded, unselected nature of the language presented.

In recent years attempts have been made to arrange language teaching material more productively. These attempts have been based on premises which hold language learning to be a matter of acquiring skills and new habits and which maintain that all language teaching must include some kind of selection, grading and presentation. The emphasis is still on an aural-oral approach, but the selection of phonological, lexical and grammatical items and structures and their grading for presentation is determined by social, linguistic and pedagogical factors. Better descriptions of the different systems of English are now beginning to appear¹²⁾ and these are being used to improve teaching materials.

In general, British linguists and methodologists have maintained a cautious attitude towards selection and grading procedures based on 'contrastive' studies. Such studies are based upon the theory that it is an advantage to isolate differences and similarities between the language of the learner and the language to be learned. The isolation is achieved by comparing a descriptive analysis of patterns of the native language with a parallel analysis of patterns of the target language. Teaching methods and materials can then be recommended and prepared after taking into account the differences and similarities which have been determined. Progress in work of this kind, although increasing, has, however, been slow and work done has not always been applied as intended. There are various reasons for this. Teachers who are expected to use such materials are not always familiar enough with the systems of their

own native language to use the new material productively. This was pointed out by the late E. V. Gatenby in an article published in 1951. Doubting the value of a comparison between the foreign language and the mother tongue, he went on to admit that such a comparison was bound to be made and 'a teacher who... did not know...the history, grammar and sound laws of his native speech...could not...be deemed fully qualified to teach another.'¹³⁾

Gatenby's sceptical view of contrastive studies was not, however, that of the Linguistics Panel of The British Council which, in its 1959 Memorandum on University Training and Research in the Teaching of English as a Second or Foreign Language, drew attention to a need for a descriptive analysis of contemporary English and the systematic comparison of English with the language of the learners.

Surprisingly, the Panel did not draw attention to one of the major obstacles in the way of preparing teaching texts based upon comparative analyses. Such analyses, by their very nature, are restricted to situations in which only the *systems of one variety of each language can be compared*. In many countries in different parts of the world there is a multiplicity of indigenous and immigrant languages. There are also complicating factors in some countries which result from the introduction of European languages as both media of instruction and as subject languages in the school curricula. Contrastive studies in these countries would have to allow for differences and similarities between the systems of one variety of the language being learned and the systems of one variety in each of several other languages and dialects.¹⁴⁾ Current analyses of varieties of English such as the Survey of Educated English Usage may help to make contrastive studies between English and

other languages more realistic and practicable.

We have claimed so far that language is polysystemic and that the systems are interdependent. This premise leads to the assumption that the different categories which make up the systems should be presented as logically as possible. If we agree that an utterance has a systematic relationship to the language in which it is made and is related to the personality of the speaker or writer and the situation in which he is involved then it is clear that the most productive teaching will be *situational* and that the most useful material will be that which makes situational teaching possible.

In the early stages of language learning the contexts of situation will be those of the classroom and the lecture room. At a later stage, aural and visual techniques will help to extend situational teaching outside the limits of the immediate teaching environment.

Aural techniques will include the formal presentation and drilling with individual pupils, with groups and whole classes, of sounds, vocabulary and grammatical categories in the classroom, on the tape recorder, in the audio room and in the language laboratory and the presentation will be reinforced through radio programmes and gramophone recordings and through the media of carefully selected songs, poems, dialogues

-
12. e.g. A.E. Darbyshire, *A Description of English*, Edward Arnold Ltd, 1967.
 13. *English Language Teaching*, Vol. 5, 1951, September, p. 201. Other seminal articles on contrastive studies are T.Kandiah, "The Teaching of English in Ceylon, Some Problems in Contrastive Statement." *Language Learning*, Vol. 15, Nos. 3&4, 1965, W. F. Mackey, "Applied Linguistics : Its Meaning and Use", in *English language Teaching*, Vol. 20, No.3, May, 1966
 14. *English Language Teaching*, Vol. 20, No.3, 1966. and A.V.P. Elliott, "A New Look At Language Practice," *English Language Teaching*, Vol. 21, No. 2, January, 1967.

and dramatization.

The visual sense will be exploited by means of actions which involve both teacher and pupils, through pictures in the textbook, these being closely related to the textual material itself, through objects produced from the teacher's kit, through slides, films and filmstrips and television.

Most British linguists and language teaching experts appear to be of the opinion that in a modern approach to the teaching of English as a foreign language parts of the systems of one variety of English should be selected carefully from the categories described in a recognized grammatical model and these should be taught in situational contexts and through ostensive procedures. This opinion is supported by articles which are published regularly in *English Language Teaching*, a periodical produced by the Oxford University Press in association with The British Council, by the syllabuses of certain university departments and teacher training institutes, and by the textbooks and courses which are listed in the select bibliography which follows.

A. Teachers' Books

1. J. Derrick, *Teaching English to Immigrants*. Longmans Ltd, Contains a useful scheme of work for teaching English as a foreign language to young children.
2. S. Pit Corder, *The Visual Element in Language Teaching*, Longmans Ltd, 1966. Classifies visual materials and describes them in detail. Points out that it would be ideal if the television teacher could give a visual presentation of a context from which the learner could predict the language which belonged to it with a high degree of certainty. Notes that researchers in Britain are looking for ways and means by which such ideal situations might be created.
3. M. Clarkson, *English As A Second Lan-*

guage, For teachers of English as a second language to young children. The chapters on 'Sounds', on 'New Words-Speaking, Reading and Writing,' and on 'Revise with Enjoyment,' give useful advice which could also be applied to the teaching of English as a foreign language at Junior High school level in Japan.

B. New Courses

1. J. A. Bright, *Patterns and Skills in English*, Longmans Ltd, 1965. Based on a modified, generative, transformational grammar for teaching at secondary school level.
2. D. W. Grieve, *New Nelson English Course*, Nelson Ltd, 1966. A modern presentation of some features of English 'structure' and 'speech.' Written following the decision of the West African Examinations Council to introduce new-style examinations in 1966. Chapters one to four contain a useful summary of the 'linguistic approach to language teaching.'
3. V. C. Bickley and K. Methold, *Twentieth Century English*, University of London Press, 1965 and 1966. A profusely illustrated course for high school students and adult learners.

C. Audio-Visual Courses

1. L. G. Alexander, *The Carters of Greenwood*, Longmans Ltd 1967. A series of 12 animated cineloops in full colour, cassetted for the Technicolour 800E and similar projectors. Each cineloop runs for five minutes and relates an adventure built round essentially everyday situations. There are accompanying tapes, workbooks and a teacher's handbook.
2. *English Language Units*, The British Council, London. For remedial work in the language laboratory. It is intended that the units will eventually constitute a library covering all aspects of English

grammar. The purpose of the units is to provide a set of materials from which teachers may select those required by their own students, so that each teacher can build up a course appropriate to his own situation.

3. *The Scientist Speaks*, The British Council, London. A series of thirteen films, each lasting fourteen and a half minutes. The series is not concerned with the teaching of any one science but only with the English in which scientific subjects are taught and the way in which scientists speak to each other about their subjects. The series follows a linguistic progression rather than a scientific progression.
4. *The Turners*, The British Council, London. A comprehensive audio-visual course comprising teachers' books, workbooks, tapes and film strips, suitable for high students and as a remedial course for school university students. Tapes for pronunciation, stress and intonation drills and grammar drills are provided.

D. Written English

1. V. C. Bickley and K. Methold, *Systematic Composition*, University of London Press Ltd; 1966. The content is based on the premise that since learning a language implies being able to manipulate certain patterns, written English cannot be satisfactorily taught through so-called "free" Composition. A book of controlled composition exercises for beginners which carries the learner gradually and systematically towards the stage when he is writing individually and yet working within a given pattern.
2. J. B. Heaton, *Composition Through Pictures*, Longmans Ltd, 1966. The pictures provide for both oral and written composition and are carefully selected so that the vocabulary required for each composition is controlled. Each composition

also concentrates on one or more sentence patterns which are practised by means of substitution tables before the pupil begins the composition.

E. Spoken English

1. J. Maw, *Spoken English*, Evans Bros Ltd, 1966. A most useful short guide to some of the pitfalls to spoken English. The book is based on the work of Dr. M. A. K. Halliday, Mr P. A. D. MacCarthy and Mr J. L. Woodhead.
2. G. F. Arnold and A. C. Gimson *English Pronunciation Practice*, University of London Press Ltd, 1965. Designed to help the beginner towards a good pronunciation and to enable the more experienced student to improve the general standard of his performance in everyday conversation. The type of pronunciation dealt with is Received Pronunciation (RP).
3. L. A. Hill, *Stress and Intonation Step By Step*. Oxford University Press, 1966. Provides training in the interpretation and use of stress and intonation in spoken English. Beginning with the simple stress mark, the student is led in stages through a progressively developing marking system. A Companion provides all material for testing and correcting.

F. Songs and Rhymes for Language Teaching

1. W. R. Lee and M. Dodderidge, *Time For A Song*, Longmans Ltd, 1964. Contains seventy songs ranging from nursery rhymes to well-known folk songs. The chief factor in selection has been the combination of linguistic simplicity with a popular tune.
2. M. West, *Useful Rhymes For Learners Of English*, Longmans Ltd, 1966. The verses in this book start at an elementary level, when the learner's vocabulary is only a few hundred words, and are graded to

(Continued on p.25)

三 戸 雄 一

はしがき

近ごろ「日英語比較」と云うことが学界にも巷にもやかましく呼ばれるようになったことは、まことに喜ばしいことでもあり、これでこそ日本の英語研究教授、學習がその平衡を得て、本当の筋道を行き得るようになるのだというささやかな安堵感をわれわれ（この種の研究に30余年の悪戦苦斗を続けた）老兵は感得する次第。偉い外国諸学者の高遠な學説方法も有難いが、日本人なりの考作工夫にもかなりの実用価値のあることを悟ってそれに着目、新しい研究のエネルギーを惜しみなく没入することになるならば、日本語を枢軸とした斬新にして実効のある日本人の外国语向け日本言語学が樹立されるのではないか？ それによってわが國外国语學習も「ことば」として本筋の道に沿うやり方が可能になって、現在世間を騒がせている「役に立つ英語」という声も自然に静まってゆくのではあるまいか。「外国语に對照された日本語の実態的研究」こそ刻下の急務であり、その実質成果こそ日本人の外国语への道を拓く原動力、行く手を照す久遠の光となるものであろう。識者の今一層の激励と鞭撻がほしいものである。幸に ELEC 等主要研究團体がこの方面的研究實習に主力を注いでおられることはまことに意を強うするに足ることである。

わたくしどものやっている日本語表現の研究を基盤とする外国语研究、「日英両語表現比較研究」ということが大切であって、その実用価値の多いことを悟って貰って、それに着目、真面目にそれに耳を傾けてみてその得失を判定して貰うことが肝要である。

「ことば」「言葉」としての英語の運用をうまくするには、日英両語の表現法の有効な組織的比較研究を着実に行なって各言語の生態機能を的確につかむことが非常に重要、必須条件である。このことは全く（と言うほど）従来行なわれていなかった。

英米人ならぬ日本人〔日本語に染まってしまっている人〕が英語の運用を勉強するのであるからには、そういう

う日本人に最も適した方法を日本人自らが考究すべきである。西洋人の作った英文法に依存し過ぎて、又は外國文法的方法といふのみに偏重して、大切な「ことば」のセンス〔言語發想法、表現法的研究面〕を扱う言法〔文章、文語を扱う文法とは領域を異にした「ことば」「口語」の扱い方〕に想到、研究考案することを忘れた言〔現〕状では「役に立つ」本当の英語の使い方にこと欠くことは当然過ぎる理であろう。皮肉な言い方だが、「歌を忘れたカナリア」にも、譬えられようか？ この重大問題の解決は日本語に関心の少ない、また日本語の分らない外国人に頼るわけにはゆかない。日本人自身が奮起して日本語表現の研究から立ち直らなくてはならない。まことの日本人の言語觀、言語学（あるいは「実用言語学」とでも言うか）を樹立して日本人の英語運用の実をあぐべきであろう。

母国語、日本語への反省

「他人を知らんとすれば、まづ己れ自身を知れ」とは古哲人のことば。「外国语を知らんとすれば、まづ自國語を知らねばならぬ」これこそ現在の外国语に立ち向っている日本人すべてに対する一大警告であろう。「脚下照顧、静かに己をふりかえり、素直に反省を加えるとき、そこにおのぞと人〔ことば〕としてなすべき姿を知り、真に自他〔日本語と外国语〕ともの繁栄への道が開けて来るであろう」「脚下を照らす」ことが刻下の急務であろう。

日本語の特質、その動態

外国语、殊に英語のまともな研究學習が明治初年に始めて既に 100 年、未だに外国语と比較対照しての日本語の研究、特質検討が充分に行なわれていないことに驚かされる。これは私の僻目でもないようだ。そこでわたくしなりに日英両語比較研究の成果によるささやかな日本語觀をのべてみる次第。第一、国語でなくて日本語というのも、国語を國際的立場において観るからである。国語の（殊に歴史的）研究はもち論至れり尽せりでもあ

ろうが、日本語としての研究がほとんどと云えるほどに少ない。

*[注] 文法的研究はしばらく置いて、所謂言法、表現法のことしばってみると、稀少である。しかしこの言法の研究こそ外国語のそれに重大関係があるのである。

欧洲諸語では Speech Element の数が多く分業がよく行なわれている(たとえば油絵の色素の多様性の如く)が、日本語では言素の数が少なくて分業が行なわれ難く、名詞以外はほとんど動詞〔素〕でまかなっている。日本語表現はまだ動詞一色の感が強く、品詞の分化が完全に行なわれていない。そればかりではない、品詞分化に先立つべき文の構造上の各要素の分化すら十分に行なわれていない原初的なビヘビオリズムの文を、われわれは20世紀も半分以上過ぎて今日なお盛んに使用して相当に間に合わしている。それらの文には主語もなければ目的語もない。動詞ばかりがつながって一本の鎖のようになつた判断語主部が存するのみである。しかもそのようなお粗末(?)な容器で思想伝達に不自由しないばかりか、かえって便利にさえ思うのは、判断語主部の動詞の中に未分化のままで主語的要素や詳述的要素が包まれているからである。たとえば「云うておいて下さいましたか」碎いて云つて「云うといで呉れたか」などの文がそれである。「あなた〔お前〕は」という主語も、「あの人には」「それを」という直接、間接の2つの目的語も表面には出でていない。世間ではそれをいともカンタンに省略されているといつて平気な顔である。しかし、よく検めてみるとそれらは判断語諸動詞によって暗示(時には明示)されている。Field(敬語法)の場で行なわれる対面会話の文において、特にその暗示力が強いようである。結局のところ、日本語は動詞の Aspect〔相〕とその膠着性によって all-round の品詞代替を行なっている。この Aspect についてはロシア語のそれ〔vid〕と比べてみれば面白い。

(1) 動作主義〔動詞多用〕言語としての日本語

日本語は英語等の欧洲語と比して動詞の数が著しく多い。その原因は日本語は動作主義言語であつて日常卑近動詞(「いう」「ゆく」「くる」「みる」等)を言語表現の基盤として多用する言語であるからである。

〔用例〕「いうてみてみ」「つけてみてみ」「逃げてゆく」「暮してゆく」「出てくる」「降って来る」「訪ねて来る」「話してくれ」「助けてくれ」「買って来てくれ」「煮えくり返る」「引張り込む」「立ち聞きする」「云い換えてみれば」等

上例の如く、日本語は卑近行動詞の連鎖垂直的な、時間依存的な表現を主流とする言語で、日本語は名詞、助詞以外はほとんど動詞であり、形容詞も状態を表わす動

詞(の Aspect)である。英語など Preposition, Conjunction, Article までも動詞で代替されると云い得る、動詞卓越性の言語であることを脳裏に刻んでおくことである。このことは Grimm's Law や Verner's Law よりも何よりも日本語日本人にとって大切であろう。

(2) 日本語表現の時間(即、動詞)依存性

日本語表現基盤の二大支柱は時と動きである。(この時・動の裏付けをするものが変化で時・動・変は三位一体である。) 日本語に時間包含表現と動詞の多いことは当然である。この時間表現に2通りある。1つは表面に時の観念が出ないで包含されていることであり、その2は積極的時間表現である。

Man is mortal. 「人間はいつ〔何時〕か死ぬる」
「人間は死ぬるものだ」

[注] 日本語には mortal に当る欧洲語的形容詞がないので「いつか」(時間要素)+死ぬ(動詞)=mortal として形容詞を作出している。

One more, please. 「今一つ」

Christ lives with us. 「基督は今でも生きている」

「助けて呉れ」「云うておいて呉れたか」「云うてみてみ」「行って取ってもって来て呉れ給え」「一度思い切ってやってみてみたいと思ひます」

上例でも分るように「あなた」はという主語も「それを」と云う目的語もない、ただ卑近動詞の連鎖だけである。「いくつかの吊るし柿を糸に通してぶら下げた」格好が日本語の姿で、その1つ1つの柿の実に当る動詞を縦に貫き通す糸が、時(TIME)というものである。英語は Space〔空間、位置〕を表現の基盤にして Space Word〔前置詞的位置の副詞〕を多用するに反し、日本語は専ら time を裏付けとする動作、動詞の多様多用表現をその特長とする。

言葉のくせ〔言癖〕

昔から「無くて七癖」と云うが、人間の文化産物、否人類精神文化を産み出す原動力となり、また絶えずそれを乗せて走らせている言葉についても上のことわざが適用される。人々、民族の素朴な哲学〔物の考え方〕=民族のくせ——その言葉創生の際の人心のくせが、その集団の言葉を作る中心の種となり、またその言葉を操る脈となって、原初時代の原始言語が出来上り、その原〔言〕動力とその脈搏が現代の言葉に大部分がそのままに残っている。その「くせ」をよく分析研究することが、まことに肝要なことであることを悟得せねばならぬ。そのくせ=言癖を言語発想法、言語表現法、言法とでも云わせて貰うことにしてよう。

文法は言語という海の表波または言波を扱う立派な指南ではあるが、言波の下を流れる言流を示す海図がないととてつもない所へ流されてしまう。また言葉を船にたとえれば、文法はその engine のようなもので、これを操る舵がなければ航海は出来ない。この言流や舵に当るものが言語発想法、略して言法というものであろう。

文法と言法とは飛行機の両翼にも似て片翼では飛行できない。この両翼が整備され運転されて初めて言葉という飛行機が言語生活の空を自由に飛び廻ってその機能を思う存分に發揮し得ることが出来るであろう。また、文法と言法は車の両輪の如く唇歯輔車するものであろう。このことこそ、日本人が歐州諸語いわゆる外国語を学習する際に基本的に考慮反省して取りかかるべき緊要事である。

原始〔十数万年前の〕動植物の化石は Concrete に目に見えるが、人類の哲学、文化→「考え方」「言い方」の型、化石化して、不変化した「化石型」「言葉の云い表わし方」の型は人目に見え難い。しかし人の口の使い方=形式(音声)や言い表わし方=内容〔意味〕に判然と残っている。(「音声」についてはアメリカ構造言語学で立派な具体研究成果が挙っているし、わたくしの説明は他日に譲る)

言い表わし方について、たとえば、「消す」という動詞を英語では1つの動詞で云うことが出来ない。このことは「出る」「出す」「点ける」「消える」「着る」「脱ぐ」などについても云える。

消す = blow out [off] cf. 「吹き消す」

出る〔でる、いづる〕 = go
come } out
get }

乗る } get { on
降りる } off 着る } put { on
脱ぐ } off

入る、這に入る = get
come } in [into]
walk
turn }

ON と OFF

日本には英語の ON[恩]知らず(ON のセンスの分らぬ)人が多いようである。いうなれば英語には ON[音]痴というわけであろうか。ON と OFF さえ本当に使えるならば英語の使用に不自しないとさえ言えるほどに大切な語である。電灯のスイッチには日本語のように「つける(put ON)」とか「消す(put OFF)」というような動詞表現ではなくて位置詞 ON, OFF 表示だけ。スイッチの ON, OFF は教室の英文法では教えて貰え

ない英語のセンスを端的に日本人に示してくれている。われわれはこれによって Space Word [位置表示語] ON, OFF 等の表現力を体得すべきである。

次の簡単な和文を英訳してみること、

『この部屋には電気が来ているから、電灯が5つ点いている。』

As electricity is on in this class room, five lights are on.

「来る」「点く」という動作が ON という位置の語に換わってゆくところに日英両語の組織的転換 (Systematic Conversion)がある。「来ている」「点いている」と動作から状態「…ている」に移ってゆく日本語のくせをよく吟味すること。ついでに次を注意。

put on 「点ける」

動詞 位置詞 一動詞

 二言素 一言素

2 speech elements 1 speech element

次に ON の簡単な用例(英語は日本語のように動詞を多用せず、ON に depend on している。)

The house is on fire 「燃えている」

Is there a stamp on the letter?

「切手が貼ってあるか。」

The baby crawls on hands and knees.

「四つん這いに這う。」

〔注〕この英語の図示的絵画的表現に注意、英米人の頭には空間図絵が浮かぶ日本語表現にはただ「這う、這う」という動作の繰り返しがあるだけ、空間位置〔物理〕主義言語たる英語と動作主義〔動詞〕言語の日本語との差ないし対応が判然とする次第。

Hold on! 「しっかりつかまっておれ〔…とれ〕。」

On Stanley, on! 「進めや進め。」

Come on! 「さあ、来い。」〔注〕on=来い。

Sail on! sail on! and on! ("Columbus")

He passed a bad coin on me.

「賃金をおしつけ(て来)た。」

三動詞

It's on me. 「それは僕のおごりだ。」

〔注〕「それ〔金の支払〕は(自分に)かかるて来る」意。この idiomatic な日常英語の解説は日英両語表現の根本比較によらないと不可能であるし、on=かかる、me=て来る、という転換原則を体得せねばだめだ。cf. The ice melted on me. (C. Day)「溶け失せた氷の負担は買主たる私持ち」「氷解損失は買主にかかるて来る (=on me) の意。

He is well on in his studies. 「勉強が可なり進んでいる。」

I cannot catch on. 「呑み込めぬ。」

Dogs and cats are killed on sight.

「犬猫は見附次第殺される。」

〔注〕日本語の二動詞表現に着目。

This (being) done, they started again on their way. (R. L. Stevenson)

この on their [one's] way を「彼らの道の上に」と直訳してはおかしい。さりとて如何に本ヤクするか?

これに悩んで内外の諸先生方、在日外人達にも質ねてみても要領を得ない。結局自ら日本語を検討してその対応表現を見出す外に手はないことを悟る。on one's way と英語は写実的図示的に道路面が頭に浮び出る発想法であるが、日本人の頭には「…てゆく[行く]」という動作、路面でなくてその上を「歩き動く」または「進み行く」動作、行動が発想されるのみ、(この発想法が動作主義言語の motive をなす。)ともあれ、on one's way=「…てゆく」という対応関係は私の帰納法的、例証的案出公式である。外国流の高踏、高遠な言語理論はともかく、現実の問題として我々は on one's way を日本語表現に換えるべき仕事を果たさなくては英語〔外国语〕の先生としての務めが果たせない。いつまでもごまかしでは通れない。日英表現転換の常道法則=常則、言則を考案してキカイ的に乗換え〔この乗換えなる二動詞を英語に乗替えるのにも直訳は禁物であるし、Change here という英語の一動詞主義 (mono verbalism) すなわち VERB+位置詞(Space Word)の言則を用いる。〕る工夫が大切であろう。なお ON [前置詞]、ONE'S [人代名詞]、WAY [(抽)名詞] と英語は 3 言素 (Speech elements) よりなる三色董 (すみれ、tri colored violet) であるが日本語は「…てゆく」と補助動詞 1 つでこれに対応している、動詞一色 (monocolored speech elemnt) の表現である。要するに、

This being done, they started again on their way to [for] Osaka.

「…大阪へと出かけていった。」

実例 2, 3 による言理応用

①前置詞 ②形容詞 ③(抽)名詞

On second thoughts } he refrained
↓ ↓ ↓ } ←逆順
てみて し直 え考 動詞

「考え直してみて」 差控えた。

前述の如く English は①②③の 3 言素 [品詞] 3 色素 (tricolored) で賑やかで美しいが [西洋の油絵]、日本語は動素 [詞] 1 言素 [東洋の墨色 1 色、簡素な山水画]。次例も同様。

In other words } (英語は 3 言 [色] 素 [品詞]
↓ ↓ ↓ } ←逆順
るみて え換 い云
ばえ云て え換 (を葉言) ←

3 動詞又は 2 動詞

Call her forth to me.

上の英語短文 (Shakespeare の Romeo and Juliet よりの引用で、Juliet の母が彼女の nurse 向って云う言葉) を日本の日常語 [ことば] に「本ヤク」してみなさい。

〔注〕 Call her だけは文法で直訳出来るが、後半の forth to me になると、英文法では如何ともし難い。直訳しても non-sense. この部分こそ本当の「ことば」で日英両語の生の「くせ」が出ているところである。

文法の世界	言法の世界
Call her [=Juliet]	forth to me. 前へ私(を) (直訳) 出しで来い (本訳) 2 動詞

文法の世界は日本人は得意でそのまま直訳すれば結構、難問は言法の世界である。

forth to me
位置詞 前置詞 人代名詞 = 出して來い
① ② ③
英語は 3 言素
2 動詞
(動詞 [素] だけ)

日本語には英語のような位置詞がないのでその代替語として出る、出すという動詞を使う外に手はないのである。(forth=出る、出す)

次に to me [前置詞 + 人称代名詞]
…て 来る

この to me における前置詞と人称代名詞の組合せは英語常用句であって、この 2 つの言素 (Speech element) 前置詞と人称代名詞によって「ことば」としての英語は息 [呼吸] をしているわけである。この英語「息扱い」を日本語のそれに替えて生きた日本語表現にすることこそ本ヤクの仕事であろう。

上例によく似た他の例をあげれば、

And Willy's voice in the wind, "O mother, come out to me."

(Alfred Tennyson : Rizpah 1. II. 2-3)

〔説明〕 横死した独り息子の亡靈が狂女となった老母の耳に聞えて来る呼び声であるが、この卑近の言葉を自然の日本語に直し得る人は稀であろう。そのわけは日本語表現をまともに研究した人が少ないからである。

O mother, come out to me.

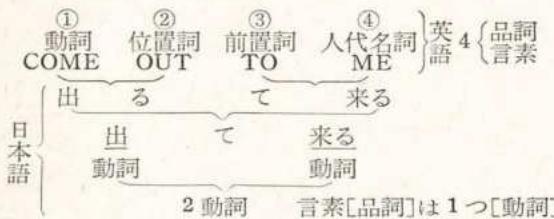
来 外 へ 私

(直訳)

英文法はこれに妙チキリンな直訳を与えるだけで如何ともし難い。ところで從来はこれを意訳するというがこれも大変不便である。筆者はこれを日本語に「本ヤク」しようとする。さらに云えば、キカイホンヤク機に直接にかけようとする。

予備知識として次のことをいっておきたい。

日本語動詞「出る」「出す」を日常英語の動詞1つで云うことは極めて困難である。そのわけは、OUTといいう位置詞を1要素として「動詞+OUT」としなければまず不可能だからである。



to=て [te] となるのも面白い。

to me = て来る の例は余りにも多い。

英語表現は4品詞[言素]であるが、日本語は「出て来る」2動詞だけ。

Mother, come out to me.

「お母さん、出て来て よー」 が本当の日本訳、ホンヤクである。反対にこの日本語を英訳すれば上記のような英語が出るようにセンスの転換が出来ること。英文法だけでは直訳だけ出来て、何ともしようがないわけである。言法によって OUT と ME がすぐ「出る」[come out]ように修業すること、英会話、英作の実力はこれによつて出て来る。

さて嘆かわしいことに「時間が来たから答案を出しなさい」を英語で云える日本の学生は、はなはだ少ない。Time has come. でなくて Time is up. はまず分るとして「答案を出す」の語が全く出ない。出ない筈だ。INの Space sense が日本人の頭にないからである。だから Hand in your papers. が素直に出ない。一体そんな英語の學習でイイン [IN] ですかと憤慨してみても仕方がない。答案が教卓の中に IN [入る] するから、英語 IN という Space Word [位置詞] を大切に使い、またそれでことば「息」のイキをしている。手で出すから、Hand in。 日本語は「出す」という1つの動詞で間に2語合わせる。

この IN をよく「覚えておいて」うまく使うこと。

Keep in mind

くおて (る)え覚 ←逆順

2動詞

「6月20日までに御返事を出して下さい」

Please, send in your reply not later than 20th June. 英語は IN に籠った言葉とも云えるほどに in 党派でもある。Is Mr. Kimura in? No, (He is not in.) He is out in Osaka. を動作主義言語たる日本語動詞に訳させてみる。「大阪に出かけている」「物を忘れて來た…

2動詞

了った」は日常用語で入試問題などにもよく出る。たとえば、東京外大(41年)の

「私は傘をどこへ忘れて來たんだろう」

Where have I left my umbrella (behind me), I wonder?

[注] 「忘れて來た」 forget[leave] behind one ……て来る=behind one [前置詞+人称代名詞]

「私は病院に雨がさを置き忘れた」 (長崎大)
I (have) left my umbrella (behind me) in the hospital.

次に behind one の練習として、

「入ったら、締[閉]めよ」という掲示を英語に、Close the door behind you

[注] 日本文には2動詞だけ、目的語もない。「behind you = 入る」の対応法に注目。

「確かに戸を締めて出た[入った]。」

He was sure he shut the door after him.

……て来る=前置詞+人称代名詞

(Preposition + Personal Pronoun)

この大切な言語法則(日英両語表現対応法則)を理論的に説明する予備訓練として簡単な実例を検べてみる。

「傘を持つて來たか」「お金持つて來ている」

この英訳には with you [me]=「前置詞+人称代名詞」の公式型を使うことが必須である。「宿題をやつて來たか?」 Have you taken your homework with you? または Do you have……? your = やつて with you = て来る。「宿題をやつたか?」は文法でカントンだが「やつて來たか」と2動詞表現になると、文法の領域を超えて言語の世界となることに留意。

(神戸商科大学教授)



編 集 部

この Bibliography の作成にあたっては、下記の先生方のご協力をいただいた。ここに厚くお礼を申し上げるとともに、この目録が「日英両語の比較研究」のより一層の発展に役立つと同時に、教材作成の面において、また広く英語教育関係者の間で利用されることを期待する。

* * *

安部 勇	東京工業大学助教授
江草 清子	高知大学
長谷川欣佑	東京大学講師
林 栄一	大阪外国語大学教授
一色マサ子	津田塾大学教授
垣田 直己	広島大学教授
片桐ユズル	松蔭女子学院大学助教授
川原 武満	熊本大学助教授
小池 生夫	日比谷高校教諭
小泉 保	静岡女子短期大学助教授
国広 哲弥	島根大学助教授
日下部徳次	京都教育大学教授
三戸 雄一	神戸商科大学教授
村木 正武	国際基督教大学教授
大江 三郎	立教大学助教授
小栗 敬三	横浜国立大学教授
小野 経男	愛知県立大学助教授
須藤 淳	神戸市外国語大学助教授
田桐 大澄	立教大学教授
鳥居 次好	静岡大学教授
上田 明子	津田塾大学助教授
榎垣 実	関西外国語大学教授
山本 茂	金沢女子短期大学助教授

安部 勇

- “Intonational Patterns of English and Japanese,”
Word Vol. XI(City College of New York, 1955)
『英語イントネーションの研究』(研究社, 1958)
“On Japanese Intonation,” *Lingua* 7:2 (1958)
「詠唱の旋律について」『英語青年』Vol. LVI, No. 7 (研究社, 1960)
「Tone と Intonation の問題 (日・英文の例挙に応用して)」『音声学会会報』No. 116 (日本音声学会, 1964)

- 「イントネーション・ユニバーサルの問題」『音声学会会報』No. 117 (日本音声学会, 1964)
「英語の抑揚」『現代英語教育講座』 Vol. IV (研究社, 1965)
「ハワイと日本語」『言語生活』No. 167 (筑摩書房, 1965)
「外国人の発音について(とくに日本語のアクセントとイントネーションを中心として)」『東工大人文系紀要』No. 31 (東工大, 1966)
“General Characteristics of Japanese Terminal Intonation,” *Lingua* 17 (1966)
「ハワイ語の古文献の表記法について (日・英, ハワイ語の三国会話書の表記)」『日本音声学会会報』 No. 121 (日本音声学会, 1966)
“Physical and Linguistic Aspects of Some English Rising Intonations,” *Studies in English Literature* (日本英文学会, 1966)
青木 猛
「音声面から見た日英語の比較」『英語研究』LV-10 (研究社, 1966)
Bloch, Bernard
“Studies in Colloquial Japanese I : Inflection,” *Journal of the American Oriental Society* 66 (Sterling Memorial Library, 1946)
“Studies in Colloquial Japanese II : Syntax,” *Language* 22 (Yale Grad School, 1946)
“Studies in Colloquial Japanese III : Derivation of Inflected Words,” *Journal of the American Oriental Society* 66 (Sterling Memorial Library, 1946)
“Syntactic Formulas for Japanese,” *Studies in Linguistics* Vol. V, No. 1 (1947)
“Studies in Colloquial Japanese IV : Phonemics,” *Language* 26 (Yale Grad School, 1950)
Carr, Denzel
“Comparative Treatment of Epenthetic and Paragogic Vowels in English Loan Words in Japanese and Hawaiian,” *Semitic and Oriental Studies : A Volume Presented to William Popper* (Univ. of Calif. Publications in Semitic Philology XI) ; *Language Learning* 14 (Ann Arbor : Research

- Club in Language Learning, 1964)
- Daniels, F. J.**
- The Sound Systems of Standard Japanese; A Tentative Account from the Teaching Point of View* (研究社, 1958)
- 土居 光知**
- 「日本語の盲点」『言語生活』29 (筑摩書房, 1954)
- Edwards, Ernest Richard**
- 『日本語の音声学的研究』高松義雄訳 (厚生閣, 1935)
- 江草 清子**
- “Linguistic and Language Teaching, with Some Illustrations from Japanese and English”『高知大学学術研究報告』第4巻第45号 (高知大学, 1955)
- “Comparative Phonemics of Japanese and English with Special Problems in Teaching Them to Japanese Speakers”『高知大学学術研究報告』第4巻第50号 (高知大学, 1955)
- “A Problem in Teaching Pronunciation to the Japanese”『高知大学学術研究報告』第8巻第30号 (高知大学, 1960)
- 福村虎治郎**
- 「日英語 Voice (態) の比較」『英文学研究』(英文学会, 1951)
- 船田 逸夫**
- 「国語 ‘～は’ ‘～が’ と英語の表現」『英文法研究』Vol. 1, No. 10 (研究社, 1958)
- Grage, William W.**
- Contrastive Studies in Linguistics: A Bibliographical Checklist* (Washington D.C.: Center for Applied Linguistics, 1961)
- Gerhard, Robert H.**
- A Handbook of English and American Sounds for Japanese Students*, Rev. ed. (清水書院, 1948)
- Han, Mieko S.**
- Japanese Phonology: An Analysis Based upon Sound Spectrograms* (研究社, 1962)
- 長谷川欣佑**
- 「英語と日本語の名詞修飾構造」*ELEC Bulletin* Nos. 11, 12 (学研, 1964)
- 「日本語文法試論」『言語文化』No. 1 (一橋大, 1964)
- 羽柴 正市**
- 「和文英訳」『日英語の比較』(現代英語教育講座7) (研究社, 1965)
- 羽柴正市・宮内秀雄・最所フミ**
- 「日英表現」(隨想)『英語研究』Vol. LV, No. 10 (研究社, 1966)
- 波多野鹿之助**
- 「対照国語学」(英徳社, 1953)
- Haugen, Einar**
- “Japanese Phonemics: Some Alternative Solutions,” *ELEC Publications IV* (研究社, 1960)
- 林 栄一**
- 「日英音節構造の比較」『大阪外大学報 II』(阪外大, 1958)
- 市河 三喜**
- The Pronunciation of English Loan-Words in Japanese* (Copenhagen and London, 1930)
- 乾 亮一**
- 「ing 形と連用・連体形」『英文学研究』(英文学会, 1945)
- 『国語の表現に及ぼした英語の影響』(国語シリーズ)(教育図書, 1951)
- 「比較語学の必要」『英語青年』Vol. CIV, No. 4 (研究社, 1958)
- 「英語と日本語—比較における 2, 3 の問題—」『英文法研究』(研究社, 1959)
- 石井 光治**
- 「英米人のみた格助詞 ‘は’ ‘が’」『英文法研究』Vol. II, No. 3 (研究社, 1958)
- 一色マサ子**
- “A Comparative Analysis of the English and the Japanese Consonant Phonemes”『音声の研究』Vol. VIII (日本音声学会, 1957)
- 「日本語と英語との混交」『英文法研究』Vol. I, No. 10 (研究社, 1958)
- “A Contrastive Analysis of English and Japanese Vowel Phonemes”『音声の研究』Vol. XI (日本音声学会, 1965)
- A Contrastive Analysis of Fundamental English and Japanese Grammar* (私版, 1965)
- 「日英語 tense の比較ノートから」『英語青年』No. 3 (研究社, 1965)
- 一色マサ子・乾亮一・笠井満・田桐大澄・中島文雄・宮内秀雄**
- 「比較語学について(座談会)」『英文法研究』Vol. III, No. 12 (研究社, 1960)
- Jorden, Eleanor Harz**
- “The Syntax of Modern Colloquial Japanese,” *Language Supplement* No. 31 (Baltimore: Linguistic Society of America, 1952)
- 角野 喜六**
- 『日英対照文章読本』(研究社, 1952)
- 梶木 隆一**
- 「直訳できない英語表現」『英語研究』Vol. LV, No. 10

- (研究社, 1966)
垣田 直巳
“English Adjectival Expressions and their Equivalents Japanese”『飯野至誠先生還歴記念論文集』(広島大学教育学部英語教育研究室, 1961)
- 金口 儀明
「英語表現と考え方—単数・複数の問題」『英語研究』Vol. LV, No. 10 (研究社, 1966)
- 兼弘 正雄
『日英両語発音差異の実験的研究』(英語教育叢書)(研究社, 1936)
- 加藤 素男
「英語と日本語の構造の比較」『日英両語の比較研究』(英語教育シリーズ別冊) (大修館, 1963)
- 木坂 千秋
『英語と外国语との相互影響(附 借用語論)』(研究社英米文学講座 59) (研究社, 1941)
- 喜多 史郎
「日英比較表現法 1~7 文法(形式)と表現(内容)の交叉点」『英文法研究』Vol. IV, Nos. 3~9 (研究社, 1960)
- 「言語表現の生態」『言語生活』14 (筑摩書房, 1952)
- 「言葉と表現」『言語生活』30 (筑摩書房, 1954)
- 「言語生態の種々相」『言語生活』42 (筑摩書房, 1955)
- 「外国语教育が日本語に与えた影響」『言語生活』67 (筑摩書房, 1957)
- Kleinjans, Everett**
“A Comparison of Japanese and English Object Structure,” *Language Learning* (Ann Arbor : Research Club in Language Learning, 1957—1958)
- A Descriptive-Comparative Study Predicting Interference for Japanese in Learning English Noun-head Modification Patterns*『英語教育シリーズ 19』(大修館, 1959)
- 小林 崇
「米音 / r, l / の聴覚的弁別」『中島文雄教授還暦記念論文集』(研究社, 1965)
- 小池 生夫
“A Descriptive-Comparative Notes on Verb Transitivity in English and Japanese,” *Sophia University Monumenta Nipponica* Vol. XX, Nos. 1, 2 (Sophia University, 1965)
- 「日英両語の自・他動詞の比較」本誌 No. 14 (1965)
- 「英語他動詞構造と日本語自動詞構造のうちの NP+ni + Vin 構造の比較研究」『英語教育』Vol. XV, No. 8 (大修館, 1966)
- 小泉 保
「日本語と英語の数詞の形態的構造」『日英両語の比較』(英語教育シリーズ20 別冊) (大修館, 1963)
- Komai, Akira Alan**
A Generative Phonology of Standard Colloquial Japanese (University of Michigan, 1963)
- “A Transformational Model for Japanese,” *Report of the Fourteenth Annual Round Table Meeting on Linguistics and Language Studies, Monograph Series on Language and Linguistics* No. 16 (Georgetown University, 1963)
- 高本捨三郎
“Phonemic and Sub-Phonemic Replacement of English Sounds by Speakers of Japanese,” *Dissertation Abstracts XIX* (Mich. [Ed. D.], 1959)
- 「日本人の英語発音の困難点」『英語教育』Vol. IX, No. 2—5 (大修館, 1960)
- Applied English Phonology* (田中書店, 1965)
- “Applied English Phonology : Phonemic and Subphonemic Replacement of English Sounds by the Japanese Speakers”『論叢』No. 73 (明治学院)
- 国弘 正雄
「アメリカにおける言語と文化」『英語教育』Vol. XIV, No. 3—12, Vol. XV, No. 1—12 (大修館, 1965~1967)
- 国弘 哲弥
「外来語表記について」『日英両語の比較』(英語教育シリーズ20 別冊) (大修館, 1963)
- 「表現と文体の体系」『表現研究』2号 (表現学会, 1965)
- 「日英温度形容詞の意義素の構造と体系」『国語学』第60集 (国語学会, 1965)
- 「日英語の比較研究—私の方法」『現代英語教育』Vol. III, No. 7 (研究社, 1966)
- 「日英対照表現構造論(1)—無生物主語表現」『島根大学論集(人文科学)』14号 (島根大学, 1966)
- 「日英両語音声の比較」本誌 No. 12~17 (学研, 1964~66)
- 「and と『と・に・や・も』—一日英両語比較語彙論」『言語研究』No. 50 (日本言語学会, 1966)
- 「頭を刈った」は 非論理的か—一日英両語対照意味論」『現代英語教育』Vol. III, No. 6 (研究社, 1966)
- 「『表現構造』の概念について」『表現研究』第3号(表現学会, 1966)
- 「英語表現における二項対立—日英対照表現論—」『英語文学世界』Vol. I, No. 5 (1966)
- 「意味分析の方法(1)~(3)」『現代英語教育』Vol. III, No. 10~12 (研究社, 1967)
- 「比較表現論の基礎」『表現研究』No. 5(表現学会, 1967)
- 黒田 成幸

- “We (Revised version of Chap. 2 of *Generative Grammatical Studies in Japanese*),” (Thesis MIT, 1965)
- 「ガ, キ及びニについて」『国語学』(国語学会, 1965)
- “Causative forms in Japanese,” *Foundations of Language* Vol. I, No. 1 (1965)
- 日下部徳次
『発音指導上の問題点』『所報』No. 11 (京都教育大学研究所, 1965)
- Lehmann, Winfred P. and Faust, Lloyd
A Grammar of Formal Written Japanese (Cambridge : Harvard Univ. Press, 1951)
- Lange, Rudolf
Textbook of Colloquial Japanese Language (教文館, 1935)
- Martin, Samuel E.
“Morphophonemics of Japanese,” *Language Supplement* No. 47 (Baltimore : Linguistic Society of America, 1952)
- 井田秀郎・大野芳太郎
『比較対照日英文法綱要』(1934)
- 皆川 三郎
『Grammar for Writing —英語らしい表現を求めて—』
『英語研究』Vol. LV, No. 10 (研究社, 1966)
- 三戸 雄一
「日英両語比較の実際」『語学教育』 No. 222 (語学教育研究所, 1952)
- 「日英比較・日本語累加(特に二重)動詞表現について」
『神商大論集』(神商大, 1955)
- 「日英両語表現比較」『商業英作文典』(国元書房, 1956)
- 「日本語と英(米)語・動作主義言語と物理主義言語」『豊田実博士・古稀論集』(1956)
- 「日米比: Words Order, Sense Plosive と助詞, 枕詞, 振勢語等について」『神商大論集』(神商大, 1958)
- 『日本語と英語・英作文への準備』(*New-World Readers* 教授資料付録) (開隆堂, 1959)
- 『日英両語比較試論集』(神商大研究所, 1959)
- 「日米比較・米語、語法の特質」『論集』(神商大, 1960)
- “Some Contrastive Features of English and Japanese,” *Language Learning* Vol. XI, Nos. 1 & 2 (Michigan University, 1960)
- “A Comparative Study of Japanese & English Expressions (Preliminary Remarks)” 『神商大論集』(神商大, 1962)
- “An Outline of Physical Language as Developed on English Base” 『神商大論集』(神商大, 1962)
- 「日英(米)比較新式英作文」*Business English* Vol. XIX, Nos. 10~12, Vol. XX, No. 1 (商業英語出版1963, 1964)
- 「常用日米両語比較研究」*Business English* Vol. XX, Nos. 4~9, 10 (商業英語出版1964)
- 『日英比・商業英語表現の分析』(神商大商英研究室, 1964)
- 「日英比・応用言語学としての商業英語」『日本商業英語学会研究年報』(日本商業英語学会, 1964)
- 「実用日米両語比較研究」*Business English* Vol. XX, No. 12, Vo. XXI, Nos. 1, 2, 4, 7, 8, 10 (1964, 1965)
- 『日英両語表現法比較研究』『神商大研究叢書』(神商大, 1966)
- 『日英語対比研究諸問題』『神商大人文論集』Vol. II, No. 1 (神商大, 1966)
- 「常用日米(英)語の対比」*Business English* Vol. XXII, Nos. 1, 5, 6, 8, 10, 12 (1966)
- 宮内 秀雄
『英文法12講』『英語研究』Vol. XXXIX, Nos. 1~12 (研究社, 1950)
- 『英文法続12講』『英語研究』Vol. XL, Nos. 1~12 (研究社, 1951)
- 『英語の考え方と表わし方』(国際出版社, 1953)
- 『英語は考える』(学生社, 1953)
- 『新英語学習法』(学生社, 1961)
- 『変化について一日英語の比較の一例』『中島文雄教授還暦記念論文集』(研究社, 1965)
- 溝口 歌子
『英語の科学論文』『化学の領域』増刊55号 (南江堂, 1963)
- 森 正俊
The Pronunciation of Japanese (Herald-sha, 1929)
- 『英語となった日本語』『音声の研究』(日本音声学会)
- 毛利 可信
『日英語の比較と語学教育』『語学教育』 No. 267 (語学教育研究所, 1964)
- 村木 正武
“Negation in English and Japanese,” *Studies in Descriptive and Applied Linguistics* Vol. III (1965)
- “A Study of Syntax without Transformation Rules,” *Descriptive and Applied Linguistics* Vol. III (International Christian University, 1965)
- 中島 文雄
“Comparison of Japanese and English.” *Addresses and Papers at The Specialists' Conference* (研究社, 1957)
- 「「は」と「が」について」『市河博士還暦記念論文集』第二

- 輯 (開拓社, 1947)
新島 通弘
「日本人の英語表現にみられる Common Mistakes」『英語研究』Vol. LV, No. 10 (研究社, 1966)
- 西台美智雄**
「日英表現法の比較—その一、副助詞」『天理大学学報』(天理大学, 1966)
- 新渡戸稻造**
“Foreign Languages in Japan-Their Use and Study” (大阪毎日, 東京日々, 1929)
- 大江 三郎**
“A Note on Mispronunciation”『人文科学』18号 (立教大学, 1965)
- “On the [f]-Sound in the Words Borrowed from Foreign Languages into Japanese”『人文科学』19号 (立教大学, 1966)
- 「外来語中の促音に関する一考察」『音声の研究』 Vol. XIII (日本音声学会, 1967)
- 「言語接触における音韻上の問題点」『音声の研究』 Vol. XIII (日本音声学会, 1967)
- 小笠原林樹**
“On Problems in Morphologic-Syntactic Comparison of English and Japanese”『記述・応用言語学研究』 No. 3 (国際基督教大学, 1961)
- 「日英語の表現の比較」『日英語の比較』(現代英語教育講座 7) (研究社, 1965)
- 小栗 敬三**
「綴字発音」『英語青年』 Vol. HXII, No. 6 (研究社, 1966)
- 小野 経男**
「助詞‘が’と‘は’が参与する論理型を表わす英語構造について」『関西学院大学英語英文学論集』4巻1号(関西学院大学, 1963)
- 「ネクサス上の問題」(日英語法比較研究)『現代英語教育』 Vol. I, No. 2 (研究社, 1964)
- 太田 朗**
「日英両国語の比較」テンスの問題』『全英連第12回紀要』(全英連, 1962)
- 「日英語の音体系の比較」『日英語の比較』(現代英語教育講座 7) (研究社, 1965)
- 小沢 準作**
「くいちがい談義」(1)~(4)『英文法研究』 Vol. I, Nos. 1~4 (研究社, 1957)
- Palmer, Harold E.**
The Principles of Romanization (Maruzen, 1930)
- Prideaux, Gary Dean**
The Syntax of Japanese Honorifics (Univ. of Texas, ELEC BULLETIN 1966)
- Rahder, J.**
“Comparative Treatment of the Japanese Language,” *Monumenta Nipponica* Vols. VI, VIII, X (1951)
- Sansom, G. B.**
An Historical Grammar of Japanese (Oxford, 1928)
- サイデンステッカー E.G. 那須 聖**
『日本語らしい表現から英語らしい表現へ』(倍風館, 1962)
- 佐々木 昭**
「日本語と英語の対立」『現代英語教育』 Vol. III, Nos. 4, 5 (研究社, 1966)
- 沢村寅二郎**
『日本語と英語の比較』(英米文学語学講座) (研究社, 1940)
- Scott, Charles T.**
“A Constructive Sketch of English and Japanese Phonology,” *Preliminaries to English Teaching* (ELEC, 1966)
- 閔 欣泰**
「日英両語の意味・表現のずれ」『英語教育』 Vol. XV, No. 4 (大修館, 1966)
- Shen, Yao**
“Teaching Pronunciation is not Teaching Single Sounds Only,” *The English Teacher's Magazine* Vol. VI (Taishukan, 1957)
- Smith, Richard E.**
A Transformational Sketch of Japanese (Univ. of Texas, 1962)
- 塩田 良平**
『日本文体に及ぼしたる西洋文体の影響』(岩波講座世界文学) (岩波書店, 1932)
- 朱牟田夏雄**
『日英語の比較』(現代英語教育講座第7巻) (研究社, 1965)
- 染田 利信**
「英・仏語との比較における日本語の調音の一般的背景について」『音声の研究』第12集 (日本音声学会, 1966)
- 空西 哲郎**
『英語・日本語』(紀伊国屋書店, 1963)
- 須藤 淳**
「日英両語の語彙比較への試み」『英語教育』 Vol. XV, No. 1 (大修館, 1966)
- 鈴木真佐子**
“*A Proposal for the Tagmemic Analysis of Japanese*”『中島文雄教授還暦記念論文集』(研究社, 1965)

- 多田 齊司
 「ことばのいのち」『桜美林短大紀要』第1輯(桜美林短大, 1961)
 「Soneteer としての Milton と Shakespeare」『桜美林短大紀要』(桜美林短大, 1962)
 「あいまいな言葉:「ことばのいのち」への補足」『桜美林短大紀要』第2輯(桜美林短大, 1962)
 「弘法にも筆の誤まり」(Even Homer Sometimes Nods)『桜美林短大紀要』第3輯(桜美林短大, 1963)
 『ことば二篇』(The King's English Oxymoron) (私版, 1964)
 "Two Famous Japanese New-Style Poems" (英詩と和歌との比較)『桜美林短大紀要』第5輯(桜美林短大, 1965)
 「国語の移り変わり:聖書における英語と日本語との比較」『桜美林短大紀要』第6輯(桜美林短大, 1966)
- 田桐 大澄
 「音表象について」『一般教育研究報告』No.1 (立教大学, 1955)
 「否定表現の諸問題」(英語と日本語との比較を中心として)『英米文学』No.20 (立教大学, 1958)
 「愛情の表現」『英語教育』(比較語学サロン) Vol. IX, No. 8 (大修館, 1960)
 「嫌悪・皮肉・軽蔑の表現」『英語教育』(比較語学サロン) Vol. IX, No. 9 (大修館, 1960)
 「不定詞構文—日本語表現への転換上の問題」『英文法研究』Vol. IV, No. 10 (研究社, 1961)
 "Sonority and Word Order" 『英米文学』No. 24 (立教大学, 1963)
 「命令伝達の諸形式」(日英語 variety の比較)『現代英語教育』Vol. I, No. 1 (研究社, 1964)
 "English and Japanese" (A Comparative Study) 『英米文学』No. 25 (立教大学, 1964)
 「日英語の表現の比較」『日英語の比較』(現代英語教育講座 7) (研究社, 1965)
 「日英語の本質」『英語文学世界』No. 3 (英語文学世界社, 1967)
 田森長次郎
 『和漢英対照文法』(1913)
 Tang, Charles T.
 A Transformational Analysis of Japanese Verbs and Verb Phrases (Univ. of Texas, 1964)
 鳥居次好・兼子尚道
 『英語の発音』(大修館, 1962)
 鳥居 次好
 「日英発音の比較—特に Suprasegmentals について」
- Promising-Age 5号 (静岡大学, 1964)
 「音声指導の新处方箋」Nos. 2~5 『現代英語教育』Vol. I, Nos. 2~5, 12 (研究社, 1964, 1965)
- 豊田 実
 『日英語比較音声学』(英米文学語学講座)(研究社, 1944)
 "Toward a Comparative Phonetics of Japanese and English," Addresses and Papers at the Specialists' Conference (研究社, 1957)
- 上田 明子
 The Adnominal Modification in Japanese (Univ. of Texas, 1966)
- 模垣 実
 『国語に及ぼした英語の影響』(英語英文学講座) (研究社, 1933)
 "Japanese English" 『英語研究』No.300 (研究社, 1933)
 「外来語法の問題」『国語教育』Vol. XXI (国語研究会, 1936)
 「敬讓の表現」『言語問題』Vol. II, No. 7 (言語問題談話会, 1936)
 「横書きの印刷」『言語問題』Vol. II, No. 10 (言語問題談話会, 1936)
 「英語々法の国語に及ぼした影響」『同志社大学パンフレット』第6輯 (同志社文学会, 1942)
 「外国語的な表現の問題(1), (2)」『語学教育』Nos. 196, 197 (語学教育研究所, 1944)
 「外国語音の表記法」『市河博士還暦祝賀論文集』第1輯 (研究社, 1946)
 「英語発音入門教授法試案—Comparative Method—」『学芸研究—教育科学—』(和歌山大学学芸学部, 1952)
 「感情の表現形式」『主流』(同志社英文学会, 1953)
 『音節の研究—日英語音節の比較』(帝塚山短大, 1955)
 「"I'm coming" 考」『研究論文集』第1号 (関西外国语短期大学, 1956)
 『Aspect 論(覚え書き)』(帝塚山学院短期大, 1956)
 「往来語義考—'I'm coming' 考補遺—」『研究論文集』第2号 (関西外国语短期大学, 1956)
 「'数'の考え方, 現わし方」『英文法研究』Vol. 1, No. 7 (研究社, 1957)
 「'時'の考え方, 現わし方」『英文法研究』Vol. II, No. 1 (研究社, 1958)
 「「様態」と「動作態」「日英文法比較」『英文法研究』Vol. II, No. 6 (研究社, 1958)
 "Thunder Will Turn the Milk" 『英文法研究』(研究社, 1959)
 「Laugh と Cry —擬音表現の比較研究—」『研究論集』5 (関西外国语短期大学, 1960)

- 「英語の泣き方」(比較語学サロン)『英語教育』Vol. IX, No. 1 (大修館, 1960)
- 「英語の鳴き方」(比較語学サロン)『英語教育』Vol. IX, No. 2 (大修館, 1960)
- 「英語の笑い方」(比較語学サロン)『英語教育』Vol. IX, No. 3 (大修館, 1960)
- 「比較語学の立場から—学校英語はなぜ役に立たぬか—」『英語教育』Vol. IX, No. 5 (大修館, 1960)
- 「Give と 「やる」・「くれる」—授受動詞の比較研究—」『研究年報』8 (帝塚山短期大学, 1960)
- 「翻訳追放論(語学時評)」『英文法研究』Vol. IV, No. 9 (研究社, 1960)
- 「日本語と英語の完了時制」『英文法研究』Vol. IV, No. 11 (研究社, 1961)
- 「帽子はカブル靴はハク」(比較語学サロン)『英語教育』Vol. IX, No. 12 (大修館, 1961)
- 「Mind と こころ」『研究論集』6 (関西外語大, 1961)
- 『バラとさくら—日英比較語学入門—』(大修館, 1961)
- 「近代作家の文体と歐文調」『国文学—近代文学に投影した外国文学特集一』(学燈社, 1961)
- 「英語学習原理の再検討」『英語教育』Vol. XI, Nos. 2~6 (大修館, 1962)
- 「比較文型論の試み」『研究論集』10 (関西外語短大, 1964)
- 「日英比較文法の応用—無生物や抽象概念と主語とした文の場合—」『現代英語教育』Vol. I, No. 3 (研究社)
- 「母国語の障害」『英語教育』Vol. XIII, No. 6
- 「言語学習の基本条件」『研究年報』13 (帝塚山学院短大, 1965)
- 「熟語」「追放論」『研究論集』11 (関西外語大, 1966)
- 上村 幸雄
- 「國語教育と英語教育」本誌 Nos. 11, 12 (学研, 1964)
- 「外国语教育と英語教育」『現代英語教育』Vol. I, No. 9 (研究社, 1964)
- 山田 和男
- 「文構造から見た日英表現」『英語研究』Vol. LV, No. 10
- 山本 茂
- “English Pronunciation and Japanese Speech Habits”『金沢女子短期大学学葉』(金沢女子短大, 1965)
- “Some Notes on American Pronunciation of Japanese,” *Odessey; The Experiment* (The Experiment, Putney Vermont, 1960)
- 吉田 一衛
- 「英語および日本語の目的語比較について」『英語教育研究』No. 8 (広島大学教育学部英語教育研究室, 1965)
- 「動詞修飾構造を中心とした日本語の比較」『教育学研究紀要』(中国四国教育学会, 1965)
- 「日英両語における Verb Phrase の干渉度」(語学研究所大会発表資料, 1966)
- 「日英両語における自・他動詞表現の比較」『教育学研究紀要』(中国四国教育学会, 1966)
- 勇 康雄
- “On the Generation —of the —wa, —ga Constructions”『中島文雄教授還暦記念論文集』(研究社, 1965)
- Zierer, Ernesto
- “Japanese Relative Clauses in the Light & the Depth Hypothesis.” *Lengua y Ciencias* No. 15 (1965)

(Continued from p. 13)

a point where, after past tenses have been dealt with, useful word-groups are built up.

3. V. C. Bickley, *Poems To Enjoy*, University of London Press Ltd. Books One to Five plus two Teachers' Books. Each book is divided into three sections "Poems to Speak," "Pictures in Poetry" and "A Tale is Told." The collection has been especially chosen for foreign learners of English and the Teachers' Books contain detailed suggestions for the teaching of each poem.

G. Readers

1. Longmans' Structural Readers are graded by structure as well as by vocabulary.

There are six stages classified for use with Primary School, Secondary school or adult students.

2. The Oxford English Readers have a wide variety of types of story at a level where the retold story first becomes practicable. In the *Oxford English-Reader's Library* the original books have been adapted as little as possible but abridged where necessary.
3. Macmillan's Pattern Readers are arranged at three levels-Primary, Secondary and Adult-each level being progressive in three grades.

(English Language Officer,
The British Council)

Palmer と Fries との接点

—その 2 教材と言語の学習過程—



山 家 保

3. Palmer の教材観

Palmer によって代表される時代の言語観と Fries によって代表される現代の言語観との比較・評価については前号において述べた通りであるが、 Palmer の言語観が最も端的に示されているものに彼の教材観がある。

Palmer は彼の著書 *The Principles of Language-Study*, 1921 の中で gradation (段階づけ) ということについて、つぎのように述べている。

Gradation means passing from the known to the unknown by stages, each of which serves as a preparation for the next. If a course or a lesson is insufficiently graded, or graded on a wrong basis, the student's work will be marked by an excessive degree of inaccuracy. If a course is well graded, the student's rate of progress will increase in proportion as he advances. (p. 135)

〔段階づけとは、知っているものから未知のものへ段階を経て進むことであり、これらの段階のそれはつぎの段階への準備となるものである。もしも講座なり課なりの段階づけが不充分であったり、間違った基礎にもとづいている場合には、生徒の学習は極度の不正確さを伴うであろう。もしもある講座が充分な段階づけがなされておれば、生徒の進歩の割合は教材の進度に比例して増加してゆくであろう。〕

ここに述べられている gradation の理論は誠に立派で、その通りである。要するに生徒の学習上の抵抗が最も少なくなるような段階づけをすることは、現在のプログラム学習や teaching machine などの根本原理であり、近代的な教材編成では常に考慮に入れなければならない点である。

ところが問題は、どのような基礎に立って段階づけをするかである。Palmer は同じ著書の同じ頁につぎのように述べている。

In the ideally graded course the student is

caused to assimilate perfectly a relatively small but exceedingly important vocabulary; when perfectly assimilated, this nucleus will develop and grow in the manner of a snowball. (p. 135)

〔理想的な段階づけがなされている講座では、生徒は比較的少ないが、しかし非常に重要な語彙を完全に消化するように仕組まれている。そしてこれが完全に消化された場合には、この中核は丁度雪だるまのように大きく発展し成長してゆくのである。〕

(A) このような Palmer の教材観を見て、直ちに気がつくことは、彼の gradation の基礎は語彙であったということである。勿論このような考え方の背景には、当時の語彙中心の思潮があり、これが1930年代に続々と出された Palmer を始め、Michael West や Lawrence Faucett などの語彙表の背景ともなったものである。これらの語彙表作成の意図は勿論、語彙の頻度数の調査からその重要度を割出し、教材の作成に当っては重要度の高いものから順次段階を追って教えようということにあったのである。

従ってこの時代の教材観は語彙中心、項目中心のものであったことは疑いをいれない。これは Palmer の言語観では英語の構造というものに対しては何らの言及もなされていないことでも明らかであろう。

現代の言語観に依れば、外国語学習の中心となるものは、音韻組織と文法組織という英語の構造を、自由に自動的に駆使出来るようにマスターすることである。勿論どのような、最小限度の音韻組織や文法組織でも、これを運用するにはある程度の語彙を必要とすることは言を俟たない。しかしながら、この場合中核となるものは、語彙よりも構造であり、これが次第に発展し、拡大してゆくのである。このことは、本誌の No. 18 で新刊紹介として、Harold B. Allen 編の *Teaching English as a Second Language*, 1965 を紹介した中で、この本に収められている K.L. Pike の *Nucleation* と題する論文について説明した通りである。固体物理学 (solid state physics) ではつぎのように説明する。最初少数の原子ま

たは分子が集まって1つの構造型 (structural pattern) を形成する。これが核形成 (nucleation) である。これが繰り返されて結晶体となると説明されている。言語学習でも英語の構造の型 (pattern) というものが強固に形成されることに依ってはじめて言語の核形成が達成されるのである。Palmer のいう nucleus (中核) というものと、Pike のいう nucleus というものの差が明らかであろう。Pike に依れば、どんなに多くの語彙や文法の規則を知っていても、言語を自由に駆使出来ない人が多いが、これは言語の核形成が出来ていないからである。このように見えてくると、Palmer の教材観が語彙中心・項目中心であり、構造中心ではなかったということが必ず第一に挙げられる点である。

(B) 第二に気がつくことは、すでに Palmer の言語観のところでもふれたように、彼は外国語を学習する際に母国語が邪魔をすることは認めながら、それに対する対策は打ち出してはいなかった。これに対して Fries は、母国語をマスターしている大人はすでに、母国語で対立する言語記号を構成しないものには反応しないという盲点を発達させているのだから、これらの盲点を克服する対策をたてなければならないことを指摘している。これが現在では常識にすらなっている母国語と学習すべき外国語との構造の比較分析 (contrastive analysis) である。この比較分析によって英語の教材は極めて重点的・能率的なものになっているのである。このことに関しては、つぎに掲げる Fries および Twaddell, O'Connor からの引用文を見れば明らかであろう。

The most efficient materials are those that are based upon a scientific description of the language to be learned, carefully compared with a parallel description of the native language of the learner.

—C. C. Fries, *Teaching and Learning English as a Foreign Language*, p. 9

〔最も能率的な教材とは学ぶべき外国語の科学的な分析と、それと平行して行なわれる学習者の母国語の同様な分析とを注意深く比較したものに基づいたものである。〕

The function of comparative structural analysis is to indicate where practice is needed, and to suggest the efficient distribution of intensity of practice.

—O'Connor & Twaddell, *Intensive Training for an Oral Approach in Language Training*, p. 6

〔構造の分析比較の任務はどこで練習が必要であるかを示し、また練習の重点をどのように配分すれば

能率的であるかを示唆することである。〕

(C) Palmer の教材観で気がつく第三の点は構造教材の配列に関する理論のないことである。すでに Palmer の言語観のところで説いたように、彼の言語観の中には言語は互に対立する型から成り立っているという考え方はなかった。従って現在では常識になっている最小限の対立 (contrast of minimal pairs) というようなことも考えられなかった。

彼の説く gradation の理論を構造中心の教材にあてはめれば当然構造上最小の段階、あるいは構造上の最小の gap は何かが問題となる筈である。それでは構造上の最小の gap とは何か。それはとりもなおさず contrast of minimal pairs を構成する2つの構造の示差的差異である。

このような考え方を教材編成上の理論として始めて世界に発表したのが、1961年研究社から出版された Fries 夫妻の *Foundations for English Teaching* で、この訳注版「英語教授の基礎」が同じく研究社から出されたのが、1962年である。この考え方を要約すれば、英語の構造教材はつねに連続する対立の小さな段階 (successive small steps of contrast) を通じて導入し、生徒の学習上の抵抗を出来るだけ少なくするということである。

たとえば項目中心の教材にはよくあることであるが、前後にあらわれる他の構造とは無関係に突然 What is it a picture of? というような構造があらわれたとすると、この導入は非常にむづかしくなる。これと反対にこの構造が構造中心の教材の中で、つぎのような successive small steps of contrast という配列の中で導入されたとなると、これは極めて簡単で、生徒にもすぐ理解される。

- (1) *It is a picture of a dog.*
- (2) *Is it a picture of a dog?*
- (3) *What is it a picture of?*

つまり上の(1)と(2)は語順という点で対立し、その間の示差的差異 (distinctive difference) すなわち構造上の gap は最小である。同時に(2)と(3)も a dog という名詞に対する What という機能語の対立であって、両者の間の構造上の gap も最小である。つまり Fries のいう successive small steps of contrast とは、構造教材をこのような配列の中で導入すべきことを説いているのである。このような事柄はまだ一般には理解されていないようで、英國の言語学会の三羽鳥ともいいうべき M. A. K. Halliday, Angus McIntosh, Peter Strevens の共著 *The Linguistic Sciences and Language Teaching*, 1964でも教材の配列は頻度数に基づいて配列すべきであるなどといって、上に述べたような構造上最小の段階は何かというような点は全く見逃しているのである。

What criteria can we discover that will guide us in sequencing a list of teaching items? To begin with there are the same criteria that were considered in the discussion of selection. In general, teaching items that are in frequent use need to be taught before those that are more rare.... So the criterion of frequency not only helps to decide whether an item shall be selected for inclusion at all; it also helps to decide the sequence in which the items selected shall be taught. (p. 210)

〔一連の導指すべき項目を配列する場合の指針となる基準としてはどんなものがあるだろうか。まず第一に教材の選択を論ずる際に考慮した同じ基準がある。一般的に言って、頻繁に用いられる指導項目は、まれにしか用いられないものよりも前に指導する必要がある。従って頻度数という基準は、ある項目を教材の中に含めるか含めないかを決定するのに役立つばかりでなく、指導項目をどういう配列に従って指導すべきかを決定するのにも役立つのである。〕

もちろん構造教材を選択配列する場合、頻度数を考慮すべきことはいうまでもない。しかしそれだけでは語彙の配列を頻度数に従って配列するのと、どう異なるであろうか。構造教材の配列にはもっときめの細かな、構造上の gap を考えた段階づけが必要であろう。

(D) Palmer の教材観について気のつく第四の点は、教材の適量という問題には何らの言及もないことである。1時間に指導すべき教材の中に、新しく導入すべき項目があまりにも多過ぎる場合には、生徒は消化し切れず、いわゆる不完全学習となることは周知の事実である。たとえば文部省の指導要領では、中学の1年では1時間に導入すべき新語の数の平均は3語、2年、3年では4語であるといっている。しかるに実際はどうかというと、1時間に指導すべき教材の中に新語は8つ、それに文法事項が3なり4というのは珍らしくはない。つまり1時間で新しく導入すべき項目の数は11、12というのはざらであることも周知の通りである。こうなると生徒は消化を起し、いわゆる不完全学習の連続という悪循環を繰り返すだけになる。このような教材では英語の内容を日本語で理解するのがせいぜいということになり、英語の言語習慣を身につけさせるという英語教育の本道からは随分それたものになるのは当然である。

われわれは以前から1時間に指導すべき新しい項目は、語彙・文法を含めて5つ、ないし6つ以内とすべきことを主張し、またわれわれの Teachers' Guide ではこの原則に従って1時間、1時間の指導細案がつくられてい

るのである。

このことは偶然ながら1961アフリカの Uganda で開かれた英連邦英語教育会議 (The Commonwealth Conference on Teaching English as a Second Language) で、1時間に指導すべき文法および語彙の項目の数を5つないし6つとしていることと全く一致しているのである。この会議の決議では The acquisition of five or six meanings at a time... という表現を用いている。この meanings としていることは lexical meaning (語彙としての意味) と structural meaning (構造から生まれる意味) の両方をさしているものと思われる。いずれにしても最近教材の適量という問題に関心がたかまりつつあるように思われるは喜ばしい。

4. Palmer の言語の学習過程に関する見解

Palmer は既に述べたように言語の学習は、identification (了解) と fusion (融合) の2つから成り立つものとしているが、1948年にこれを達成するためにはつぎの5つの習性 (speech-learning habits) をもたなければならないという論文を発表している。

- (1) Auditory observation (耳による観察)
- (2) Oral imitation (口による模倣)
- (3) Catenizing (口ならし)
- (4) Semanticizing (意味づけ)
- (5) Composition by analogy (類推による作文)
 - (a) Substitution (置換)
 - (b) Conversion (転換)

Palmer は幼児が母国語を習得するのは、上に述べたような5つの言語習得の習性をもっているからであるとし、これを既に母国語の習得を終わったものの外国語学習に応用しようとしたのである。このことは直ちに英語を母国語として学習することと、外国語として学習することとの根本的な差異を見落していることであり、このことから無理が生じてくるのは当然のことである。幼児の場合、よく大人の発話を聴いてよく観察し、つぎに口まねをし、なんども口ならしをして意味も分らないことを口ばしることはよくある。そして余程口ならしをやってから、この発話の生じた場面や大人の説明などによって、この発話の意味をあとから理解することも往々あることである。だからといって、既に母国語を習得してしまって、英語を外国語として学習しようという者に対してもこの順序で学習すべきであるなどということにはならない。言語習得のための習性 (habits) といっても、耳による観察なしに、口まねをすることは不可能であろうし、口まねすることなしに、口ならしは不可能である。従ってこの five speech-learning habits は言語学習の過程を示すものと考えてよいであろう。

Palmer は(4)の semanticizing と(3)の catenizing は順序が逆になってしまふらしいといっているが、口まねをするときでも、口ならしをするときでも既に意味を理解した上でやった方が意味づけは強固になる筈である。いい加減口まね、口ならしをやったあとで、「只今まで練習したことは実はこういう意味のことでした。」などという指導は少なくとも現在の常識では考えられないことである。少なくとも外国語の学習の場合は、ある発話をきいたら、それが生じた場面や教師の適切な指導によってその意味を理解し、その後口まねをし、口ならしをして、なめらかに言えるところまで練習することが大切であろう。

Palmer はある発話をなめらかに言えるようになったら、今度は類推によってこれをどんどん発展させてゆくのであり、このための方法として substitution (置換) と conversion (転換) をあげている。

この 2 つのものに対してはあとで論評を加えることとして、現在は言語学習の過程をどのように考えているのであろうか。これについては Brown 大学の W. Freeman Twaddell の Five Steps of Language Learning (ELEC PUBLICATIONS, Vol. III) がある。

- (1) Recognition (発話を正確に聞きとてその意味を理解すること)
- (2) Imitation (教師の示す手本の通りまねをし記憶すること)
- (3) Repetition (自分の記憶に従って何度も繰り返し、はっきり、大きな声で、はやく言えるようになること)
- (4) Variation (記憶している文型に部分的な変化を加えて他の文をつくること)
- (5) Selection (自分の習得した英語の中から、ある場面または意味を表わすものを選んで発表すること)

これを Palmer の five speech-learning habits と比較すると、(1)から(3)までは Palmer の(1)から(4)に相当するが、ただ異なるところは、Twaddell は Palmer の auditory observation と semanticizing とをまとめて、recognition として(1)に出していることである。ここまでは戦時中アメリカの軍部が行なった ASTP の方法で言えば mimicry-memorization (まねをして記憶すること) の段階であり、また imitation と repetition を強化するために用いられている技術を、mimicry-memorization を略して Mim-mem と称しているのであるから、むしろ(1)から(3)までを、(1) Recognition, (2) Mimicry, (3) Memorization とした方がもっと分り易いのではないかと思われる。

問題はこのあとの variation と selection である。variation には、ある文型の構成要素の位置に、つぎつぎと別の語を代入してゆく substitution (代入) と、語順や機能語を変えて別の文をつくる conversion (転換)、また修飾語句をつぎつぎと加えてゆく expansion (展開) の 3 種類のあることは周知の通りである。肝心なことは、つぎの例に見る通り、substitution の場合でも、conversion の場合でも、expansion の場合でも、1 つの文から他の文に移る場合の変化は一段階だけの変化 (one-step change) であり、こうして作り出される文はそれぞれ前後の文とは互に対立して、全体として連続する対立の小さな段階という配列になっており、従って 1 つの文とつぎの文との間の構造上の gap は最小であるということである。

(a) Substitution

It is a dog.
It is a cat.
It is my cat.
It was my cat.
That was my cat.

(b) Conversion

It is a dog. → It is *not* a dog.
He is a teacher. → Is he a teacher?
→ What is he?

(c) Expansion

It is a dog.
It is a big dog.
It is a big white dog.

ところが selection になると、この点は全く異なってくる。selection はある意味または、ある場面を表わす文を自分の習得している英語の中から選び出すのであるから、その最も典型的なものは問答である。たとえば A が We went on a picnic yesterday. と言ったのに対して、B が Where did you go? と問うたら、A が We went to Hakone. と言ったとすると、これは典型的な selection である。selection とは別の言葉で言えば、ある場面、あるいは意味を表わす stimulus (刺戟) の文に対して、それに応ずる response (応答) の文を選ぶことなのである。

ところで上の We went on a picnic yesterday. という stimulus と Where did you go? という response との間には、つぎのような構造上の gap がある。

- (1) We went on a picnic yesterday.
- (2) You went on a picnic yesterday.
- (3) Did you go on a picnic yesterday?
- (4) Where did you go?

これは Where did you go? と We went to Hakone. についても言えることで、selection の場合は、stimulus と response との間には、variation とは比較にならない構造上の gap があるのである。上の(1)から(4)までの文の配列を見れば、それぞれ一段階だけの操作の変化であり、正に variation である。つまり stimulus と response との構造上の gap を埋めるものが、variation であり、問答のような selection をなめらかに行なうためには、まず variation を通して stimulus と response との間の構造上の gap を埋めておくことが先決条件であることが明らかであろう。

よく pattern practice は、Palmer のいう substitution と同じであるというようなことをいう人がある。これはなにも日本人に限ったことではなく、つぎのような quotations を見れば明らかである。

Thus in the sentence *The big boy came home* there is a slot where *boy* may be replaced by *girl*, *man*, etc. New vocabulary is learned most easily not through rote memory alone, but through the hearing or speaking of new words in such grammatical positions. The "substitution tables" of British scholars or the "pattern practice" of the English Language Institute, University of Michigan, etc., take advantage of this fact. (K. L. Pike, *Nucleation*)

〔このように The big boy came home. という文には、boy の代りに girl や man などを代入出来る代入個所(slot)がある。新しい語彙は単に丸暗記するだけでなく、このような文法的な位置に代入された新語を聞いたり、話したりすることによって最も容易に習得されるのである。英国の学者のいう substitution tables やミシガン大学の英語研究所の pattern practice はこの事実を利用したものである。〕

すべての文型にはこのような slot(代入個所)があるというのは Pike の Tagmemics の理論の中心をなすものであるが、William G. Moulton はつぎのように述べている。

Tagmemic theory underlies all the pattern practice exercises which we have recently begun to find so helpful. (W. G. Moulton, *Applied Linguistics in the Classroom*)

〔Tagmemics の理論は、われわれが最近非常に有効であることを発見したあらゆる pattern practice の練習の根底をなすものである。〕

しかしわれわれは pattern practice は variation のみでなく、selection をも扱うものであり、また variation

には substitution のみでなく、conversion も expansion もあることをよく知っている。

Palmer の substitution はいわゆる substitution table(置換表)を用いて練習させるものであるが、これは現在の pattern practice の substitution とはつぎの点で異なる。

(a) pattern practice は全く oral で聴覚のみを通しておこなわれるが、substitution table では表を見ながら、つまり視覚に訴えて練習する。

(b) pattern practice では cue を与えて生徒の注意力をそれにひきつけ、逆に生徒の注意力を問題点からひき離しておいて、狙う文型を半ば無意識のうちにでも正確に言わせることが中心であるが、substitution table では視覚にうたって、むしろ生徒の注意力を問題点に向けさせておいて練習させる。これでは自動的な言語習慣を養うのには余り効果的ではない。

たとえば He gets up at six. の言える生徒に usually という cue を与えて、注意力をそれに向けさせると、彼は He usually get up at six. といつの間にか gets の s を落していることは教師なら誰でも知っていることである。たとえ usually を与えられても gets と s を落さなくなるような練習が必要な所以である。

(c) pattern practice では variation の場合、練習すべき文は連続する対立の小さな段階という配列になり、構造上の gap は最小となるが、substitution table にはそのような原則は確立していない。

以上本号では教材と言語の学習過程に関する Palmer の見解と現在の考え方とを比較して考察したのであるが、次号では具体的な指導技術について述べてみたいと思う。

(ELEC 教育課長)

— p. 55 より —

於新潟市立宮浦中学校（8月15日～24日）

(4) 四国地区英語教育指導者講習会

於徳島商業高等学校（8月19日～28日）

◆ ELEC 人事往来

- ◇ ELEC 評議員・新関八洲太郎氏「春の叙勲」にて勲二等瑞宝章を授与せられた。
- ◇ ELEC 評議員 高垣勝次郎氏 4月30日逝去。
- ◇ ELEC 主事 串原国穂氏 ELEC から在外研究を命ぜられ、本年1月1日本邦を出発し、米国ピッツバーグ大学において英語教育研究に従事した後、欧州諸国を視察して5月8日帰国した。
- ◇ ELEC 主事 桜井洋子氏 2月28日付退職。



Oral Approach を実践して

愛知県岡崎市立美川中学校

鈴木和夫

I. はじめに

人間にとって大切なものは、十人十色欲望に限りがないように枚挙にいとまがない。しかし最も大切なものは、何をおいてもまず生きるということではなかろうか。その最も大切な生きるということに疑問をもつとしたら、これ以上の不幸はなかろう。前任校矢作中でのある日、生徒会長がしゃんぽり話しかけてきた。「先生、英語は何故勉強せにゃならんですか。随分僕としては時間をかけてやっているのですが、段々分らんようになってしまって…」何故生きねばならぬかが自殺一步前の叫びであるならば、学生にとって何故勉強せねばならぬかは、学問放棄への泣きじゃくりでなくて何であろう。思えば長年教師をしている自分にとって、何故英語を教えねばならぬのか、目前の現世利益はともかくとして、考え続けて依然判然とは分らずじまいである。関係図書を読みあさってみても、一応はうなづけても心からそうだと満足させてくれたものはなかった。しかし今生徒にはっきりこうだと答えられないにしても、何故彼がその様に考え出したか、悩み出したかは分るような気がした。言語理論と名のつく勉強をしたこともなく、英語科授業の進め方について教えられたこともない代用教員。然しそれなりに指導書やレコードによって自己研修に務め、あれもこれもと系統的ではないが、教えんかなの高姿勢での毎日、生徒にとっては、横に書かれた英語を縦にする解釈作業にとどまらず、次から次へと教師の知る限りの断片的知識のうけうりとあっては、生きた言語を使う魅力は与えられず、学習作業の予測も出来ず、ただ消化不良のまま負債の増加に学生たちのぎりぎりの良心から助けを求めて来たのであろう。最優秀な生徒にして消化不良であるならば、中位下位の大多数にとって、一体今までの指導は何を意味するか。長い長い灰色の毎日。教師としてとどまることへの罪悪にうなされ、時に同僚の授業を参観したり各種研究会に参加し、また種々手あたり次第に本に救いを求め、何とかして自分も生徒も救われたいの一念であった。丁度この時、目にふれたのが、かの有名な『Pattern Practice と Contrast』であった。読んだことのない実践記録であり、机上の寝言でないことは、あたかも深い霧に一条の光明とも見られた。熟読模倣の歳月の中で、数多の疑問に、一度もお会いしたこともない

先生に直訴すること數十回、大先生にご返事給わるとは田舎の常識からすればほとんど不可能事であり、今更ながらに先生のご恩に感謝するものである。かくして苦悩の末に Oral Approach への門は開けてきたのである。

II. 岡崎市内の研究動向と本校英語科の沿革

1. 言語学のめざましい発展から、予想も出来なかつた偉大な理論とそれが実際の授業にとり入れられて以来、生徒の productive ability がすばらしく向上するという実証がいたるところでなされた。岡崎市内にあっても1959年矢作中学において、その翌々年葵中学において Oral Approach の研究発表が行なわれた。この研究結果により、外的諸条件即ち地域の文化的レベル、その他はさしたる問題ではなく、およそ英語に縁のない農山村の中学校にあっても、教師の指導如何によって大きな効果を挙げうることが証明された。

しかし依然としてこれらの恩恵から疎外された学校、あるいは意識的にこれらの業績に耳目を蔽う学校にあっては、成績の不振が問題になり高校入試と相まって多量の生徒を学習塾に追いやることとなり、教師の無能と世相の乱れから非行生徒の大量生産というありがたくない悪循環を辿る面も無視出来なかった。

2. 更に生活水準の向上にひきかえ、教員の待遇甚だ貧弱、教員養成所の学大すら、卒業生は高給を求めて一般会社へ消え去る者多く、またフルベースに近い授業時間と雑務地獄の中學から樂園視される高校教師への転出もあとをたたない。しかしこのような時点にいたった時、市内英語科の先生達が結束し始めたのであった。

3. ①正しい言語理論に立脚した指導法であり更に誰にでも指導出来る方法。現状は免許状所有者だけでは英語科の運営が不可能になってきた。もちろん免許状の有無が授業内容の優劣を決定するものではない。免許状所有者でも単なる学者、批評家であったり、また国籍不明なほどの流暢な英会話専門家であっても、それがすぐ効果を挙げうる立派な教師とはいえない。

あたかも日本人のすべてが立派な日本語の教師たりえないと同じである。

②どんな田舎の生徒にも指導可能な方法。

③学校の中で完全に指導できるもので塾におんぶしない

もの。

4. 本校は市の東部、男川流域に学区があり、父兄の職業分布は兼業農家37%を筆頭に、特に変わったものとして反毛業と共にせざる父兄が多い。炭鉱職者として九州から来たほとんどがこの反毛工員となる。専業農家にみえる落ちつきもなく、文化レベル、教育的関心等からみて岡崎市の中でも低い方とみられている。

また本校の英語科の教員構成も年々改良されている。然し教師はそれぞれに個性、歴史をもち強引に1つの方法でひきずることが人間関係上好ましくないこともある。あたたかい人間関係の上にたつものでない限り、学校教育全体としてみると、功罪相半ばし、なかなか問題は深い。教師なら誰一人として心に子供の人間的成长、教科の成績向上を望まぬものはない。その対象に対する最大公約数を作り、具体的に授業の流れを確立するのには如何に免許状所有者といえども長い年月を必要としよう。時には経験者であればこそ却て経験とか、妙な感情が働いて、素人以上に厄介な問題をひき起す事が多い。自説を説く前に仲間の考えを謙虚に尋ね、その中から共通の意識が生まれてくるのである。さて私の就任第1年目は殊にひどい人員構成で、生徒の半数以上が免許状非所有者にまかされていたのであった。しかしゆがんだ自我意識にこった人もなく、実に楽しい1年であった。殊にその中の3人は大学4年生在学の学生であり、現在はそれぞれあの1年を足がかりとして活躍している。毎週1回ずつの部会をもち、毎月2回の研究授業を続け、どうやら足なみがそろい調子が出た時には3月の学年末が来ていたのである。そして私を除くすべてが転退職され、また新たな旅が始った。第1年目は1年生の担任を命ぜられ、6組中4組を教えて、第2年目(1965年)には学年を1つとびこえて3年生の担任となり、しかも進学主任の大任をおおせつかったわけである。そして3年生4組と、2年生1組を指導して来た。進学関係の多忙もてつだって、英語部会も余り活発には開くことも出来なかつた。3年の担任を1年務めると大体翌年は1年の担任に返るという慣習、今度こそ1年生の初めから3年間を持つものと期待に胸をふくらませて第3年目を迎えることとなつた。然し校長の担任発表にその期待も完全にうち消された。つまり再び3年生の進学主任として留まるということになったわけである。新3年生は彼らが1年生の時の教え子であり、中学英語の最後に責任をとることはむしろ光栄なことであり、連続した3年間の記録はまたいつの日にか実現もされようと、よろこんで拝命し

兼業農家	— 37%
サラリーマン	— 35%
反毛・ガラ紡工員	— 21%
商業	— 7%

た訳である。随分と自分のことをくどく書きつづるのは、後述 written-test の結果を考える時、3年間連続的に同じ指導法で指導されたものでないという付帯条件があり、止むを得ず綴るものである。1964年本校に入学した生徒262名中、 $\frac{2}{3}$ を1年に、2年は $\frac{1}{6}$ を、そして第3年目は $\frac{5}{6}$ を教えることになった訳である。学年が変わる毎にクラスの再編成が行なわれ、炭鉱職者の出入りもはげしく、更に1966年は彼らの3年生の教科書がかえられた年である。

III. 授業の流れ

現在使用している教科書の Teachers' Manual に『フリーズ氏の Oral Approach の方法によるにしても、教科書自体がこの理論を基にして作られたものでなければ指導は全く困難です。

またそのような教科書によつたとしても、sentence pattern を繰り返し習うという単純な作業に熱中できるごく初步の段階はいいとして、それから先は問題がでてくると思います。ですからこれこそ完全な理想的な指導法であるというのではないのだと思います。』と述べ指導法として一貫した principle をもたず、現場のなりゆきにまかせたと考えられるし、また論中 Oral Approach には沿っていないという妙な principle を感ずる。言語学のイロハも学んだことのない現場にとっては、大先生方の作られた Teachers' Guide で、それをよりどころにし、授業を展開(これが最も良心的な教科書の使い方と思う。)しても、いたるところに机上の空論が散見し、生徒の production の力はつかず、市の現職教育部としても結局この Guide は駄目だと悲しい結論を下すにいたつた。たとえば1時間に指導可能な new words, new structures の数は併せて5ないし6であるはずなのに、この教科書は1セクション1時間で teaching points の数が10も15も出て来る。このように現場に対する本当にきめ細かな配慮に欠けており、昨年以来、全市をあげて1時間に実際にどれだけ指導出来るかについての資料を作りつつある。さて50分の流れは ELEC・サマー・プログラムのそれと全く同じである。

I. Review

- Choral reading of the review material or recitations
- Pattern-practice
- Written test

先日朝日新聞の文化欄に、『話せるようになることが外国語教育の目的でないという人がいる。話すことだけが目的でないことは、だれでも異存がないであろう。しかし根本的な問題は、ことばの第1次的な機能は、人

間が音声を用い、聴覚を通じて、相互にコミュニケーションをするのだということが本当に認識されていない点である。……中略……現在の中・高校・大学の外国语教育の大部分は、横書きのリーダーを縦書きの日本語になおすことに終始している。……全く然り。大勢はそうしなくてはならないと知りながらも主観的・客観的諸条件のために語学教育の本道から逸脱してしまっている。限られた僅かの語によって、とにも角にも言いたいことを言うということが必要である。横書き文化が、わが日本のそれより質的にも量的にもすぐれ、日本が全くの未開社会であるということを前提とするならば、英語を日本語に解釈することに終始すべきである。しかし、宇宙ロケットは例外としても、あらゆる産業に学問に、また古い文化遺産にしても、日本は今や諸外国に輸出する時代である。輸入の英語教育から、輸出の英語、それを支えるものの1つは、話すこと書くことの訓練である。Review の重要性、なかんずく Pattern-practice こそ、それを集中的に訓練する最高の場であると思う。

飽くまで教師により control された speaking の練習ではあるが Free Conversation への重要な足がかりであろう。限られた時間内において生徒の練習量を最大限にするために留意すべき点は、⑦教師の与える Cue が明確であること。①平易なものから難しいものへ移行発展する練習、②Variation と Selection を峻別した練習、③Situation をわきまえた練習であること。④Speedy な英語であること。

その他『新しい英語教育——英語の授業はどうみるべきか』は山家先生多年の実践記録のエッセンスで、科学化された常識というか、正しい言語理論に裏うちされた授業運び百項目である。

Selection には種々の方法があるが、これは従来 teacher-question, pupils-answer の形がより高次に組織化、能率的に編成された方法と考える。たとえば Your Father went to Tokyo yesterday. という Situation の中に Who? Where? When? という Cue で疑問文を作らせ、また、それぞれに答えさせる方法で

あるが、他に ELEC の専売ともいわれる Controlled conversation の Technique による方法、また他に Cue の与え方も ① your ② your father ③ Tokyo ④ yesterday という答えの部分のポイントを与えることから、それに相応した疑問文を作らせ、その上で再び答えの主となる部分 (stort answer) を最初に、つづいて答えを full sentence を要求している。以上口頭で練習し発表出来たものを書いてみる drill が復習の最後に来る、すなわち written test である。Evaluation for the students というよりは for the teacher として考えるべきである。学区の実情により家庭学習の習慣化が困難で、切角口でいえても、字にならない生徒、word order のミスではなく単語のミスも單に家庭学習にのみまかすわけにいかない。実際に兼業農家では百姓仕事が母親や子供にまかされる場合が多く、反毛工員子弟では食事の用意その他が彼らの分担された仕事の領域でもあり、writing そのものの練習も defining stntences の copying 等を授業の中へとり入れることにより、記憶の確実化や、定着化をはかり、少しでも成績の向上につとめている。だからといって、writing の基礎となるものの作業を犠牲にしてはなるまい。要は生徒が独りでは学習しえない作業を完全に学校で消化してやることが大切ではなかろうか。written test では pattern-practice で練習した文の中から、⑦ Pattern-practice で与えた与え方で提示したり、①日本語で与えたり、③ wall picture や gesture 等によりできるだけ問題があいまいな与え方にならないようにしている。更に教科書の本文通りに出すのが正しい testing かどうかということであるが、たとえば数字に於いて教科書通りの数値なら出来るが、数値を少し変えるだけでもうやれなくなってしまう場合が随分あるときかされ、教科書通りではないが口頭練習で指導されているというものの中から出すようにしている。次にこの3月卒業した生徒について、その1年、2年、3年の Written-test の成績を発表しよう。教科書の変更、教員の異動等により、262名全員についての連続3年間の統計が出来なかった。それ

●Written test 月別統計表
(1964年→1966年)

第1学年(4クラス)
第2学年(1クラス)
第3学年(5クラス)

学年	(1964年) 第1学年											
	月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
回数	8	21	20	12	16	20	21	18	13	18	13	
A	13.81	13.87	15.62	22.20	20.63	14.28	18.36	14.31	19.78	23.55	22.18	
B(ミス)	32.13	34.19	32.93	24.70	34.44	30.61	32.27	32.54	33.71	32.13	34.97	
C(ミス)	32.57	17.65	17.23	12.47	12.83	14.89	13.41	13.23	15.64	13.57	12.52	
D(ミス)	21.49	34.29	34.22	40.63	32.10	40.22	35.96	39.92	30.87	30.75	30.33	
(6以上)												

(表、次頁につづく)

現われる悩みである。教科書が如何に大先生達によって作られたとしても、現場の砂をかぶったもので、この様に指導するのだという自信に満ちた Teachers' Guide が用意されていない限り所詮は机上のプランのそしりはまぬがれ得ない。よく新制大学になって学生達は入学のための猛勉はするが、入学後はマージャンにうつつをぬかすといわれるが、教科書会社にも似たところがありはしないか。採択までは選挙前の政治家と同じく実に謙虚である。まずいことだ。

『格に入って、格を出る』といわれるが、何かにつけてにぶい自分は、先ず格に入ることに全エネルギーを注入している。いう迄もなく絶対の存在を認めるわけではないが、より効果的より科学的な方法を発見する前提こそ実はこの忠実な実践による内部矛盾の発見ではなかろうか。E L E C ・ 中央講習会で同じ組になった九州は熊本県菊地中学の田上明子先生の実践記録に、「もし教師がはっきりした根拠もなく、一瞬のひらめき、思いつきによって任意な学習作業をさせるとすれば、系統的でも、連続的でもない指導方法から得られるものは、運動選手が目標もなく、めちゃくちゃに体を動かしてくたびれると同じである。Personal なものがあつて teaching procedure が生まれるのでなく、客観的な言語理論に基づかれた teaching procedure の中に personal なものを入れる。」と述べておられるが、先生が 1 年生を対象に "New Prince" を使って指導された written-test の結果をかかげておこう。

1964 年 (1 年生)

	6月(14回)	7月(12回)	9月(10回)	10月(10回)
A	26.2	44.4	31.6	38.3
B	38.4	26.5	26.5	39.0
C	11.9	0.8	15.4	5.3
D	23.5	28.3	26.5	17.4

Oral Approach という考え方にして作られた教科書に比較すれば、成績のカーブも、教科書の教材のならべ方、考え方の相異とか、消化の程度により、随分と判然としない向きもあるが、とにかく教材が難しくなるのにもかかわらず徐々に向かっている。岡崎市内にあっても美川中学ばかりではなく、六ツ美中学校岩瀬先生、矢作中学校の野々村先生の実践結果からも同じような結果が出されている。

10 年近い実践の中に Oral Approach の具体的指導法も E L E C においてどんどん改良され、幸か不幸か、今自分として何ら言葉をさしはさむ余地もない。むしろ自らの不勉強のため予想される好成績が出ないのを残念に思う。

以下ささやかな歩みから種々の困難点をまとめてみる

と。

IV. 反省

その第 1 は教材そのものについてである。一部の教科書を除いては教条的に Oral Approach に対決する姿勢をとっているということである。その実 Oral Approach の考え方には大きく影響され、変更を余儀なくされている。商売上のテクニックもあろうが時代の動きに、言語観の発展により忠実に、正しいものは正しいと素直に認める態度が望ましい。連続する最小のステップをふまえて、より使い易い教科書が作られるよう希望したい。第 2 に教材の良し悪しはそれ自体では案外不分明な事があると思う。実際にこう指導するのだという Teachers' Guide を作り実演する間に、時に教材の変更を余儀なくされる時があると考える。数年前は教組の研究集会で教材の自主編成ということが叫ばれたが、大先生達は現場の教師がそれ程生徒の幸福を願って無駄のない授業を進めようと分不相応な難問に当っているという事に謙虚に思いをいたされたい。Teachers' Guide の重要な要素は Review と Oral introduction であると考える。中でも Oral introduction が全くの未開拓で、新しい項目を日本語に翻訳することだけで、英語教育の中で極めて重要な部分例えば aural comprehension の養成を何ら他に用意しないというのでは『Guide』に値しない。

最後に教育はどんなに物的諸条件が完備されても、その実効は約束されない。教師の熱意と創造的で持続的な根性に支えられてのみ、すばらしい子供と英語教育の効果をあげることが出来る。教師と教師、教師と生徒の暖い人間的血のかよいを根底としてのみ可能なことであり、一部の Technician による線香花火的ショーは現場をリードする力を持たない。孤高の時代はチョンマゲと共に消えた。一緒に頑張りましょう。

Oral Approach とか Pattern-practice がいわれてからもう随分の歳月が流れた。しかしよいよこれからが大切である。理論的にも実践的にもより深めていく時であると考える。移り気は教師の名に値しない。たとえ流行おくれとそしられようとも、学者や批評家に真似の出来ない毎日の教育実践をじっくり考え、じっくり味わっていこう。



■名著解題

Otto Jespersen, *Growth and Structure of the English Language*. 1905, iv + 244pp., Basil Blackwell, Oxford, ninth edition, 1956.

国広哲弥

英語史の標準的参考文献としては、入手しやすいものに限っても大分色々のものがある。内容的にも H. C. Wyld の *A Short History of English* のように主として音韻史を扱ったもの、L. P. Smith の *The English Language* のように語彙を扱ったもの、A. C. Baugh の *A History of the English Language* のように全般を扱ったものと、さまざまである。いま話を英語史全般を一応扱っている手頃の概説書に限るとすると、まず挙げるべき魅力的なものは、Simeon Potter も言っているように、この Jespersen の *Growth* と Henry Bradley の *The Making of English* の 2 冊であろう。Jespersen 以後にも C. L. Wrenn, *The English Language* (1949, 中島文雄博士注、研究社翻刻版あり), Simeon Potter, *Our Language* (1950, Penguin Books), F. Mossé, *Esquisse d'une Histoire de la Langue Anglaise* (1958, 郡司利男・岡田尚訳『F・モセ英語史概説』開文社), G. L. Brook, *A History of the English Language* (1958, Andre Deutsch, 桜井益雄訳『ブルック英語史概論』千城書店)などの好著がある。それぞれに捨てがたい特色があるが、今回は Jespersen のものをこれらの類書と比較してみた場合に浮かび上ってくる特色に重点をおきながら紹介してみたいと思う。

Jespersen の *Growth* の特色の第一は、平明で折り目正しい英語が用いてあることである。このことは Wrenn のものと比較してみると特にはっきりする。そのために内容に注意の焦点を合わせながら一気に読ができるが、このことは我々外国人にとって決して無視できない魅力である。平明でありながら内容は緊密で、興味深い筆致で述べられており、学問的水準も決して落とされていない。叙述の緊密性の点は G. H. McKnight の *Modern English in the Making* と比較すると

明らかになるであろう。

内容としては語彙に重点があり、全体の三分の二を占めている。同じく語彙を扱っても、Smith のは語彙を通して背後の文化史を探ることに重点があるが、Jespersen はずっと語学的である。語彙の借入について述べる際も、常に英語の語彙構造との関連を考え、語形成の面の考察を忘れない。本書に盛られたさまざまの言語現象の記述は、英語教師たるもの必ず必得ておくべきことのように思われる。

引用された例が適切で説得力に富むことは何時もながら Jespersen の特色である。たとえばラテン語系単語の偏用 (Johnsonese) の例として、生卵のすり方を説明するとき、「Make a hole in each end and suck.」と言えばよいところを「Take an egg, 'she said, 'and make a perforation in the base and a corresponding one in the apex. Then apply the lips to the aperture, and by forcibly inhaling the breath the shell is entirely discharged of its contents.」(§146) と言ったという話を紹介している。又イギリス人は属格を重ねて使って「He is my wife's first husband's only child's godfather.」(Pinero) のように言うのは嫌うが、of phraseの方はそうでもないとして次の例を挙げる: on the occasion of the coming of age of the youngest sons of a wealthy member of Parliament' (§193)。

最後に挙げたい特色は、色々な言語現象に触れる際、ただ事実の記述にとどまらず、その原因を追究したり、又一般的な問題として把えて考察を押し進めている点である。以下章を追って概要を紹介するが、特にこの点に重点をおいてみたいと思う。

Ch. I. Preliminary sketch. まず本書の目的は、英語の chief peculiarities、言語史と一般文化史との関連、言語と国民性との関係を明らかにすることであると言う。言葉を継いで英語は男性的な (masculine) 言語であることをその音声組織の明晰さ・発音の力強さ・文体の簡潔性・単語の単音節性・表現の sobriety・音調の上下が少ないと、縮小語尾をほとんど用いないこと、語順の緊密性・文法が free from pedantry であること・語彙が豊富であることなどから証明しようとする。このような特質は民族性も共有しているという。(§19)。

Ch. II. The Beginnings. 極く簡単に印欧祖語からゲルマン語に至る節道を語り、ついでゲルマン語の特徴を

述べる。アクセントが語頭に移動することについてはその理由を考察し、単語の中で *value* の最も大きな部分を強調する ‘value-stressing’ の例であると言う (§27)。これはフランス語式に比べて ‘more rational, more logical’ であり、細かなニュアンスには拘泥せず必要なことだけを強調する国民性とある程度の関連があるようだと言う (28)。借入語は言語変化のみならず一般文化史の *milestone* としての意義を持つことを述べ、借入の第一波であるキリスト教改宗以前の大陸におけるラテン語借入に触れる。具体的な単語が多く、語形が短いことに注意している。

Ch. III. Old English. 先住民族ケルト人種からの借入語はほとんどなかったことに触れ、その理由を考察する。議論は借入の方向について的一般論となり、文化の高い方から低い方へ借入されることを説き、ケルト文化は低かったのだと言う。(Cf. L. Bloomfield, *Language*, ch. 26, *Intimate Borrowing*.) ついでラテン語借入について詳しい分類を行なう。ここで、何故後世と違つてもっと多くの既成のラテン語が借入されなかつたかの考察がなされる。OE の散文と詩を論じたところでは、OE 詩における類義語の豊富さを述べ、その理由について Sweet や Gabelentz の言葉を引きながら考察を加える。

Ch. IV. The Scandinavians (以下 ON と略記). 恐らく著者がデンマーク人であることの反映であろうと思われるが、ON 借入語の分類は極めて生彩に富んだ木目の細かいものである。丁度 Mossé の本の中でフランス語の影響を論じた部分が統語法・慣用法・作詩法まで及んで生彩に満ちているのと同様である。ON 借入語分類の一端を示すと、ON をそのまま借入したもの、OE に合うように少し変形したもの、ON が OE の古語を復活させたもの、OE と ON が共存するもの、OE 形に ON の意味がはいりこんだもの、構造的な理由で借入されたもの、などである。ON は借入語が民衆の実生活に密着した基本語が多いことを述べたところでは、言語の混濁について的一般論を行なっている。

Ch. V. The French. まずフランス語借入の文化面について借入語を諸分野に分類しながら述べて行く。ついで借入語数の時代的消長に触れる。仏英類義語併用表現に触れ、さらに類義語のニュアンスの差について述べているのが興味深い。いわく、‘The former [=native word] is always nearer the nation's heart than the latter [=French word], it has the strongest associations with everything primitive, fundamental, popular, while the French word is often more polite, refined and has a less strong hold on the emotional

side of life (§100). 例として *bill : beak ; help : aid ; cordial : hearty ; deep profound* などを挙げる。なお *begin* と *commence* のように口語と文語の差になるところにも触れる。借入の語形について述べたところでは再びアクセントの移動を考察し、ここでは value-stressing に contrast rhythm の要素を付け加える (§105)。フランス語要素を用いての hybrid や派生語の形成に触れ、英語の語形成力がフランス語をしのぐことを示す。終りに同一原語が時代をおいてくり返して借入された doublet 二重語や三重語に触れている。

Ch. VI. Latin and Greek. ギリシア語借入はたいていラテン語を通して行なわれるという理由で区別しないで扱われている。文芸復興期におびただしいラテン語借入が行なわれたことを述べ、ヨーロッパの他の言語に比べて英語に特に多い理由について考察を行ない、すでに多量のフランス語借入が行なわれていることによって道がつけられていたことを指摘する。興味ある項目を拾つてみると、ラテン語統語法の影響（絶対分詞構文、関係詞）英語の欠を補うラテン語系形容詞 (*mouth : oral ; eye : ocular, etc.*)、類義的形容詞の問題 (*female, feminine, womanly, womanish*) などがある。又形の長いラテン語形容詞が文章の調子を高めるのは何故かを考察する (§ 137)。ついでラテン語借入の欠点を挙げる：(1) *páthos, pathétic* のようにアクセントと母音がずれ、単語の統一性がそこなわれる。(2) *illusion* と *elusion* (共に [il(j)ú:ʒən]) のように発音上まぎらわしい語がある。(3) *improvable* 「prove できない」「*improve* できる」のように意味上まぎらわしい語がある。(4) *gaseous* のように発音が不定である。(5) 難解で一般大衆から遊離している。ここで *malapropism* と *Johnsonese* に触れる。結語としてラテン語借入は ‘something between a hindrance and a help’ と言ふ。

Ch. VII. Various Sources. 英語語彙の周辺的位置を占めるに過ぎないものを扱う。南アフリカにおいてオランダ語と英語が示した土語の借入の仕方の相違に触れ、土語を丸呑みにする英語の ‘linguistic omnivorousness’ についてその原因を考察する (§§ 158 ff.)。

Ch. VIII. Native Resources. 英語が本来語を用いて語形成を行なっていく姿を、接辞・同形の名詞相互間の品詞転換・複合語・逆成 (back-formation)・切株語 (stump-word) などの点から概観する。

Ch. IX. Grammar. 英語は形態・文法の面では規則性・簡潔性の方向に向かって変化して来たことを述べ、その原因は個々の場合に則して考えなければならないとして、幾つかの項目を重点的にとり上げて具体的に示し

ている。(I) 名詞の S 語尾, (II) Gender, (III) 数詞, (IV) 代名詞, (V) Ing 語尾の発達, (VI) 動詞の S 語尾, (VII) 時制の発達, (VIII) 不定詞。この章まで読んで来ても、形態・統語法の全体的な変化の姿をうかがうことはできず、この方面に関しては Sweet, *New English Grammar*, Part I, 中島文雄博士『英語発達史』(岩波全書), Kellner のものなどを見る必要がある。

Ch. X. Shakespeare and the Language of Poetry, Sh. の英語の特質を説き、言葉による人物の描き分けの巧みさを指摘する。Sh. に関する詩語の変遷を述べ、詩語発生の機構について考察をめぐらす。Sh. 由来の語句が現代英語に及ぼした影響を述べながら、詩語はむしろ Spencer の貢献が大きく、シントックスの面では聖書の影響の方が強いといふ。

Ch. XI. Conclusion. 論じ残された問題をとり上げ、聖書の文体の影響、誓言、言語的タブー、英語人口の増加に触れる。
(ELCE研究員・島根大学助教授)

A. C. Baugh, *A History of the English Language*

木原研三

本書の出版は1935年、筆者が偶然に書店の棚でこの本を見つけたのはそれから、2, 3年後、まだ大学に籍を置いていたころであった。われわれの間では当時この本はほとんど知られておらず、市河博士「英語学、研究と文献」に載ってはいたが僅か4行で片づけられているので大した本ではないと思っていた。しかし市河先生の英語史の講義の参考に読み始めると、そのよどみない明晰な文体に助けられて一気に読み入ってしまった。以後、教壇に立って英語史を講ずる際に最も手近に置く英語史はこの本である。こういう本の性質上、オリジナルな研究というわけには行かないが、出版後30年以上たってもなおこれを supersede するものがないとすれば、やはり一種の名著と言ってよかろう。

著者 Baugh は1891年の生まれ、長く Pennsylvania 大学の教授であった。特にすぐれた英語学上の業績というのを聞かないが、本書と言い、大部の英文学史を編集し、自らもその中世英語期を執筆していることなどから考えると、多くの文献に目を通し、これを総合・集成するタイプの学者と思われる。

本書は著者のことばを借りれば、「もともと college students を対象として書かれたものであり、英語の内的歴史 (sound と inflection) と外的歴史 (社会的・政治的・思想的な諸勢力が英語に及ぼした影響) とのバランスを考えながら英語の発達を叙述する」のを目的とする。本書の初版が出たころには、すでに Jespersen, *Growth and Structure*, Wyld, *Short History of English*, McKnight, *Modern English in the Making* などのほか Emerson や Lounsbury の英語史がありいずれもそれぞれに特色のある書であるが、英語の内的・外的の歴史をみごとに関連・調和させ、充実した英語史を提供している点で本書にまさるものはない。しかも行文まったく平明でありながら学問的水準を高く保ち、特に各章につけられた詳細な Bibliography は本書からさらに深い研究に進もうとする学徒に絶好の手引きをなしている。McKnight の著書が本書に最も近いが、読みやすさ、内的歴史に関する叙述のくわしさ、参考文献などでやはり本書のほうを推奨したい。以下章を退って簡単に内容を紹介したい。

第1章「英語の現在と未来」について第2章「インドヨーロッパ語族」では型通りこの語族に属する語派を列挙・解説しているが、この語族発生の地の研究として H. H. Bender, *The Home of the Indo-Europeans* (1922) を紹介しているのは興味深い（しかしこの問題に関するそれ以後の研究成果について本書の再版(1959)では Bibliography 以外で何も触れていないのはさびしい）。

第3章は Old English, 第4章は O. E. における外国語の影響を論じる。アングロ・サクソン族の移住からその方言分布、また発音・文法の簡単な説明のほかラテン語、古スカンディナビア語からの借入語を詳しく論じている。これらはすでに Jespersen, *Growth and Structure* その他で扱われている事項であるが、より一層詳細に論じられている。

第5～7章はそれぞれ「ノルマン征服と英語の衰微」「英語の再健」「中世英語」と題されている。中世英語期の文学と言語とは著者が専門的に研究している領域であるだけに、これらの章は本書の中で最も生花に富む部分であろう。特に、この時期における英国人と征服者であるノルマン人との関係、また英語とフランス語との競合などについて興味ある観察が見られる。一たび民衆だけのことばに落とされた英語が時をへて徐々にその失地を回復していく過程を、多くの原典からの引用によってあとづけているあたり、まさにこの著者ならではと思われるに十分である。この点については本書以後に出た英語史概説書の多くは本書に負う所多大である。第7章で

は借用語の詳説のほか M. E. 文法についても一通りの概念が得られるよう略述している。

第8章「文芸復興、1500—1650」の主たるテーマは新しい学問が英語の語彙に及ぼした影響である。“hard word”あるいは“inkhorn terms”をめぐって、古典語からの借用の自由化を主張する人々と、これを制限すべしと主張する人々との間のはげしい論争からやがて中間的な妥協へ落ち着く経路が、ここでも豊富な原典の引用をもとに興味深く語られている。As is often the case, the safest course was a middle one. と著者は言う。これら外的歴史の事のみならず、この少し前から英語の音声を襲った Great Vowel Shift を中心とする音声変化、今日では破格構文と見なされるけれども当時は許されていた種々の文法現象、なども一わたり概観されている。英米文学を専攻する人々もこの程度の知識はぜひ持っていてもらいたいと思う。かつまたそういう人たちも飽かせないだけの筆力を著者は持っている。

第9章 “Appeal to Authority, 1650—1800” は文芸復興期の奔放な英語が沈静して形式を整えて行く過程を主として言語意識の面からとらえている。これは英語文そのものというよりもむしろ英文法研究史であると言えなくもないが、同種の書ではあまり詳しく扱われていないのでそれだけ貴重な知識を提供してくれる。たとえば先に Dryden, 後に Swift を中心とした英語の基準確立のための Academy 設立運動の詳細や、初期英文法家たちの英文法組織化の努力など好個の読物をなしている。Academy 設立運動は英国人の国民性のためもあってか遂に実を結ばず、代わりに Johnson の辞書が権威として仰がれるに至った一方、英文法家たちは道理 (reason), 語源、古典語文法を挿り所として英文法の整理を始めた。その結果 The book is printing. のような進行形は、より論理的な is being printed に改めるべきだとされ、The ships are took. / A book is wrote. のような過去分詞も漸次衰えて行った。これらの文法家もその点 Academy の欠をある程度補ったとも言えよう。他方すでに Priestley や Campbell などは usage の重要さを説き、“It must be allowed, that the custom of speaking is the original and just standard of any language.” (Priestley, *Rudiments of English Grammar*) のような主張も見られるのであるが規範的文法の陰に隠れて影響力は少なかった。

第10章「19世紀およびその後」では19世紀以後急速に発達した科学・工業、英帝国の拡大、世界を揺がした2つの大戦などが英語に与えた impact がおもな主題である。そのほか英語に対する意識の発展の結果として、Oxford English Dictionary 編集の経緯 Society for

Pure English の創設も詳しく説明されている。新語、新語義の流行にはジャーナリズムが大きな役割を果たすのは現代の特色として見のがすことができない。新聞・雑誌から始まって一般化した表現としては hop the atlantic (横断する), oust a politician (追い出す), a business deal (取引) など枚挙にいとまがないが、本書の再版では初版以後の新しい例をほとんど示していないのは物足りない。わずかに第2次大戦を機としてできた語句として air raid, blackout, evacuate その他が挙げられている。このほかのトピックとして現代英語における方言、スラング、cultural levels と functional varieties 植民地の英語などが取り上げられている。この最後の問題については、オーストラリア、南アフリカ、カナダの英語について特に語彙に関してかなり詳しい記述をしている。

最後の第11章はアメリカ英語である。当然のこととして1607年の Jamestown 植民から説き起こしているが、以後大西洋沿岸全体への定住、その西部辺境への移動を詳述している。これがアメリカの方言分布に大きな関係があるからである。米国への移民は第1期1607年から植民地時代の終り (1790年ころ) まで、第2期東部13州の植民者が西部・南部へ進出し、かつアイルランドおよびドイツから大量の移民を受け入れた時期 (南北戦争ころまで)、第3期それ以後現代までで、南欧のラテン系民族およびスラブ系の移民が多くなった時期、に分けられるが、アメリカ英語の歴史から見て最も重要なのは第1期における東部沿岸の移民状況であり、これに重点を置いて述べられている。

現在のアメリカの方言分布については、本書の初版では多くの本がそうしていたように、Eastern, Southern, General American の3分法によっていたが、その後出版された *The Linguistic Atlas of New England* や、その基礎となった調査研究を利用して、再版では全面的に書きかえられている。大体においてこの再版は初版の数字や誤植の訂正などの minor change しかしていないが、この節だけは例外である。新しい分け方によれば 1. Eastern New England, 2. New York City, 3. Middle Atlantic, 4. Western Pennsylvania, 5. Southern Mountain, 6. Southern, 7. General American の7方言になる。これらの方言につき発音や語彙の特徴を略述したのち、この相違は究極的にはその定住者の英國における出身地の相違であるとしている。アメリカで最も大きな勢力を持つ General American に Irish English とスコットランド方言の要素が多いのは、西部辺境への進出に最も積極的であったのが大西洋岸の Philadelphia を中心とする地域 (上掲の方言区で言えば

Middle Atlantic) の住民であり、彼らが多くスコットランド系移民であったという事実によるのである。

この章のもう 1 つの大きなトピックはアメリカ人の英語に対する意識、それに及ぼした Noah Webster の影響である。アメリカの政治的独立とともに、言語においてもイギリス依存から脱却しようとする考え方方が生まれて来るのも当然のことである。このような patriotism をいち早く鮮明に打ち出したのが Noah Webster であり、彼は *A Grammatical Institute of the English Language* (1783) や *Dissertations on the English Language* (1789) などでくり返しこれを強調している。このような考え方方は今世紀の Mencken あたりまで受け継がれて來るのであるが、Baugh 自身は結論としては “Good American English is simply good English, English that differs a little in pronunciation, vocabulary, and occasionally in idiom from good English as spoken in London or South Africa, but differs no more than our physical surroundings, our political and social institutions, and the other circumstances reflected in language differ from those of other English-speaking areas.” と言いつき、こまかい相違点を強調するよりも、いつかは両国の英語を統合した a common ‘standard English’ のできる日を期待している Henry Bradley の意見に賛成している。

卷末に Middle English 諸方言の specimens およびその現代語訳と注釈があるのも便利である。

(お茶の水大学教授)

Readings in Applied English Linguistics (edited by Harold B. Allen). Appleton-Century-Crofts (New York), 1964. 2nd edition. xii-535pp.

田 中 春 美

言語学という広いがっしりした土台の上に英語教育をのせ、英語教師のいっそうの啓蒙をねらった論文集である。理論と実際は別物とはいうものの、最近のめざましい言語学の成果は外国语教育の基礎的研究に、大きな影響を与えてきている。もともと英語教育は記述文法も含めて英語学の裏づけが必要であり、その英語学というものが、言語学の方法論を特定の具体的言語としての英語に適用したものなのだから、これは当然のことと言えるかもしれない。最近よく耳にする、英語学と言語学がお

たがいに近よりつつある、というような言葉は、よく考えればおかしいので、両者ははじめから同一物のはずである。この意味で、我々英語教師たるもの、言語学の動向に無関心でいるわけにはいかない。

この論文集は、すくなくも形式的には再版である。すなわち、8 年前の 1958 年に、同じ編者で同じ題名の初版が出ているのである。ところが、内容を比べてみると、両者はほとんど別の本と言ってもよいくらいにちがう。初版に収載された 65 編の論文のうち、3 分の 1 をわずかに越える 24 編だけがそのまま残され、あらたに 38 編の論文が加えられている。このことは、米国言語学界の変動が近年いかにはげしいものであるか、ということを如実に示している。もっとも象徴的なのは、この 10 年間世界の言語学界をゆきぶり続けている变形文法関係の論文が、この追加分のうちに 9 編も含まれている、ということであろう。

この 62 編の論文は、話題にしたがって 7 部に分類されている。各題目を挙げると、(1)歴史的背景、(2)今日の英語言語学、(3)言語地理学、(4)言語学と慣用、(5)言語学と文法作文の教授、(6)言語学と辞典、(7)言語学と文学研究、以上である。各部に包まれている論文の数は、(1) 5 編、(2) 14 編、(3) 8 編、(4) 11 編、(5) 12 編、(6) 6 編、(7) 6 編、と不均等であり、またそれぞの論文の長さも、長いものは 20 頁 (Chomsky)、短いものは 1 頁半 (Trevor Hill と Hackett) と、ばらばらである。各部のはじめに 1 ~ 3 頁ほどの解説があって、全体的な展望を知るのに便利になっている。では以下に、各部の代表的な論文をいくつか取りあげて、その概略を記してみることにしよう。

まず第 1 部では、Dykema が文法の伝統をギリシア・ラテンとの関係においてとらえ、Hartung がその伝統を Aristotle から Port Royal 文法、Sweet, Jespersen を経て Fries, Sledd に至るまで手ぎわよく概観し、次の McMillan が 19 世紀の歴史・比較言語学の特徴をまとめあげている。この 3 編を通読すると、欧米における言語学の発達が手にとるように分り、たいへん好都合である。次に、Fries 自身が、英語を中心に近代言語学の原理とその成果を概観し、最後に Levin が伝統文法とのちがいを強調する。これらを通して我々は、自分自身の研究態度や方針を決める道しるべを与えられる。

第 2 部はこの本の核心とも言うべきもので、論文の数もこの論集の中でもっとも多い。大別して、最初の 8 編がいわゆる構造言語学 (structural linguistics) に関するもの、残りの 6 編が変形または生成文法 (transformational and / or generative grammar) に関するものである。冒頭の Whorf の論文は直接英語の問題を扱っていないが、言語とそれ以外の文化とを関連づけ、各言

語構造の多様性を強調し、以後の英語言語学にも大きな影響を与えたということから、ここに収録されている。Francis の論文は、従来 grammar という語で示されてきた 3 つの異なる概念を分離し、伝統文法に対する構造主義文法の優越性を説いた論文であるが、後者をコベルニクス地動説になぞらえた著者が、今日の変形文法の出現に対してどういう論評を加えるか、近く来日される折に訊ねてみたいと思っている。次に続く Faust の 2 つの論文は、限られた紙面で要領よく音素論 (phonemics) と形態素論 (morphemics) を解説し、同時にいくつかの術語の不備を指摘したもの。次の Fries は、形を重視する構造主義的立場から意味をどのように扱ったらよいか、という問題に触れ、有名な意味の分類 (lexical, structural, social-cultural meanings) を行なっている。以上 5 編を通読すると、完全な形とは言えないが、米国構造主義の典型的な考え方たと方法論をある程度つかめるので、ひょいと好都合と思われる。以下 3 編は、英語構造の部分的問題に立ち入る。すなわち Stageberg は、主として書き言葉における structural ambiguity の実例を扱い、暗に言語分析から意味ができるだけ排除しようとする方法の欠陥を突いている。次の Marchand は複合名詞やそれに類似する名詞結合を、Taha は複合動詞 (pull down など) を、音声面特に stress との関連において観察した論文である。これらは、読者の英語教師に自分自身の研究テーマを考えさせるための指針という意味からも、収録されたものらしい。

第 2 部の後半に入つて、Lees の 2 つの論文は、Fries らの構造主義分析が解明し得ない分野を指摘し、変形文法の優越性を解説したもの、Norman のは変形文法の立場から英語の名詞類 (nominals) を再分類しようとした試みである。次の Hill の論文は、変形文法の中核的概念である文法性 (grammaticality) を取りあげ、その曖昧な点を批判しようとした有名な論文であるが、Chomsky が負けずにただちに反論したのが、その次に収録された "Some Methodological Remarks on Generative Grammar" という長論文である。変形文法を支持するしないにかかわらず、この 2 編は一読に値する。人間の言葉が内包する複雑な様相について、いろいろと考えさせられるところが多い。最後の Stockwell の論文は、いわゆる生成音韻論 (generative phonology) がいかなるものか、また変形という操作をいかに音相面に導入するか、などについて教示してくれる。

第 3 部は、言語地理学 (linguistic geography) についての論文が集められている。最初の 3 編 (Kurath, Marckwardt, Allen) は、言語地理学と英語教育との関係を強調し、続く 3 編 (Marckwardt, Allen, Atwood)

は、豊富な実例や言語地図を通して、具体的なアメリカ英語の方言分布を知らせててくれる。McDavid の論文は方言と社会層の相関関係、最後の Kurath の論文は音声の歴史に占める方言研究の重要性を述べたものである。

第 4 部には、言語学と慣用または語法 (usage) の関係を取りあげた論文が集められている。重要なものだけを挙げると、文法と慣用のちがいを論じて、慣用をむしろ修辞的なものと見なそうとする McMillan の論文、(style) 文体と慣用の関係を論じた Hill の論文、そして英語の中に、文化的 レベルにもとづく 2 つの変種 (standard と substandard) と、機能のちがいにもとづく 2 つの変種 (formal と informal) とが共存し、両者はおたがいにからみあっていろいろな形の言葉や慣用を生ずる、ということを明らかにした Kenyon の論文などがある。このほかにもまだ興味深い実際的論文がいくつかあるが、むしろいっそう注目に値するのは、この論集の編者 Allen 自身が書いた第 4 部の解説の一部 (pp 272-274) である。彼はそこで、文法と慣用に対する 3 つの立場と、言語を支配する 5 つの次元を、たくみな比喩を使って解説している。前者は、言語体系の記述つまり文法に専念するのが言語学者の立場、言語形態と非言語的環境の相関関係つまり慣用を扱うのが方言研究者や辞典編さん者の立場、そしてその両者の相関関係を学習者にマスターさせる任務をなすのが語学教師の立場、ということである。そして後者は、(1) 話し言葉から書き言葉へ及ぶ次元、(2) formal から informal に及ぶ次元、(3) standard から substandard に及ぶ次元、(4) 空間の次元、(5) 時間の次元、以上を指す。細かい点についてはまま異論もあるだろうが、今まで混然としていたものをはっきりした形に整理した功績は大きい。

第 5 部ではすでに述べた第 2 部と負けずおとらずの核心的主題——言語学と文法・作文教授の関係——を扱う論文が集められている。冒頭の 2 つの小論文のうち、Hackett のは言語とその社会の文化との相互依存関係を仮説の形でまとめあげ、数年前若くして世を去った Mrs. Norris のは言語学の仮説や発見が教場でいかに適用され得るかを示したものである。以下 McQuown と Ives は幼児から大学に至るまでの語学教育に適用される言語理論の諸様相について、Smith は教師側に必要な言語学上の知識について、また Hunt と Burnet は作文における文または文節の矯正に、Hill は文体の矯正に、構造主義理論が役立つことを述べている。次に Roberts は、教室における言語理論そのものの利用価値を強調しているが、この考えは以後の後の作品 (English Sentences など) にも反映し、変形理論の教室への適用をねらったことは、すでに周知のとおりである。次の Thomas の



Language Teaching Analysis.

by William Francis Mackey,
Longmans, 1964 (xi + 554)

吉田一衛

著者のマッケイ教授はカナダの Laval 大学で言語教育を担当し、かつては London 大学で外国语教授法を講師として担当したことのある人であり、過去25年間、ヨーロッパ、オーストラリア、アメリカの外国语教員養成課程の仕事に従事し、現在カナダ政府の言語教育関係の顧問をかねている。

この著書は Longmans から出版された言語教育関係の著書の中のひとつであるが、他の4冊に比べ、その領域と参考文献の豊富さと広さにおいて他よりも抜きんでている。おそらく、これほどまでに広範囲に言語教育全体をまとめたものはないであろう。それだけに言語教育のハンドブックとしての面目躍如たるものがある。

この著書の目的は序文でも言っているように、言語教

育の複雑な問題を解決するのではなく、分析をしたものである。このことを頭に入れて読んでいかないと著者の意図を誤解するおそれがある。この著書の底に貫して流れている態度は言語教授の分析の理論とその技術への接近である。これは言語教育において何世紀かにわたってなされた論争の境界線を明確にしようとする試みの中にみられる。これらの論争がまだ未だに解決されずにいるのは言語教育の意見が時代によっていつも左右に揺れ動くのは言語教育を事実の問題として扱っていないからだと主張している。

内容は3つの部からなりそれをさらに16の章に分けている。それを次に示す。

Part I Language Analysis

1. Language Theory
2. Language Description
3. Language Difference
4. Language Learning

Part II Method Analysis

5. The Meaning of Method
6. Selection
7. Gradation
8. Presentation
9. Repetition

一前頁より続く一

論文は、とつつきの悪い変形理論の要点を単純化した形で提示し、語学教育への適用を示唆したもので、この新理論への入門としても適切である。最後に、Sledd と Myers が、あまり安易に新理論を教場へ持ちこむ危険性に対して、警告を発している。

第6部は言語学と辞典との関係を扱ったものだが、学生にとっての辞書の必要性を掘りさげた Mathews の論文と、語学教育における辞書の利用を論じた Hill の論文とが重要なことで、あとは Webster's Third に関する2つの論文 (Barnhart と Marckwardt) がやや専門的な意味で興味深い。

最後の第7部では、言語学と文学研究の相互関係が扱われているが、冒頭のセミナー報告を除いては、Chatman と Hill の論文がそれぞれ独自の方向を示していく

面白い。

要するに、この膨大な論文集は、細かい文法的な知識だけにこり固まりがちな我々英語教師に、言語学のさまざまな分野にわたる最新の情報を提供し、より広い視野とより深い洞察力を与えてくれるありがたい本である。かならずしも編集の順序にこだわる必要はないから、折にふれて各方面の論文をひろい読みしてみるとよい。いつの間にか幅広い基礎を身につけ、将来からず役に立つ時が来るであろう。なおこれと平行して、英語教育のより実際的な技術に関する論文を集めた同じ編者による *Teaching English as a Second Language* (McGraw-Hill, 1965) や、基礎的書誌録としてやはり Allen の編集した *Linguistics and English Linguistics* (Appleton-Century-Crofts, 1966) も利用されるよかろう。

(立教大学助教授)

10. The Measurement of Method
Part III Teaching Analysis
11. The Suitability of Method
12. Lesson Analysis I : The Language
13. Lesson Analysis II : The Plan
14. Lesson Analysis III : The Techniques
15. Automated Language Teaching
16. The Measurement of Language Learning
Appendix A. Language Drills
Appendix B. Language Games
Appendix C. Mechanolinguistic Method Analysis
Topical Bibliography

著者は言語教育は言語、方法、教授を区別しなければならないという考え方から以上3つの部に分けたものである。しかしこれら3つはお互に関係しあっている。

第1部では、言語についていろいろ解釈の違い、母国語と外国語の比較、言語の学習について述べられている。昔の言語理論がなぜ存在しているかということであるのにくらべて、現代の言語理論はどのように働くかということに関心がむけられているが、後者に焦点をあわせて説明している。

第1部の言語分析でもっともよくまとめられているのは第1、2章である。第1章の「言語の本質」については、言語とはどういうものか、それを20世紀初頭から現在までの言語学者の理論を比較し明らかにしている。さらに言語を context, substance, form, expression の4つの観点からみて、Firth をはじめとして Bloomfield など9人の代表的な言語学者の理論の位置づけをしているが、これは彼らの理論を言語教育に適用しようとする場合非常に便利である。しかし、ここに書かれていることは個々の言語学者の言語理論を把握していなければ本当に理解されないだろう。このことは他の章のいくつかについてもいえることである。

第2章の「言語記述」では言語教授は必然的に言語分析に影響を受けるという前提に立って、

- (1) ひとつの言語記述が他の言語記述とどのように異なるか。
 - (2) それぞれの言語記述が何を包含しているか。
- を明らかにしようとしている。これを (i) level (ii) unit (iii) direction (iv) material の4つの観点からまとめている。なかでも (i) の level の数を比較し表にあらわしたものは、日頃われわれが文献を読む場合に各々の学者の術語の違いにわずらわされずにすむだけに有用である。level が学者によってどれだけまちまちであるかは、Brondal が14に分けているのに対し、Harris はただの2つに分けていることからも明らかである。こ

のことから morphology という術語でも Pike と Harris では違っており、Pike の morphology と grammar を合わせたものが Harris の morphology に相当する。

第3章では言語記述の分析方向を下から上へ、上から下へ、level 間の関係においてみる3つにまとめている。

音声記述で音声記号を Jones から Sled まで13人の学者のものを比較しているが、日本ではすでに太田朗氏の労作「米語音素論」(1959)がある。文法範疇についても同じような比較をしているが、Plato が文を Noun と Verb の2つに分けているのは、文を NP+VP と2つに分けた Chomsky の考え方方に似ており興味深い。

しかし、この著書の目的のひとつが言語教育の研究がどの辺まで進んでいるかを明らかにすることにあるのだが、すでにいくらかの遅れが目につかないこともない。たとえば、第3章で2か国語比較を Phonetics, Grammar, Lexicology, Stylistics, Usage についてまとめているが、引用文献がほとんどフランスのものであるため、この面でもかなりの成果をあげているアメリカの文献が参照されていない。この著書の出版年度までにはかなり研究が進んできているはずである。最近ではこの分野での新しい傾向として服部四郎氏の意義素をもとにした比較、アメリカの Bendix ("Comparative Analysis of General Vocabulary: The Semantic Structure of a Set of Verbs in English, Hindi and Japanese," *IJAL* Vol. 32, No. 2) などの研究がある。わずか12頁にこの分野がまとめられているが、かならずしももっとも進んでいく境界を示してくれてはいない。しかし、第1部から第3部までを通してもっともうまくまとめられ引用も豊富であり不安なく楽しく読むことができるのはやはりこの第1部である。

第2部は教授方法の分析であるが、ここではむしろ教授方法のもとになる教材の分析に紙数の大部分を費している。

第5章では教授方法を教師が教えるものと教科書が教えるものを区別する必要を説き、さらに教授法の歴史を概観している。

第6章の Selection は、言語を全部教えることができないので、その一部を選択する必要性について考察し、それをなぜ、どのように選択するかについてまとめている。この章の多くの部分を語り選択が占めている。何を選ぶかでは、Dialect, Register, Style, Medium の4つのうちどれを対象にするかにより語の頻度数は異なり、すなわちひとつの目的のために語を数えると他の目的に合わないことは Thorndike の頻度に従って語を選ぶと、教室で使われる chalk, blackboard, shelf などは 4,000 語を教えた後にくることからも明らかなことである。語

い選択の研究はすでにかなり進んでいるが、日本の英語学習のための語い選択は中学校では教科書を対象とした稻村、鳥居氏（1956）と高校の教科書を対象とした速川浩氏（1966）のものがある程度であまり進んでいない。

Selection の 5 原則として Frequency (頻度), Range (ひとつの項目がいくつのテキストに現われるか), Availability (ある situation に適切で必要か), Coverage (ひとつの項目でどれだけのこと�이えるか), Learnability (学習のしやすさ) の 5 つを掲げている。こうした特質の説明は英語の語い指導にすぐにでも役立ち、指導要領の語いについての Minimal Essentials を理解するのによい助けとなる。

「学習のしやすさ」の中で regular pattern が irregular pattern より学習しやすいという前提に立って、ある教授法では regular verb のみをとり入れているといっているが situation を利用して学習する場合には必ずしもそうはいえない。irregular verb を使ったほうが学習しやすいことがあるからである。したがってどのような面で regular pattern が irregular pattern より学習しやすいかをもっと規定しなくては必ずしもそうはいえない。

ここで A～H までの方法を仮定し、その A～H の中から 2 つまたは 2 つ以上の方法を比較してそれぞれの分析方法の特質を明らかにしようとしている。こうした説明の方法をこのあと最後までしている。この場合多くは結論を読者にまかせるという形をとっている。

第 7 章の Gradation では何を教えるかの次のそれをどのような順序で教えるか、それには何と何を組み合わせ、何を何の前にもってくるかを問題にしている。

第 8 章の Presentation では学習内容を学習者に伝達することについて述べている。この中の絵の利用について、その使用過程で type と media の 2 つの異なった用法があり、さらに type には (i) テーマやテキストを説明する (ii) 学習者に語や文を思い出させる (iii) ひとつの機能が特定の意味を把握させる、の 3 つに分類しているが、こうしたことを知って教室内で絵を利用している教師は案外少ないのではないだろうか。

この著書の短所のひとつとして重複が目立つことである。これはひとつの項目を他の観点からみるための重複であるが、これは読者を混乱させるくらいがある。たとえば 251 頁の substitution table と 272—276 頁、338—341 頁のそれである。

第 9 章の Repetition では最少の誤りで最大の繰り返しを得るということから出発し、言語は相互に関係しあっている習慣であり、習慣は 1 度や 2 度ではなくて何度も繰り返すうちにつくられるものである。特定の行動を

特定の手順で何度も繰り返すと同じ手順でその行動を繰り返すようになる。こうした見解に立って Repetition を Listening, Speaking, Reading, Writing の 4 技能に分けて述べている。

この著者の独自性を打ち出したのが第 10 章である。この The Measurement of Method では言語教授法の分析を評価し比較をするために、第 6 ～ 9 章までの Selection, Gradation, Presentation, Repetition を量化しようとしている。これら 4 つの項目を 44 の要素に下位区分し、その割合を 10 進法により同心円を描いて 44 の要素がひと目でわかるようにプロフィルしている。A と B の 2 つのプロフィルが提示され、その 2 つを比較することによりそれぞれの要素の違いがひと目でわかるようになっている。著者はある教授方法は、ある situation には適するが他の situation には適さないということを示そうとしている。しかしこれからだけではひとつの要素と他の要素との関係については必ずしも表わされているとはいえない。先ず理想的なプロフィルを作成しそれと比較してみないことにはどの教授法がすぐれているかどうかはここに掲げたプロフィルからは決定しにくい。

第 3 部では言語教授を教授内容の分析、レッスンの計画、指導技術、機械による指導などについて述べている。第 12 章～第 14 章では Lesson Analysis を次の 3 つに分けて分析している。(1) Language (どのような言語材料をどのように教えるか) (2) Plan (教授案) (3) Technique (学習を効果的にするための環境および学習内容の伝達)、説明方法として 2 つの分析方法に分けているが、このような分け方しかないのかという問題がある。当然、他にいくつかの分け方が考えられる。しかもここで述べていることは前に述べてあるもののまとめの形になり、参考文献引用の明示がなされていない。第一部から第三部に移るにしたがい参考文献の引用が明示されていない。そのためどこからその理論が出てきているのか、または著者の推論なのかはっきりしていない。たとえば第一部の第 2 章では 101 の引用が明示されているのに、第三部の第 12 ～ 14 章の Lesson Analysis では引用は全く明示されていない。裏をかえせばこの方面的研究が学問的にもなされていないことを物語るものであろうが、少しはぐらかされた感がしないでもない。しかし将来の研究領域の指標の役は果たしている。

第 15 章では視聴覚器具にふれ、ここでは外国語学習における視聴覚器具の適用範囲とその限界を要領よくまとめてくれている。第 16 章は言語テストで、テストを目的・意図・適合性の 3 つの観点から説明している。しかし、テストを概観しているにすぎず、もう少し統計的処理方法などがほしい。これから言語教育の非常に大切な領

域のひとつが量との対決である以上この面がもっと開拓されなくてはならない。

Appendix A では Drill, Appendix B では Game, Appendix C では計算機や翻訳機などの言語教育への適用について述べられている。

最後にこの著書のもっともすばらしいもののひとつである参考文献にふれなくてはならない。論文は年代の新しい論文を先に掲げ雑誌は75種類を参考にしており、参照した文献の数は1,900にも及んでいる。その領域の広さは著者が扱っている次の国別の表からも明らかである。この表から外国語教育なり言語教育に力を入れている国の順位を示しているようでおもしろい。しかしソ連は別である。

国名	数	国名	数
U.S.A.	28	Switzerland	2
U.K.	10	Yugoslavia	2
Germany	8	Philipines	2
France	7	Belgium	2
Canada	4	Denmark	2
Netherland	3	Austria	1
U.S.S.R.	3	Czechoslovakia	1
Sweden	3	India	1
Australia	2	Total	84

次表は引用の多い雑誌名で日頃よく目にとめるものを調べたもので著者の言語教育に対する領域とこの著書の特質を示している。

雑誌名	数	国名
E.L.T.	137	U.K.
L.&S.	1	U.K.
M.L.J.	42	U.S.A.
Word	30	"
Lg	24	"
L.L.	8	"
I.J.A.L.	8	"
P.M.L.A.	5	"
L.R.	0	"
J. of Abnormal Psy.	4	"
J. of Social Psy.	1	"
College English.	1	"
L.M.	29	France
Lingua	16	Netherland
I.R.A.L.	3	Germany
Total	309	

ここに E.L.T. が圧倒的に多いことから著書の色合いがわかる。イギリスの傾向が強い。アメリカの論文もかなり

参照されているが LL, IJAL が比較的少ないので意外と思われる。参考文献にはフランスのものもかなり採り入れている。これら参考文献の厖大さから著者の言語教育における研究の巾の広さがうかがえる。ここに掲げられた参考文献はこれから言語教育にたずさわる者、また現在たずさわっている者にとって大変貴重なものであり、この参考文献だけでもこの著書の価値は充分あるといえる。

この著書を読み終わって言語教育の実際的研究というものがいかに少ししか利用されていないかがわかる。この著書が与え得るものは著者がその結論でいっているように、あくまでも枠組であって、その枠組の要素がどのように関係しあっているかまではふれられていない。そのことが読者に物足りなさを感じさせるところもある。それから先の研究には、さらに多くの時間が注がれなくてはならない。

著者はそうした研究のため、言語教授、言語学、音声学、言語学習心理学のそれぞれの専門家が協同して研究していくセンターの設置を説いている。これはわれわれの考えているこれからの言語教育のあり方と一致する。従来わが国の英語教育が英語、英文学の比重が大きかったことを考え合わせて、外国語教育を言語教育科学とするためにも開拓されなくてはならないことである。この著書はそうした動きの出発点ともいいくべきもので、その点では入門書にすぎないともいえよう。しかしこれだけ広範囲のものを一冊にまとめたものがこれまでなかっただけにハンドブックとしての意義は非常に高い。ただこの著書を土台として発展していくには、この中にもられた言語学、心理学、教育学、統計学などのさらに進んだ成果を外国語教育のどの分野に実際に役立てていくかが実証的に研究されなくてはならない。むずかしいのはむしろその点にある。心理学などの学問を適用することの必要性を現今説く人は多いが、それを実際に言語教育に実証的に適用研究した人があまりにも少ないからである。そうした態度なり研究方法を指し示してくれているのがこの著書であるといえる。

(広島大学大学院英語科教育専攻博士課程)

※

※

※

英語教育相談室

ELEC では、英語教育上の諸問題に関する質疑や相談に対して専門家による回答を提供する「英語教育相談室」を開設しております。その中から一般性のある問題を取り上げて誌上でも扱うことになりました。今回は LLについて、その考え方や教材の問題を取りあげてみました。

解答者 橋本貞雄

問 最近、P.T.A.が中心になって、LLが設置されました。どのように扱ったらよいでしょうか。特に、教材面で困っています。

(東京都K中学校 LL担当)

答 K中学校の持つ問題点は、ELEC・LLにお見えになる方に共通したものと言えます。その第一は、LL設置の決定が、将来のLL担当者による調査・検討をまたずに、学校の管理者あるいはP.T.A.等の外部機関の厚意(時には、担当予定者にとっては悩みの種になるのですが)によってなされてしまうということです。第二は、仮にLL担当予定者が計画・決定に参画しても、機械面の優れたものを追って、それに優先すべき教材の検討がじゅう分なされないということです。そこで、今回の英語教育相談室では、これらの点を中心に、中・高等学校、特に中学校のLL教材を検討しながら問い合わせたいと思います。

問題点の検討に入る前にLLとは何かという概念規定を行なう必要があります。ここでは形の上から、中学校、高等学校で一般に設置されているAP、AA、AAC¹⁾の基本型とこれららの混合型とします²⁾。変形的な

ものとしては、handy labと称するportabilityを重視したものあるいは、普通教室との併用に重点を置いたもの等ありますが、厳密な形態論は、ここでは避けることにします。

次に本質論ですが、「LLを…1つの新しい視聴覚的方法とする考え方」が普通である。³⁾とする天野一夫教授のお考えに立ち、以上2つを概念規定の基準として次へ進みます。

この概念的特徴からLLに関する問題点を考えると、LLを視聴覚的一方法であると考えないでpanaceaと考えたり、curriculumの中での位置づけ、時間割の関係に問題があるように思えます。

例を中学校にとって見ますと、授業時間数を1年生4時間、2年生4時間、3年生5時間とします。この週授業時間の中でLLを何時間とれるかということは教材の扱いにとつて大切です。しかし、一般には、全学年の形式的公平のために各1時間というのが多いようです。4時間ないし5時間のうち1時間をLLにとり、指導要領の最低基準、教科書の編成や、授業の流れの中におけるLLの役割と言う諸点を考慮して教材を組み立てることは言うに及びませんが、多くの問題点を含んでいます。

次に、LLでなければ効果がない

という教材が作成される必要があります。LLの特徴を生かし、LLを用いない授業より客観的に効果⁴⁾がある内容のものでなければ意義は薄れてしまうことになります。極端な場合には、不正確な教材、機械の操作不良、学習方法の基本的間違いのために、学習効果があがらないような方向に進むことすらあるように思えるからです。例えばphonemic discriminationの教材を作成するとなります。distinctive featuresをnon-native speakerが、文字通りdistinctivelyにと言うよりも、不自然な誇張で発言してtestをしたり、practiceをしても、あまり効果を期待できないし、むしろ、普通授業でpropsやpartials⁵⁾を用いて指導した方がよい場合もあります。また、LLがAP型の場合、次のような欠陥に気付かず使用している例を見受けます。AP型では、学習者の自音を再生回路を通してfeed-backできません。従って、productionのためのpracticeをしても、正しいacoustic imageを形成することはむずかしいと言えます。これは、自分の耳に栓をして発声練習をするのと同じような不自然な結果になるからです。

では、LLでなければならない教材とは何かということになりますが、LLの特徴を生かし、curriculumの言語材料⁶⁾を分析し作成することは言うまでもありません。学校のcurriculumに即した完全な準拠教材があれば、それを利用することが賢明ですが、市販されているものの中には、適当なものが少ないようです。この言語材料の分析と教材作成の方法の研究とは、今後のLL研究の一つの方向であると思います。

以上、LLについて総括的に述べましたが、次に、教材作成の方向を決定する、LLの位置づけについて考えてみたいと思います。LLの学

習に関しては、多くの人が、pre-laboratory work, laboratory work, post-labotary work の 3 つの work を 1 単位と考えているようです。例を構文にとりますと、先に述べました LL でなければならぬという教材の基本的なものの呈示と、その内容把握は pre-lab work で行なわれ、その運用力を高めるために、substitution, conversion, expansion からなる variation の段階と selection のあるものは laboratory work で効果的に行います⁷⁾。次に、post-lab work として laboratory work でできなかった点、あるいは共通の問題点を扱って仕上げる訳です。この 3 つの work を unit と考えれば、普通授業の時間数と同じ LL 授業の時間数が必要となります。ELEC 研修所の中学生コースがこの型をとり、復習を中心教材として LL 授業が行なわれています。しかし、一般的に言って、学年均等割で LL の授業時間を持つとなると、先に触れました通り、週 1 時間がとれるかとれないかと言ふことになります。この場合、復習を LL で行なおうとすると、授業進度、学校行事等の条件で運営上むずかしくなります。例えば、何らかの理由であるクラスの LL work が cut されると、折角準備したもののが水泡に帰すだけでなく、他クラスとのバランスを失い、後の授業がやりにくくさえなります。この 1 時間の LL を普通授業と完全に coordinateさせた例は学校規模の小さいところか、LL をいくつ持っていて、かなり自由に授業変更が可能であるか、あるいは特定の LL 研究者だけが使用しているようなところでのみ可能です。従って、週 1 時間の時間配当のところでは、文字通り準拠ということで、教科書と完全な coordination をとらずに、文法項目を普通授業と合わせたり、phonemes だけを扱う独立教材を用いたりして利

用することが多いようです。

一方、LL の位置づけは理想に近くできたとします。しかし、教材そのものの問題点がでて来ます。まず、普通授業と完全に coordinate した型で運営するとしても、140 時間分（週 4 時間 × 年間授業予定週 35）の教材は市販されていないし、自作を試みるとして、時間と費用を相当必要とします。20 分の Tape 教材を作成する時間と費用の概算は次の通りです。

script 作成時間（作成者によって異なるが、typing out を含めて假に）

90 分

native speaker 拘束時間 30 分

native speaker への pay（条件によって異なるが） 1,500 円

従って、140 時間分とすると、

時間 2 時間 × 140 = 280 時間

費用 1,500 円 × 140 = 210,000 円

更に、3 学年分とすると、

時間 280 時間 × 3 = 840 時間

費用 210,000 円 × 3 = 630,000 円

となります⁸⁾。現実的に言って、自作教材は余程整った条件がないとむずかしいと思います。しかし、全学年分の教材が完成し、教科書の改訂に対処しながら、教材の改訂を行なって利用すれば、LL の効果は大いに期待できる筈です。

では、最初の問い合わせに戻って、LL をどのように扱ったらよいか、教材をどうしたらよいかという点ですが、すでに述べて来たものをまとめとし、次の 2 点に留意すれば答えがでると思います。

1. LL の位置づけを明確にする
2. 教材作成方法を決定する

もち論、立場の相違、考え方の相違により LL 観も異なり、扱いも異なることでしょう。しかし、主觀に過ぎる評価、印象批判によって、過大評価をしたり、先に計算したような時間と費用を過小視して LL を設置したり、運営しようとなれば、危

険とさえ言えます。現時点では、LL を視聴覚的一方法として、それを使用する仕方というものを、更に研究することが必要ではないかと思います。勢込んで始めて、途中で使用不能になったりしては、かえって使用しなかった方が効果的であるかも知れません。特に、LL 設置の初年度は、普通授業の中で無理なく LL に譲れる点を LL で行ない、市販 tape を選択して序々に集め、編集等で準拠的に使用できるものは利用するという方法が賢明な策と言えます。また、LL と言う言葉に拘束されないで、linguaphone type の教材も利用する等、広く考えることも必要です。（以上の諸点の中で、ELEC・LL Staff 桜井・増永両主事、堀・原野両技術員の示唆によるものもありますが、文責は橋本にあります。）

〔注〕 1) AP: Audio-passive lab (聴取装置)

AC: Audio-active lab (聴取・再生装置)

AAC: Audio-active-comparative (聴取・録音・比較装置)

「視聴覚教室」『現代英語教育講座 11』 p. 47 ff.)

2) LL の定義に関しては金田正也氏「語学ラボラトリーの定義について」(『名古屋学院大学論集第 8 号』(1966))

音声教材面からの性格論としては河野守夫氏「言語音声教材の性格」(『関西学院大学文学語学論集記念号』(April, 1967)) が詳しい。

3) 「視聴覚教室」 p. 4

4) 学習効果と言う term については定義を要するが、一般的の意味が用いてある。

5) Robert Lado, *Language Teaching* p. 80 ff.

6) 言語材料だけでなく、風俗習慣等の理解のためにも利用できる。

7) variation, selection の段階中、特に Response の單一指向性とでも言うべき、反応の方向づけが LL では重要となる。

8) 錄音をする場合 Taperecorder の性能、studio の問題等ありますが、ここでは避けます。

昭和42年度事業計画

財団法人 英語教育協議会

本法人は、内外各界の深い理解と熱心な支持のもとに着々発展をとげ、法人としてその第5年度に入ることになった。また、その前身日本英語教育研究委員会の発足から通算すると活動は11年目に入るわけである。

本法人は、昭和40年度においてその本拠であるELEC会館の竣工開館を見、わが国における英語教育の科学的進歩と改善をめざして、いよいよ本格的な活動推進の段階に入ったが、本年度においては、英語教員を対象にELEC奨学金制度を拡大し、夏期研修会の開催を増加するなど、さらに活発な事業活動を展開して法人の目的と使命の達成のため努力せんとするものである。

1 英語教育に関する研究

この分野において、本法人はELEC会館に設けられた研究室を用いて欧米各国で展開されている新しい外国語教育理論と技術を調査研究するほか、日英両語の言語学的分析比較、教材・教授法の基礎研究、中学校・高等学校より大学にいたる英語教育の一貫性の研究等、英語教育全般に関し科学的研究を行なうものであるが、本年度においては服部理事を中心専門家および外国人インフォーマントの協力のもとに、日英両語の音韻、文法、特に基礎語彙の比較研究を、前年度に引きつづき重点的に行なう計画である。

2 英語教員に対する専門的な講習会の開催

(1) ELEC 夏期研修会

英語教授法の改善と英語教師の資質の向上とが英語教育の進歩のためきわめて重要なことは言うまでもない。この目的のため昭和32年日本英語教育研究委員会によって創始され、爾来毎年実施されてきたELEC夏期講習会で専門的な訓練をうけた中・高英語教員は昨年まで、

すでに4,763名を数えている。昭和40年度から、その名をELEC夏期研修会と改めたが、本年度はこれを中央で2回、地方で4回開催する計画である。中央開催の分は本法人において直接主催し、地方開催の分は地方の団体が主催し、本法人はこれに対し講師および教材を提供して技術的援助を行なうものである。これらの研修会の講師は、いずれも英語の教授法における新しい指導理論と指導技術につき経験をつんだ人たちで、しかも英語の実地訓練はすべて英語を母国語とする外国人教師によって行なわれることは、この研修会の伝統であり、特色である。また、本年度の研修会はいずれも合宿制である。

各研修会場別開催要領は以下の通りである。

A 中央研修会 (ELEC主催)

(1) ELEC 夏期研修会・前期(中学校英語科教員対象)

期 間 7月28日—8月9日 (13日間)

会 場 ELEC会館；研修者 160名

外人講師 8名；宿 舎 九段会館

(2) ELEC 夏期研修会・後期(高等学校英語科教員対象)

期 間 8月16日—28日 (13日間)

会 場 ELEC会館；研修者 160名

外人講師 8名；宿 舎 九段会館

B 地方研修会 (ELEC後援)

(1) 北海道英語教育指導者講習会

主 催 旭川市教育委員会、その他

期 間 7月31日—8月9日 (10日間)

開 催 地 日大旭川高校男子部；研修者 100名

外人講師 5名；宿 舎 開催地に同じ

(2) 西日本英語講習会

主 催 西日本英語講習会

期 間 8月1日—11日 (10日間)

- 開催地 宮崎県えびの高原；研修者 100名
外人講師 5名 宿舎；りんどう荘
- (3) ELEC 夏期北陸ブロック講習会
主催 新潟市中学校教育研究協議会
期間 8月15日—24日（10日間）
開催地 新潟市立宮浦中学校；研修者 125名
外人講師 5名；宿舎 新潟県青年の家
- (4) 四国地区英語教育指導者講習会
主催 徳島県教育委員会、その他
期間 8月19日—28日（10日間）
開催地 県立徳島商業高等学校；研修者 100名
外人講師 5名；宿舎 眉山荘
- (2) ELEC 奨学金制度
わが国の英語教育の進歩向上をはかるためには、これに携わる英語科教員の資質向上が急務であることに鑑み、本法人は ELEC 英語研修所において當時英語科教員の現職訓練に努力してきたが、前年度においては R.H. マイヤー財團からの寄付金により、少数の英語科教員に奨学金を支給し、その研修を援助した。本年度にあってはこれを全面的に拡大して、本格的な奨学金制度を設け、年間約60名の英語科教員に対し、1名当たり約11万1千円の奨学金を支給し、ELEC 英語研修所において約3か月の専門的な研修を実施する計画である。
その要領は次の通りである。
1. 名称 ELEC 全額支給奨学金
 2. 趣旨 英語科教員の資質の向上をはかるためその研修を援助する
 3. 対象 国・公・私立中学校・高等学校英語科教員で ELEC 英語研修所において研修することを希望する者
 4. 支給の内容 ELEC 英語研修所において研修するために必要な学費、書籍代、宿泊費、食費、旅費、雑費等の3か月分。1名当たり計約11万1千円
 5. 支給予定人員 各学期約30名 年間約60名
 6. 応募資格 (a) 国・公・私立中学校・高等学校英語科教員（当研修所入学のため休職する者を含む）
(b) 1か年以上教職経験があること
(c) 年令45以下であること
(d) 引続き英語科教員として勤務し、英語教育のために努力する熱意を有する者であること
(e) 健康であること
 7. 研修回数および期間(a)・授業時数(b)・学期区分(c)
(a) 年間春学期および秋学期の2回実施、各約11週間（約3か月）
(b) 週当たり約25時間。計約275時間授業
(c) 春学期 5月—7月
秋学期 10月—12月

8. 研修の内容 (a) 口頭英語の運用能力の訓練
(b) 英語教育法の学習（講義、演習及び教育実習）
(c) 言語学、音声学等の学習
(d) Language Laboratory における演習
(e) その他英語教育に必要な知識技能の習得

3 英語教員以外の者に対する英語講習会の開催

(1) ELEC 英語研修所

この事業は、教員のみならず、公務員、会社員、大学生、その他一般の希望者に対し、常時、効果的な英語学習の機会を提供し、それにより、わが国と諸外国との政治、経済、文化等、あらゆる面における理解の増進と提携交流の促進に資することを目的とするものである。

昭和40年1月以来、ELEC会館の新築竣工に伴い昼間夜間にわたり、多くの新しいコースを設けてきたが、本年度はさらに入門科と研究科を増設するほか、その質的な改善を加え、つぎのように実施する計画である。

a. 昼間部

1. 入門科 2. 本科（前期・中期・後期・教員研修科）3. 選科（前期・中期・後期）4. 研究科 5. 委託生科（官庁、会社の委託生、フルブライト委員会委託生等）

b. 夜間科

1. 入門科 2. 普通科（前期・後期）3. 上級科（前期・後期）4. 集中科（前期・後期）5. 研究科 6. 教員研修科

c. 併設

中学生科（1年生コース・2年生コース）

- d. 研修生の募集人員および学級数は次の通りとする。
昼間部 350名 17学級
夜間部 950名 36学級

e. 教師の人員は次の通りとする。

外国人講師 30名

日本人常勤および非常勤講師 約13名

(2) 委託生のための特別研修

官庁、会社、団体などの委託をうけて、その職員のための英語研修を行なう特別学級を設ける。

a. 昼間部委託学級

1. 会部委託学級

日本鋼管、アラビア石油各会社の委託学級を引き継ぎ実施するほか、その他の会社からの委託を引受けける。

2. 団体委託学級

在日合衆国教育委員会（フルブライト委員会）の委託学級を前年度に引き継ぎ実施する。

b. 夜間部委託学級

日本損害保険協会の委託学級を引き継ぎ実施する。

c. 以上のほか、一般のコースにおいて研修する委託生については前年度と同様である。

(3) 語学演習室 (Language Laboratory) の整備充実
この施設は演習室 2 室 (各室 30 ブース、1 室はフル・ブース制、他の 1 室は聴取式)、調整室、録音室、修理室、テープライブラリーより成るが、本年度はさらに学級数も増加するので、従来の設備を整備補修するほか、聴取式設備の改造と普通教室教室に簡易演習設備を取り付けることを行ない、これに主事 3 名、技術員 2 名を配し、さらに非常勤講師 2 名を加え、研修所各コース所属の研修生に対して語学演習を行なう。

なお、録音室を用いて録音教材の作成を行なう。

(4) 図書室の整備充実

本年度においては蔵書数の増加をはかるとともに、若干の人的および物的整備に着手する計画である。

4 英語教育に関する資料の作成頒布

近代の言語観およびそれに伴う応用言語学の研究成果に基づいた英語教材および資料の作成は、わが国における英語教育の改善と進歩に不可欠の要件であって、本法人は従来からこの分野でも力を注いできたが、本年度における計画は次の通りである。

(1) 中学校英語教科書 "New Approach to English" の改訂

本年度においてこの教科書の 4 分の 1 以内の改訂を行なう。

(2) "ELEC Bulletin"

英語教育に関する論文、記事、本法人の活動に関する報告を掲載した本法人の機関誌 "ELEC Bulletin" を本年度中に 4 回発行する。

(3) "ELEC PUBLICATIONS"

一流言語学者による研究論文、講演原稿等を掲載し、あわせて本法人の事業活動に関する報告を収録したこの英文刊行物の第 9 卷を本年度中に刊行する。

(4) 中学校上級および高校向け補助教材の作成

中学校上級および高校等の課外の会話練習用教材として、笑話を中心とした Controlled conversation の教材の編さんを行なう。この教材は 2 卷から成り、各巻笑話を中心に drill を展開することを狙ったものである。

5 英語教育に関する研究に対する援助と助言

最新の言語観に基づいた新しい英語教授法の優秀性を一般に認識せしめて、その普及をはかることは本法人の大きな使命の一つである。この分野における本年度の計画は次の通りである。

(1) 研究協力校に対する援助助言

ELEC の研究協力校および準研究協力校となっている下記 5 校に対し、定期的に講師を派遣して英語教育に関する援助助言を行なうほか、要請があれば新たに研究協力校を委嘱する予定である。

茨城県水海道市立水海道中学校

北海道幌別郡幌別中学校

福岡県大牟田市橋中学校

神奈川県横浜市浅野中学校

佐賀大学教育学部付属中学校 (準研究協力校)

(2) ELEC 英語教育研究大会

昭和 40、41 両年度に引き続き第 3 回 ELEC 英語教育研究大会を 11 月初旬 ELEC 会館において開催の予定である。この大会では斯界の権威に講演を依頼し、Oral Approach による実演授業および中学校と高等学校の部会を開き、英語教育上の諸問題を研究討議し、わが国の英語教育の水準向上に寄与せんとするものである。

(3) ELEC 賞の授与

昭和 41 年度に引き続き、英語教育の水準向上に直接貢献する研究論文または実践記録を審査し、適当なものがあれば 1 件を選び、それを提出した個人または団体に対して ELEC 賞を授与する。

(4) 各地研究会に対する講師の派遣

全国各地の英語教育研究団体等の要請に応じて、講師を派遣して英語教育に関する研究活動に対し援助助言を行なう。

(5) 英語教育相談

英語教育上の諸問題について英語教員その他から受けた質疑や相談に対し、文書または面接により回答し、助言する。

(6) ELEC 同友会活動の推進

中央において ELEC 同友会大会を開催し、地方において地方支部の結成を援助促進するほか、隨時講師を派遣して支部の活動に対し援助助言を行なう。また、毎月 1 回月例研究会を ELEC 会館において開催する。

6 語学教育研究諸機関との連絡協力

語学教育に関する学術的ならびに実際的な研究成果の交流をはかるため、内外の諸大学言語研究所をはじめ、各種の語学教育研究機関との間に刊行物および情報の交換を行なって、緊密な連絡協力を行なう。

7 その他目的を達成するために必要な事業

職員の在外研究

本法人の事業推進に資すため、本年度中に本法人の職員 1 名または数名をして在外研究に従事せしめる。

昭和41年度事業報告

昭和41年度は、日本英語教育研究委員会の発足から通算して、ELEC 創立の10周年にあたる意義深い事業年度であった。本協議会においては、10年という一つの区切り点に立って、これまでの歩みのあとを回顧、評価するとともに、将来への決意を新たにしつつ、英語教育に関する研究および研修活動をはじめとして、わが国英語教育の改善と進歩のための諸事業の推進に努力した。

1 英語教育に関する研究

英語教育に関する基礎的な学術研究として、昭和39年4月に開始した日英両語の比較研究は、本年度においても服部四郎理事（東京大学教授）を中心にこれを進め、研究は、日本語の基礎語彙の研究、日本語基礎的単語の意義素体系の研究、日英両語の基礎的単語の意義素の対照的研究、日本語および英語の変形文法研究、日英両語の発音の対照研究および日英両語の表現構造の対照研究にわたった。

2 英語教員に対する専門的な講習会の開催

(1) ELEC 夏期研修会

わが国の中学校および高等学校の英語科担当教員を対象とし、新しい言語学の理論に基づいた英語学習の指導理論と指導技術とを体得させ、その資質の向上に役だたせることを目的として、昭和32年以来毎夏期休暇時に実施してきた ELEC 夏期研修会は本年度で第10年を迎えた。

1966年度 ELEC 夏期研修会は全部でこれを4回催した。そのうち、本協議会が直接主催する「中央研修会」は、ELEC 英語研修所で前期および後期の2回を催し、本協議会が講師を派遣して技術的援助を行なう「地方研修会」は、旭川と宮崎県えびの高原の2か所で開催した。いずれも7月下旬から8月下旬にいたる期間中に11日ないし13日の会期でこれを実施した。研修者は中央および地方の4研修会を通じて556名で、ELEC 夏期研修会開始以来の研修者累計は4,763名となった。

各研修会の概要は次のとおりである。

1. 中央研修会・前期(中学校英語科教員対象、合宿制)

名 称：1966年度 ELEC 夏期研修会(前期)
主 催：財団法人英語教育協議会
期 間：7月28日～8月9日(13日間)
会 場：ELEC 英語研修所
宿 舎：九段会館(千代田区九段1-5)

外国人講師：8名

研修者：169名

2. 中央研修会・後期(中学校・高等学校英語科教員対象、通学制)

名 称：1966年度 ELEC 夏期研修会(後期)
主 催：財団法人英語教育協議会
期 間：8月12日～24日(13日間)
会 場：ELEC 英語研修所

外国人講師：8名

研修者：163名

3. 北海道地区研修会

名 称：第5回北海道英語教育指導者講習会
主 催：北海道上川地方教育局、同旭川市教育委員会、同上川管内教育研究会、同旭川市教育研究会
後 援：財団法人英語教育協議会
期 間：7月29日～8月8日(11日間)
会 場：旭川市、日本大学高等学校男子部
宿 舎：同上寮

外国人講師：4名

研修者：102名

4. 九州地区研修会

名 称：第6回西日本英語講習会
主 催：宮崎県教育委員会、同中学校高等学校英語教育研究会、宮崎大学教育学部、南九州短期大学
後 援：財団法人英語教育協議会
期 間：8月13日～23日(11日間)
会 場：宮崎県西諸県郡飯野町えびの高原りんどう荘
宿 舎：同上

外国人講師：5名

研修者：122名

本年度夏期研修会における外国人講師17名の氏名とその担当研修会は次のとおりであった。なお、ELEC 顧問 Charles T. Scott 教授も、中央および地方の4研修会において英語教育に関する講演を行なった。

G. Kenneth Bernhard	ELEC—I
Hugh Brown	ELEC—I Ebino
J. Randolph Castile	ELEC—I ELEC—II
Mrs. J. R. Castile	ELEC—I ELEC—II
Clare Lee Colegrove	ELEC—I

C. R. M. Cooke	ELEC-II
Clifford V. Harrington	ELEC-II
Miss Elizabeth C. Huddle	Ebino
Miss Judith Naomi Kurz	ELEC-I Ebino
Richard P. Leavitt	ELEC-I ELEC-II
Edwin Merner	ELEC-I ELEC-II
Richard D. Moores	Asahigawa
Miss Lucy Ray	Asahigawa Ebino
Miss Lillian Soga	ELEC-II Asahigawa
Mrs. Barbara Swann	Ebino
Hildebert Van Buren	Asahigawa
Edmund C. Wilkes	ELEC-II

(2) ELEC 英語研修所における英語教員の研修

ELEC 英語研修所 (The ELEC Institute) は、常設の英語講習会として昭和36年開設以来、英語教員ならびに一般人に対し英語の研修を施してきた。本年度においては英語教員の現職教育のためのコースとして昼間部にあっては本科教員研修科（1週5日、1日5時間）、夜間部にあっては教員研修科（1週3日の組と2日の組があり、いずれも1日3時間）を設け、研修課目には英語のドリルのほかに言語学、教授法などを含めた。本年度中にこの研修所で研修した中・高英語科教員は次のとおりであった。

春 学 期 (昭和41年4月～7月)	79
秋 学 期 (同 年 9月～12月)	71
冬 学 期 (昭和42年1月～3月)	62
計 212名	

(3) 英語教員に対するマイヤー奨学生

昭和40年米国ニューヨークの実業家 R. H. Meyer 氏から当協議会に提供された寄付金により、国公立中学校英語科教員を対象としてその ELEC 英語研修所における研修を援助し、もってその現職教育に資することを目的として設けたこの奨学生には、(a) 東京都および近郊以外に在住の者約5名に4か月分の研修費、旅費、滞在費等約138,800円を支給する「全額支給奨学生」と、(b) 東京都および近郊に在住の者約35名に研修費、書籍代等の1か年分約31,600円を支給する「学費支給奨学生」の2種類とがあり、前者は昭和41年4月から7月にいたる春学期にこれを実施し、後者は同年1月の冬学期から実施を開始した。

多数の申請者中から選考されてこの奨学生を受領し、ELEC 英語研修所で本年度中に研修した英語教員数は次のとおりであった。

全額支給奨学生	5名
学費支給奨学生	22名

3 一般人に対する英語講習会の開催

(1) ELEC 英語研修所 (The ELEC Institute)

この研修所では、上述のとおり中学校および高等学校英語科教員に対する現職教育のほか、会社員、公務員、大学生、その他一般人を対象に新しい言語学の理論に基づいた効果的な英語学習の場を提供し、従来の英語教育が与え得なかったものを与えて、国際間の交流促進に資するための活動を行なっている。

研修所におけるコースはこれを昼間部と夜間部とに分かち、昼間部には本科（前期、中期、後期）、本科教員研修科、委託生科、普通科（前期、中期、後期）を設け、夜間部には普通科（前期、後期）、上級科（前期、後期）、集中科（前期、後期）、教員研修科を設け、ほかに併設コースとして中学生科を設けている。

本年度における研修所在籍者数は、教員研修者を含めて、春学期は1,192名で、うち815名が修了証書を受領し、秋学期は1,116名で、うち修了証書受領者799名、冬学期は1,000名、うち修了証書受領者827名であった。

研修所における講師の大多数が英語国民であること、そして教授法は最新の言語学的研究成果に基づくものであることはその特色であるが、本年度における専任および非常勤外国人講師は、春学期22名、秋学期20名、冬学期24名であった。これら外国人講師の氏名と出身大学は、以下のとおりである。

Miss Carolyn Benbow	University of Michigan
Mrs. Gretchen Benner	Columbia University
Paul Brenner	City College of New York
Hugh Brown	Virginia Polytechnic Institute
Miss Janet M. Callender	University of Sacred Heart
Sydney B. Cardozo, Jr.	Dartmouth College
C. R. N. Cooke	Queen's University
Lester J. Coulter	University of Hawaii
Miss Evelyn Goldberg	Columbia University
Clifford V. Harrington	San Jose State University
Luther J. Link	University of Michigan
Brian W. Lynch	University of Hawaii
Edwin Clark Merner	Sophia University
Milan Mihal	University of Michigan
Richard Moores	University of Michigan
John E. Mosher	Montana State College
J. Paul Noonan	Harvard University

Ernest A. Richter	University of California
Miss Barbara Shenkman	Sarah Lawrence College
George A. R. Silver	Yale University
Albert A. Silvestri	San Francisco State College
John D. Spillum	University of North Dakota
Mrs. Barbara B. Swann	University of Arizona
Russell S. Trenholme	New York University
Nathan N. White	University of California
Edmund C. Wilkes	Columbia University

なお、昭和40年8月末からELEC顧問として来任した米国ウィスコンシン大学言語学準教授Charles T. Scott博士は昭和41年8月末まで滞在し、その専門的学識により研修所外国人講師の指導、研修内容の充実等の任務に従事し、研修所の質的強化に寄与するところがあった。

(2) フルブライ特留学生のための特別研修

在日合衆国教育委員会(フルブライ特委員会)からの依頼により、米国留学予定日本人に対し、昭和38年以来実施している集中的な英語研修は、本年度にあっては春学期に56名、冬学期に18名、計74名に対して行なった。

(3) 特別学級

会社、団体等から委託をうけて、その職員の英語研修のため本年度中に実施した特別学級は次のとおり。

日本鋼管株式会社学級(春学期40名、秋学期15名、冬学期21名)

アラビア石油株式会社学級(春学期14名、秋学期21名、冬学期14名)

日本損害保険協会学級(冬学期13名)

(4) 皇太子殿下の英語御研修

宮内庁からの要請により、当協議会から外国人講師1名を毎日東宮御所に伺わせて、皇太子殿下の英語御研修のお相手を勤めしめる件は、前年度に引きつづき昭和41年7月までこれを実施した。御相手には本協議会顧問

Charles T. Scott博士が当った。

(5) 米国人フルブライ特英語教師に対する指導

在日合衆国教育委員会では、日本の大学等で英語の教授に従事するためフルブライ特計画により来日する米国人英語教師に対するオリエンテーションは、従来教師の米国出発前ミシガン大学英語研究所に依頼してこれを行なってきたが、昭和41年から教師の日本到着後ELEC英語研修所においてこれを行なうよう依頼があるので、特別の課程を作成して昭和41年9月19日から30日にいたる期間米国人フルブライ特英語教師4名に対し、外国语としての英語教授に関する指導を行なった。これが終って、4人の教師はそれぞれ東京、大阪、愛知、熊本の各学芸大学へ赴任した。

4 英語教育に関する資料の作成頒布

この年度中に本協議会が新たに作成または改訂の上刊行した英語教育資料は下表のとおりである。

5 英語教育に関する研究に対する援助と助言

(1) ELEC研究協力校に対する援助助言活動

本年度におけるELEC研究協力校および準研究協力校は下記の5校で、これらの学校に対し本協議会は定期的に講師を派遣して英語教育に関する援助助言活動を行なった。

茨城県水海道市立水海道中学校

(5月、6月、10月、3月)

北海道幌別郡登別町幌別中学校

(5月、7月、9月、10月、11月)

大牟田市橋中学校(9月、11月、1月、2月)

横浜市浅野中学校(9月、10月、3月)

佐賀大学付属中学校(準研究協力校)

(7月、9月、10月、12月、2月)

(2) 講師の派遣

英語教師によって組織されている全国各地の英語研究

書名	著者	発行者	刊年月行日
ELEC PUBLICATIONS Vol. VII	ELEC	研究社	昭和41年4.15
ELEC Bulletin No. 18	ELEC	学習研究社	6. 1
新しい英語教育(改訂新版)	山家 保	ELEC	7. 25
Preliminaries to English Teaching	C. T. Scott	ELEC	8. 30
ELEC Bulletin No. 19	ELEC	学習研究社	11. 1
英語学力テスト I, II, III	代表松下幸夫	学研書籍	昭和42年3. 1
ELEC Bulletin No. 20	ELEC	学習研究社	3. 1

会等からの要請に応えて、講演、実演授業、指導助言等のため、本協議会がこの年度中に行なった講師の派遣状況は次のとおりであった。

群馬県高等学校英語教育研究総会（5月）
徳島県英語学会中央支部研修会（6月）
東京都立教育研究所（6月）
旭川市英語科研究会（6月）
栃木県塩谷地区英語教育研究会（7月）
大牟田市中学校英語教育研究会（7月）
大牟田市英語ワークショップ（8月）
胆振管内学習指導法研究集会（9月）
旭川市英語教育研究会（9月）
武生市高等学校英語研究会（10月）
丹南地区中学校英語研究会（10月）
福岡学芸大付属中学校校内研究会（10月）
第14回福島県視聴覚教育研究大会（10月）
長野県教育センター主催英語教育講座（10月）
YMCA 第4回小・中学生英語科講師セミナー（11月）
佐賀大付属中学校公開研究会（11月）
徳島県英語教育視聴覚研究会（11月）
徳島市中学校英語教育研究会（11月）
水海道市中学校英語研究会（11月）
北海道虻田中学校英語科研究会（11月）
水海道市中学校英語研究会（12月）
函館市中学校英語教育研究会（1月）
大牟田市英語教育研究会（1月）
旭川市英語教育研究会（2月）
北海道胆振地区英語教育研究会（2月）

6 語学教育研究諸機関との連絡協力

国内および国外の諸大学、言語教育研究諸機関との間に、研究成果に関する情報を交換して緊密な連絡をはかるため、この年度中に本協議会は内外多数の大学および研究機関との間に刊行物の相互交換を行なった。

7 その他目的を達成するために必要な事業

（1）外国人顧問

本協議会に顧問として招聘され、滞在1年の予定で来日した米国ウィスコンシン大学言語学準教授Charles T. Scott 博士は、昭和40年8月25日到着以来 ELEC 英語研修所の項に記載の諸任務ならびに教材作成、ELEC 夏期研修会その他各地における講演に従事するほか、既述の皇太子殿下の英語御研修に当り、本協議会の事業推進に大きく寄与して、昭和41年8月23日離日帰国した。

（2）職員の在外研究

英語教育に関する研究と諸外国における言語教育機関

視察のため、この年度中に本協議会から佐藤貞友主事と串原国穂主事の2名が海外出張を命ぜられた。佐藤主事は昭和41年9月8日本邦を出発、米国 Michigan 大学で研究のうち欧州各国を経て12月14日帰国し、串原主事は昭和42年1月1日出発、米国 Pittsburgh 大学で研究のうち、欧州各国を経て4月帰国の予定である。

（3）ELEC 10周年記念行事

昭和41年は、日本英語教育研究委員会の発足から通算して ELEC 創立10周年に当たるので、これを記念し、かつ将来に向って事業の発展を期する目的で、本年度中に次の行事を行なった。

- イ、ELEC 英語教育研究大会（ELEC 同友会大会）を記念行事の一環として昭和41年11月5日 ELEC 会館講堂で開催した。
- ロ、ELEC 10周年記念昼食会を12月3日 ELEC 会館講堂で開催した。席上、文部事務次官福田繁氏、在日米国大使館文化担当公使 Charles B. Fahs 博士および経済団体連合会会長石坂泰三氏の有益な演説があった。
- ハ、冊子「ELEC の沿革と事業 1956—1966」を12月刊行した。なお、その英訳文も作成した。
- ニ、機関誌“ELEC Bulletin”第19号を10周年記念特集号として11月学研から発行した。
- ホ、英文誌“ELEC PUBLICATIONS”第8巻を10周年記念号として、本協議会理事および外国人顧問等の執筆にかかる英語および言語学に関する論文、メッセージを収録して刊行することを計画し、同巻は現在印刷中で、近く研究社から発行の予定である。

◆ ELEC 英語研修所秋学期

ELEC 英語研修所の秋学期は9月12日（火）に開講の予定で、7月1日から申込順に受け付け、定員に満ち次第締切ることになっている。詳細は同研修所に問い合わせられたい。

◆ ELEC 夏期研修会

1967年度 ELEC 夏期研修会は下記の通り実施される。
(いずれも合宿制)

中央研修会（ELEC 主催）於 ELEC 会館

- （1）中学校教員対象（7月28日～8月9日）
- （2）高校教員対象（8月16日～28日）

地方研修会（ELEC 後援）

- （1）北海道英語教育指導者講習会
於日大旭川高校（7月31日～8月9日）
- （2）西日本英語講習会
於宮崎県えびの高原（8月1日～11日）
- （3）ELEC 夏期北陸ブロック講習会

（p.30 につづく）

ELEC Library 寄贈図書一覧

(1967・1~1967・5)

【寄 贈 者】

大研三省福井県教育研究会英語部会文化センター全日本音声学者総合学会東京都高等学校英語教育研究会タルル商會大阪芸術大学英語英文学教室アジア財團

【図 書 名】

英語教育 1, 2, 3, 4, 5, 6 月号
現代英語教育 1, 2, 3, 4, 5, 6 月号
英語教育 1, 2, 3, 4, 5 月号

会報(研究集録合併号)
1967・3・1 25号

English Teaching Forum
Vol. V, No. 1

音声学会会報第122号

研究集録第2集

American English 1~6
英文学会誌第12号

Contemporary Readings in
General Psychology

他36冊

研究集録 昭和41年度 No. 3

プログラム学習に基づいた英語音
声プログラム——プログラミングとその問題点——
(名古屋大学論集第9号)
言語音声教材の性格
(文学語学論集記念号)

宮城県中学校教育
研究会英語研究会
町田 隆哉

河野 守夫

Feller and Simons, Great Woman Teachers 他3冊
Inc.

静岡大学教育学部 英語研究会 The Promising age No. 7

高橋 源次 全英連高校基本英単語活用集

ELEC 同友会告知板

◆ELEC同友会臨時総会

1967年3月25日に行なわれたELEC同友会臨時総会において規約の一部改正が審議され、つぎの通り可決された。

第12条(会計)

(3) 会費は、年額500円とする。

会費値上げの理由は郵送料(ELEC Bulletin 送付)によるものであり、1967年5月1日から実施されている。

◆月例研究会

毎月第4土曜日(午後2時~4時)にELEC会館で行なわれている月例研究会の予定は次の通りである。

第15回月例研究会 6月24日(土)

研究発表「心理学と外国语教育」

ELEC研修課長 松下 幸夫

第16回月例研究会 7月22日(土)

講演「未定」

国際キリスト教大学教授 清水 譲

第17回月例研究会 9月30日(土)

講演「言語心理学と外国语教育の現状」

東海大学講師 入谷 敏男

◆会員名簿1968年版を作成したく存じます。住所、勤務先などに変更があった場合は必ず本部までお知らせ下さい。

◆ELEC同友会の支部を各地で結成していただきたく存じます。結成される場合は、規約・会員名簿・役員名等を本部にご連絡下さい。

ELEC 賞研究論文・実践記録募集

財団法人英語教育協議会(ELEC)はわが国の英語教育の水準向上、あるいは英語教授法の改善に直接役立つ実践研究を奨励する目的で研究論文または実践記録を募集している。原稿の締切は毎年9月末日で、わが国の英語教育の水準向上、あるいは英語教授法の改善に直接貢献するところ大と認められたもの1件に対しELEC賞を授与する。

原稿募集

ELEC Bulletin は現場の声を歓迎します。

◆ELEC Eorum.....400字詰原稿用紙15枚以内
英語教育についての自由な意見、ELECに対する要望、批判、提案など。

◆Ideas Corner.....400字詰原稿用紙10枚以内
英語教育における技術上の new idea について。

◆Reports & Articles.....400字詰原稿用紙20枚。
現場における実践記録や研究論文など。

◆Question Box.....用紙は自由。

英語教育上の指導理論および指導技術について。原則として誌上解答する。

◆英語教育相談室.....用紙は自由。

英語教育一般に関する質問と相談。

◆研究会だより.....400字詰原稿用紙6枚以内。
都道府県あるいは市郡単位の英語教育研究会(研究サークル)の組織と活動状況を紹介するもの。

稿 料

Question Box や「英語教育相談室」を除き、いずれも規定に従って稿料を呈します。

ELEC BULLETIN

第21号

定価180円(送料45円)

昭和42年7月1日 発行

◎ 編集人

財団法人英語教育協議会
主幹 中島文雄

東京都千代田区神田神保町3の8
電話(265) 8911~8916

発行人 古岡秀人

印刷人 山田三郎太

発行所 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池上町264

電話 東京(720) 11111

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC